ドール

ryoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドール

【Ｎコード】
Ｎ９３０４Ｎ

【作者名】
ｒｙｏｋｕ

【あらすじ】
戦争の道具として作られた“ドール”。
彼らの働きで長きにわたる戦争は終結をむかえた。
しかし戦う術しかもたない彼らの戦後の話。
第一部、第二部、番外編とある長編です。

プロローグ

一面に広がる砂と、もはや原形もわからないゴミの様な遺物が転がる世界が眼下に広がる。

そこにあの人は居た。

何をするでもなく・・・・。

荒れ果て砂丘に埋もれた1つの墓標をただ見つめて・・・。

何故か俺は・・目を離すことができなかった。

プロローグ

およそ２００年も続いた、長き戦争は新しい兵器によって今から7年前に終結した。

世界は段々と回復し始めていたが、やはり永い傷はそう簡単には治らない・・・。

新生・世界政府は2度とこのような悲しい戦争を繰り返さないように、多くの功績を残した人型機械兵器及び【ドール】の排除を決定した。

【ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ　ｗｅａｐｏｎ　Ｄ＝通称ドール】

作成者不明で登録も共に不明。

世界中でその数は、たった数体と言われ、強力な力と特殊能力を持ち戦争時代に多くの功績を残している。しかし、現在に置いても伝

説と称されるが実際の所は能力・功績などもすべてデータには保存されていない。

第一部　第一章（前編）

第一部　第一章（前編）

西暦２３××年

「レキ！いい加減に起きろよ！！」
寮の隣部屋アキト・フジタカは、成績優秀（学年主席）の学生で、色素の薄い髪を少し長めにそろえ、眉目秀麗で皆に慕われている。だが見た目とは違い結構大雑把な性格が本性だが・・まぁ根は優しいと・・思う。
「うぁ？」
「うぁじゃねぇ！！」
レキは半ば無理やりにベットから引きずり落とされ、打った頭を擦りながら起き上がる。
「ッ痛～」
「ったく！今日が何の日か解ってるか？」
俺はまだ覚醒しきってない頭を何とか働かせ、今日が年に３回ある式典の日だということを思いだす。
「もっと優しく起こしてくれよ・・」
少し痛む頭を思いながら、バタバタと支度を整え、全速力で廊下を走る。
「へぇー毎日毎日起こして上げている俺にそんな事言うんだ～」
表情は笑ってるのに、悪寒を感じて俺は無かったことのように走る。

「嘘だって・・・いつもご苦労様です！」
ここ【ガーディアル】は、教育機関と職場など生活一般が一緒に行われる小さな都市の様なもの。小さいと言っても、子供から大人まで４千人の人間が住んでいる。

特にココは神への信仰が厚く、教育を受けている俺達生徒が中心となって式典を行うこととなっている。
ここ以外にも多地方でガーディアルに属す施設は数多く点在する。ガーディアルを統括しているのは、戦後に作られた新政府で二度とこの様な戦争を起こさないために、子供達に幼い時から教育する事もカリキュラムに取り込まれているらしい。真意の事は、一般の人が知る所では無いのだが・・・。

俺達は一応静かに大聖堂に入るが、ガーディアルでもっとも古い建物の大聖堂の扉はかすかな嫌な音をさせ・・・目ざとい教師達にもちろん睨まれるが、無視をして席につく。

「遅いぞー」
ミツキ・S・セイジ（通称：ミツキ）は、とにかくスモールサイズで目が大きく、フワフワのショートの緑の髪を持ち一見弱そうな感じだが結構気が強かったりする・・。
「あ～ダルッ折角の休日だって言うのにな」
「ほんとほんと！」
「これからどうする？久々にゲーセンでも行く？」
「そうだな、どうせ帰っても暇だしな」
「レキも行くだろ？」
3人は振り返り1番後ろにいた俺に声をかけた。

『連絡します。使徒学科レキ・D・キサラ、至急理事長室まで来なさい』

「何かしたのか？」
ギルは何かおもしろい情報を仕入れようと思ったのか、楽しそうに聞い＞てくがそれをいつものように軽く受け流す。
「まぁ行って来るよ」

「お、おう」
至急と言われながらも、ゆっくり歩いて行く俺を見ながら他のミツキが呟く。
「レキって時折、何考えてるんかわかんないよな・・」
ガーディアルの生徒のほとんどは、小さい頃からガーディアルに住み年齢が達すると学生に入学する。そのため自分のように他のガーディアルから移って来たのでも無く、外から来た者は珍しい。
それに勉強・運動などの成績が特別飛び出ているわけでは無いのだが、人目につく人物なのだ、まぁ本人は周りの目なんて気にしてないのだが。
「そんな事より早く遊びに行こうよ」
「そーだな」

「使途科レキ・D・キサラ来ました。失礼します」
入ると薄暗い大部屋のバックには巨大な水槽があり、様々な魚が泳ぐ。その前には数人が腰掛けていたが、逆光のせいで顔は見えない。
「お呼びいただいたようですが、何かご用でしょうか？」
暫く間を置く様にして、一人が言った。
「今日はお前に進級の話だ、どうだ？そろそろ決意したか？」
前々から上官達に、研究所やガーディアル専属の養成機関に入れと言われていた。
「お前にとっても悪い話では無いと思うが？」
「お言葉ですが、私は今の生活・教育に満足しています。それに私は特別な成績でもありませんし、進級する事はここの法で反する事でしょう？スイマセンがこれで失礼させていただきます」
「きっ君！」
一番の下っ端らしい者は、慌てて顔は蒼白だ・・何かを脅えているのか・・・。

「彼がレキ・D・キサラか・・・」
奥に居た人物の手元には資料が置いてあり、そこには経歴と能力水準を示してあり、一般に公開されている成績では無く、一部の者しか知らないその資料には、全てにおいて標準を上まった数値が記入されていた。
「いい加減諦めろって・・・ったく」
ブツブツ言いながら寮の部屋に入るとアキトが待っていた。
「よぉ早かったな」
「あぁどうしたんだ？ギルと遊びに行ったんじゃ・・」
「途中でギルの親に会ってな・・・」
ギルの親は日頃はとってもイイ人なんだけど、この式典の日は説教マシーンに変貌する。
「逃げてきた」
「それは災難だな～」
「・・なぁ理事達、何の話だったんだ？」
「いつもの話だよ、俺が優秀すぎて理事までも俺の頭を買いたいなんて、俺の成績知ってるのか？って感じだよ～」
アキトは何となく俺の事を知っているのかもしれない、なんて事を時に思う。でも俺につっこんで聞いてくることは無かった。
「頭って・・進路は？もうすぐ俺達も決めなきゃいけないだろ」
「別に、俺はどっちも希望してないけどな」
「希望してないって、勧誘された所に行くってこと？」
「いや、そうゆうわけじゃないけどな、お前はどうなんだよ？」
「俺？俺はまだ決めてない」
「何だお前も決めてないんじゃないか・・」
「いいだろ！俺はお前みたいじゃないんでね！」
「はぁ？お前の方が頭いいだろ！なんたって学年主席なんだからよ」
アキトはそれには答えず黙ったまま、何か空気が重い・・・。
「俺そろそろ帰るな」

「あ、あぁ」
って言って立ち上がろうとアキト視点が定まらず倒れ掛けた。危機一髪に支えると、アキトの体はすごく軽かった。
「大丈夫か！？」
「あぁ・・悪ィ平気平気、最近ちょっと疲れてんだ・・じゃ俺帰るよ」
アキトはヨロヨロと部屋に帰って行った。気づくと外はもう夕方になり薄暗くなっていた。

あれから数日が経ったが、アキトが調子が悪いようには言わなかったが、どこか・・・。
「あ〝〜」
机に突っ伏したレキを見て「理事達も粘るな」苦笑気味にアキトは言う。
毎日毎日理事や教師達の勧誘三昧で学校でも個人に支給されている各部屋（寮）にまで来て安らぐ場所は無い状態・・。
「おい！ニュース」
ドタドタと大きな足音で急に入ってくるのはいつものことで。
「何と3日後に、他の施設から視察が来るんだって！」
「ふ〜ん」
「何だよ〜もっと驚いてくれよ」
「いいさ、もっとすごい情報があるんだ！・・何と！レキお前がその時歌を歌うんだって！！」
「・・・・！はぁ！？」
「本当なのか？」
初めて興味を示した2人に、ギルは得意げに言う。
「本当だよ〜だって掲示板にも書いてたし、先生達も言ってたよ！」
「・・・」

「レキって歌うまいのか？」
アキトは顔色が真っ青のレキを見てギルに聞く。
「あぁ1年の時選抜されていたハズ」
「じゃあ何で今は？」
「寝坊ばっかりしてたからな」
「お前、今も昔も変わないんだな～」
2人は頑張れ～と笑っているが、レキの方は・・・　。

『レキ・D・キサラ至急理事長室まで来なさい』

「お呼びだぞ～」
ヨロヨロしながら、背中には暗い影を背負いながら行くレキを見て
アキトが呟く。
「レキも大変だな」

「レキ・D・キサラ失礼します」
「話は聞いているだろう、3日後の視察会の事だ、君には・・・」
「すいませんが、適当な者なら数多くいるでしょう？」
「しかし、誰も君の選抜に反した者はいなかった、それで良いでは
無いか？君は選抜された事もあると聞いている」
「それは！」
「話はもう終わった、曲は教師達に聞いてくれ」
「ちょっ！」
フツフツとわいてくる怒りを感じながら、部屋に戻ろうと振り返る
とそこにはアキトがいた。中庭の椅子に手を付き、座り込んでいる。

「アキト？こんな所で何をしてんだ？」
顔を上げたアキトの顔色は真っ青で額には脂汗がつたっている。
「・・レキ・・・別に何でも・・無・・い」
「アキト！おい！！」

青白く血の気が見えない顔色に気を失い横たわる姿は、まさに死人の様だ・・・。

闇が・・・いつのまにか痩せ細ったアキトに影を落とす。

「ん・・・」

あのまま気を失ったアキトは、時刻午前０時を回った位にアキトは目を覚ました。

「レ・・キ・・」

「アキト・・大丈夫か？」

その質問には答えずに、アキトは腕で顔を隠した。

「アキト・・お前やっぱり・・・実験に参加したのか？」

実験とは上（ガーディアルの理事や幹部達が指揮をおいている研究所などのこと）が出した薬を、自らの体を実験体に差し出すことだ。その分多額の報酬が貰えるが・・・いわくが多い代物だ。アキトがその事を知らなかったとは思えない・・。しかしアキトは顔を埋めたまま頷く。

「どうしてそんな事をした？どうゆう事になるかお前ならわかっただろ？」

強く問い詰めたい所だが、なるべく俺は静かに言う。少し経ってアキトは言った。

「金が必要だったんだ・・村に」

アキトは貧しい村の出身だって前に言ってたのを聞いた事がある。

「・・・どんな薬か説明は？」

「・・栄・・養剤って言って・・」

「・・・」

「栄養剤って事が嘘って事はすぐにわかった、一緒に飲んだ奴らが次々いなくなってたから・・」

アキトは自嘲気味に話をする。

「その薬、自我を無くし上の思うままに扱える強靭な生物兵器を造る薬だ」

レキは自分が調べた情報をアキトに教える
その時アキトはやっと顔を上げた、その顔はやはり顔色が悪くそれが恐怖からなのか体調からなのかはわからなかった。
「奴らと一緒なら近い内に段々と自我を失い、自分さえもわからなくなる・・」
「治す事は？」
レキはゆるく首を横に振る。
「・・そっか、もういいよ・・サンキュウな・・・おやすみ」
そう言うとアキトは礼を言って部屋から出て行った。隣の部屋からは、泣き声や暴れる音などは聞こえなかったがアキトが前に好きだと言っていた歌が聞こえてきていた。
きっとアキトが歌っているんだろう・・そう言えばアキトが歌を歌っている所は2回目だな・・・何て事を思っている内に空は明るくなり始めていた。

本番当日、渋い顔をしているだろう俺にはお構いなく楽しそうに聞いてくるギル　。
「どうだ調子は？」
「うるせぇ、何で歌の楽譜がこんなに分厚いんだ・・・」
確かに、その楽譜は辞書並だ・・とギルは思いながら。ちょうど通り掛かったアキトに声をかける。
「・・レキ、購買、行くんだ・・何か買って来ようか？」
「じゃオレンジジュース」
「わかった」
「おい！レキ」
「息抜きも必要だろ？まだ時間あるし、アキト俺も行くよ」
あれから俺達は必要以上喋ることはなかった・・。久しぶりだと何をしゃべっていいのか・・・ことがことだけに・・。
「大変そうだね」
「あぁまったくイジメだぜ」

「「・・・」」
「・・今日見に来るのか？」
「・・もちろん、レキがとちるところを見ないとね」
「何を！」
「はは、嘘だよ！頑張れよ」
「出来る限り頑張らしていただきます、じゃ先行ってるわ、また後でな」
「あぁ」
笑顔でレキを見送るアキトは、すごい汗をかいていた。
「・・・オレンジジュースだったよな」
自販機に向かった時後ろに気配を感じ振り向くと、白服の男達は妖しい笑みを浮かべアキトに言う。
『アキト・フジタカ君これから楽しいパーティーの始まりだよ』
床に倒れこむアキト、意識が遠のくのを感じながら、アキトはレキの去った方向を最後まで見ていた。

会が始まり、俺は歌った。
一つも間違う事なく、そればかりか会場にいたすべての人がレキの歌声に酔いしれた
まさに“神の歌声”だった。大歓迎をよそに、礼もせずに舞台を降りる。　舞台の上から何度も確認したがアキトの姿がなかったからだ。探しに行こうとした時、大聖堂の扉の方から大きな音がした。会場にキメラと化した生物が乱入し、辺り構わずに殺略と破壊を起こす中、逃げまどう人々と叫び声、パニックな状況になった。

【キメラ＝人格を無くし元は人間だと言う情報もあるが、実の所は解らなく、ただどこから生まれたなどは一切の不明でありただ破壊を行い姿は人にも獣にも似ている。知数は低いが身体能力は優れている】

視察団の人々はキメラに食い殺されている、それに気がつけば理事達は姿を消していた。
「・・・なるほど、全部理事の策略だったわけだ」
考えていると、背後から出てきたキメラが襲って来た。何とか服をかすめたくらいにかわせた。だがキメラはそれ以上を攻撃をしなく、他の人間達を襲い始めた。
さっきのキメラが見た視線の先には・・・左耳の赤い石のピアス・・・優等生のアキトが校則違反のピアスをしていて先生達から色々言ってたけど絶対外さなかった物。それは真面目すぎるアキトにレキが上げた物だった。
「お前まさか！！」
兵士達の攻撃の流れ弾が俺の方に向かって来た。その時俺の前に立ち銃撃を受けたのは、さっきのキメラ・・・。
目の前で倒れていくキメラが・・確かにこいつはアキトだった。半分ほど人の姿に戻ったアキトはゆっくりと瞳を開けた。
「・・レ・・キ・・ゴメン・・・俺、見に行けなくて・・でも、聞こえたんだお前の・・声・・・」
「アキトもう喋るな！」
「レキ、俺・・本当・・もう村が無い・・こ・と・・・だ、でも・・やっぱり・・・信じられなくて」
「アキト・・」
「舞台・・お前の事だから・・大丈夫か・・ハハ・・俺なんてこんな・・・なっちゃってさ・・レキ・・俺お前に・・会えて・・良かっ・・た・・・」
頬に差し出された手は重力通りに地に落ちる、レキの頬に血の跡を残して。
「アキト・・・」
人間の姿を取り戻したアキトに何度呼びかけても、何度揺さぶってもアキトは目を覚ますことは無かった・・・。
後に、侵入したキメラすべては処分されたと発表された。

視察団は全員殺され、会が開かれていた大聖堂は無惨な姿になっていた・・ガーディアルの方でも被害者は約６０人で、キメラ7体の侵入だったみたいだ。
「レキ、この間の会はすばらしいものだったな」
事件の方も1段落がついたころ、再び理事長室に呼ばれる。
「最初からこの為・・・高い報酬を与えると言いふらし、キメラを造った！」
「君は頭が良いな、だが、我々はキメラを造る為っというのは困るな、彼らは自ら我々に力を貸してくれたのだ、しかし残念な事にキメラと化してします・・」
「・・失礼します」

「おい！レキ！！アキトが死んだって本当なのか！？」
一般にはアキト、他6名の死体は事件に巻き込まれ死亡したと放送された。
「・・あぁ」
「どうしてだよ！！」
ギルとミツキの2人は泣き崩れる中。
「レキどこに行くんだ？」
振り向いたレキの表情は見た事も無い人形の様な顔だった。
「どこにも・・どこにも行かないさ」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第一章（後編）

第一章（後編）

それからガーディアルの中は不穏な空気の中にあった。キメラがガーディルの中に現れたことは人々の中に恐怖を植え付け、反発などに勢いを与えた。そんな中なのに俺達は、外に研修に行くことになり、数台の車に生徒達を乗せ砂漠を走っていた。

「俺ガーディルの外に出るのって久しぶりだ」

「5年ぶりかなぁ～」

多くの者がガーディルに入ってから出たことは無い、それは外に出るための許可証が簡単には卸してくれないことだったからだ。

「レキこっちに来て見ろよ～ミツキも来たらよかったのにな」

ミツキは、アキトの件から調子が悪く今日もガーディアルで留守番をしている。友達が急に亡くなったら誰でも辛いものだ・・。ギルだって悲しみを隠しているのはわかるけど、ギルにとって初めて見る外の世界に少し元気も出たみたいだ。

しかし暫く車が進んで行くと、外は思った以上な後景に皆顔を覆った。砂漠の砂に埋め尽くされ井戸からは砂がこぼれ、廃墟となった町には多くの横たわった子供も大人も死体が転がっていた。

「どーなんてんだよコレ！？」

急に車が止まり、運転手を覗き込んだ一人が大きな声でさけんだ。さっきまでの運転手がキメラに変わっていたからだ。

「キメラ！？何で！？」

「周り取り囲まれてるぞ！！」

周りの廃墟からも次々にキメラが現れ、あっという間に車の周りを囲まれ・・・すばやい動きで俺達に襲いかかってくる。

俺はギルがキメラに捕まったのを見て、周りを見渡したが武器になるようなものはない。少し考えた・・けど今それ以外の方法もなく、

キメラに手をかざすと腕から赤い光が現れキメラは一瞬の内に炎上。悲鳴を上げながらその場に倒れた。
「！！レキ！？」
残ったキメラもレキが手をかざすと一瞬に炎上し灰になった。助かった生徒達は喜ぶよりも、奇妙な力でキメラを倒したレキから離れる。

「・・結構強いのね」

長い赤い髪とハデな服を着た女が壊れた建物の中から出てきた。女が手に持っている扇子を振ると土の下からキメラがどんどんと出てくる。
「せっかく強い奴がいるって言うから出てきたのに、弱い人間ばっかで退屈してたのよね」
「お前が俺達にキメラを向けたのか！死んだらどうしてくれる！！」
そこへ1人の生徒が女に近寄るが、生徒は瞬時に伸びた女の爪で体を貫かれ、地に倒れた。それを見て他の生徒達は動かなくなった生徒を見て息を呑む。
「まったく人間ごときが私に触らないでくれる？まったくいつなっても人間は醜い物だわ・・・・そこの人間ども殺さないの？」
「どう言うことだ？」
レキの変わりにギルが聞くが女はギルの方は見ない。レキの方は表情は背筋が凍る様に冷たい、俺達が知っているレキじゃないのかと思うほどに・・・。
「まぁ人間ごときと手を組むなんてバカな事はしないで、私達と手を組まない？」
「・・・死にたいのか？」
女は多少表情を変えたが、すぐに元に戻り右腕の服をめくりあげると今はもう存在しないハズの紋様が記されていた。

「ドール！？」
生徒の一人が叫んだ言葉に生徒達は氷つくと同時に、女の体はドンドンと変化していく。
「インドール！！」
【インドール＝ドールとは違う旧タイプの機械兵器、主に処分されている、処理も早く状況に応じ自分で行動したりする戦闘型】
誰かが叫ぶと同時に生徒達は慌ててその場から逃げる。異形と化した女は体を蛇のように動かしながらレキを睨む。しかしレキの方は身動き一つしなかったが、よく見ればレキの体を覆いつくす、赤い・・紅い・・・炎。
レキの炎が瞬時に女の体を捕らえ、女は身を焼かれながら激しい悲鳴を上げる、炎によってさっき見せた紋様は消えた。
「この力・・・もしそうなら・・・あのお方にお知らせしないと・・・」
女が頭に飾っていた赤いかんざしが鳥になり、空へ飛び立った。
不気味な高い笑い声を上げると、女の体は灰になった。乾いた灰が砂と一緒に風によって空中を彷徨う・・。

「どうなってんだよ！！」
「そうだ！お前何者なんだ！！！」
口々に助けてもらった人物に罵倒を浴びせる・・そう俺たちは今レキがいなかったら、死んだいたのに。
「お前ら今はレキがどうなのか関係ないだろ！これからどうするかの方が大切じゃないのか！！」
そのギルの声に罵倒をあびせていた者達が静まり返る。車はすでにキメラに壊され動かせないし、こんな廃墟と化した村は一刻も早くに立ち去りたい・・。
「そうだ俺達と連絡を取れないとわかると、ガーディアルが助けに来てくれるさ！」
その一言でその場はおさまった。ひとまず知らない地を闇雲に歩く

のは危険とみなし、迎えを待つために皆思い思いの場所で一夜をあけることにした。

それから3日経っても迎えは来ることはなく、食料も残り少ない・・・。

「このまま迎えが来なかったらの話だよ！このままじゃ俺達ココで死んじまう事になるんだぞ！？」

不安な言葉が一つこぼれると、あとからあとから不安は増大する。その中で一人が立ち上がる。

「・・・僕は自分で帰ります・・今の時期の星と太陽を見ながら方角を調べて歩いていけば・・」

「そうだ！そうすれば帰れる！！」

「・・だがどれ位の距離があるか、食料や水はどれだけいるか・・この砂漠じゃ水一滴手に入れるのだって至難の技だぞ？」

「ヘッ腰抜けはココで待っていればいいさ！」

「何だと！？」

結局救助を待つ組と自力でココから帰る奴らとの2つに分かれる結果となり、自分達の食料を持って行ってしまった。2日はすぐに経ち、残った者は死を考えるようになった。

「レキ・・水」

「お前こそ飲んでないだろ？」

「俺だって平気・・」

ギルは意識を失いかけ急いで水を飲ます。もうここに残った者は限界に見える。食料も水もなく・・・。

「大変だよ！スガルが！！」

生徒の一人、スガルは日陰で細々と息をし、水さえもろくに飲めなくなっていた。仲のいい友人は皆スガルをどうしたらいいのか戸惑

っている。
スガルの他にも、ココに残った13人の内4人は、行き絶え々の状態になり死がそこまで迫っている・・。
「ディー・・ミナミ・・」
「スガル!!」
スガルは目立たない生徒、別に成績がいいわけでもなかったが多くの友人がいた人望のあつい者だった。最後の力だったのか・・友の名を呼び力尽きてしまった・・泣き叫ぶミナミを引き離し、スガルを砂に埋葬した。
「スガル・・・」
何とか皆をなだめて帰って来たギルもすごい顔になっている。
「あぁ、なぁレキ俺達どうなるんだろ・・最初は迎えが来るって信じてたけど・・今はもう来ないんじゃって思ってる」
レキはギルに顔を向けずガーディアルでは見ることが出来ない、無数の星達を眺めていた。
「レキ・・お前一体・・・ゴメン!今こんなこと話してる場合じゃないよな!・・・」
「ギル、ココから逃げ出す方法はあることにはある・・」
「本当か!?」
「この砂の地下には多くの地下水脈がある」
「それを使う!!でも何でもっと早くに言ってくれなかったんだ?」
「・・地下水脈はほぼ死んだに近いが、まだ水が通っている箇所もある・・その水が海の方へ引き潮となり地下水脈を使えるのは、月が満月の時だけだ・・・だが、それもすべてに起きるわけじゃない・・」
「満月・・明日か!・・・危険でも今の状況よりはましだろ?いちかばちかだな!!」
ギルは嬉しそうに皆に報告をしにいったが、やはり危険を冒しても死人がでる前に言え!っと言う批判はあびた。

「いやだ！スガルを置いていくなんて！！」
「ミナミ・・」
何とか皆今はそれどころじゃ無いことは解っているため念入りな準備を行った。
「ココから行くのか・・」
地下水路の入口は村から少し離れた砂の中に埋もれていた。人1人が通れる位の小ささだったが中は結構広い空間が広がっている。
「へぇ～地下にこんなのがあるなんて知らなかったな」
「すげ～」
かなりの距離だし気温は低く、色んな所に穴や通路がありレキの案内がなければ迷っていまう所だ・・。
「おい、いつまで歩けばガーディアルに着くんだ？」
確かに、3日間歩き通しでも地下道はどんどん続いている・・この薄暗い中にいつまでも居たら気が狂ってしまいそうだし、その上調子が悪い者の体力は限界に近い。
「お前本当は俺達を殺すつもりなんじゃ無いのか！！？ココの事はお前しか知らない、この間のキメラの所へでもつれて行くんじゃないのか！！」
キメラの声に皆がざわめく。
「それに変な赤い光をだしてたじゃねぇか！！」
「どうゆうことなんだよ！！」
「おい止めろよ！！」
「うるせー！！」
止めに入ったギルはふっとばされる。
「ギル！！」
「レキ！！大丈夫だから」
「わかってるよ・・・そろそろだ・・壁の土を落として見てみろよ」
レキを疑った人物に見るように言う。言われた通りすると確かに土が落ち、現れたのは古びた扉。

多少錆びて開きにくいが、数人が力を出すと扉は開きそこには久しぶりに見る外の光に、皆目を細める。
「外だ！！」
「・・！？おい！見ろ！！」
遠くの方に見えるのは確かに自分達のガーディアルだった。
「やった！俺達帰ってこれたんだ！！」
皆、嬉しそうに走って行くのにレキはその場から離れようとしない。

「レキ、行かないのか？」
「俺は他に行くところができた・・」
「？何言ってんだよレキ、俺はお前を信じてるよ！・・・一緒に・・！！」
「・・・」
「・・・何かあるのか？」
ギルの問いにレキは答えない、でも邪険にしているんじゃなく、言えないって事をギルは何となくそう思った。
「俺やアキトとミツキはお前の親友だよな？」
「・・あぁ」
「・・・レキ絶対また会おうな！！・・・・待ってるからな！！」
そしてギル達の姿が見えなくなる・・。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

少しの間を置き後ろの地下水路から出てきた人物は・・この間死んだハズのスガルだった。
「やはり気がついていましたか」
太陽の下に現れたスガルの姿は、人工皮膚が剥がれ落ち、中身から流れているのは血ではなく鉄の組織体。
「どうして・・って思いますよね、僕はこの通り機械人形です、僕

はあのガーディアルでスパイとして働いていた機械人形・・学生達に紛れ込み情報収集が仕事だったんです・・」
「・・あんたこれがどうゆうことか知ってか？」
「えぇ・・ガーディアルを裏切るって事は、僕の中にある自爆装置が作動するってこと・・いいんです、こんな僕を友と呼んでくれる人をだます事はもうできません・・・僕は卑怯です・・でもこれでやっと戦友（仲間）に会うことができる・・・レキさん、あなたはやはり・・・」
レキはまっすぐスガルを見つめる、それがスガルには答えだった。
「あの・・・僕らはやっぱり死んでも人間のように、友達にはなれないんでしょうか？」
「それはお前の意思次第だ」
レキは淡々と答える、その答えの中にはなんの興味も感情も無いように聞こえたが・・・。
「少なくともあいつらはそう思ってたのじゃないか？・・・例えお前が人間じゃなくても・・・」
「そうですね・・・でも今度は、今度生まれ変わる時は、人の子のディーやミナミと同じ様にこの地を駆け回る事が出来たら・・」
スガルからピーィと言う電子音が鳴る。自爆の合図。
「・・ディー、ミナミ・・」
もう一度空を仰ぎ見たスガルの表情は、生まれ変わらなくとも・・・。電子音が激しく鳴り始め、スガルの体中の機械の細胞が動き出し、スガルは一瞬にして爆発した。爆発の間際のスガルは微笑んでいた・・。スガルの体はバラバラになり地に落ちてた・・新に吹く砂塵に埋もれながら。
巨大な爆発音にガーディアルの側まで来た生徒達が振り向くとそこには、雲ひとつも無い果てしなく続く青空が広がていた。

ガーディアルにある裏コンピューターのデーターが飛んだ事件で理

事長室内は嵐だった。
「理事！ダメです！データーの８割はウイルスにやられました！！」
レキの部屋やコンピューター回路が爆発し、それと同時にガーディアルにコンピュータにウイルスが流れ込んだため、マザーコンピューターは無事だが大抵のものはウイルスに侵された・・・。
「レキ・Ｄ・キサラか、いい置き土産だな・・やつを連れ戻すんだ！！」
「御意！！」
「あいつは私のものだ！！」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第二章　戦火の日

第二章　戦火の日

ガーディアルを出た俺は空腹と戦っていた。
「腹減った～」
木の枝に実がなっているが少し採りにくい所にはある・・だが空腹には負ける。間抜けにも実を採ろうとして、崖から落ちて頭を撫でる。
「痛ぇ～」
「あっあの大丈夫ですか？」
薬草を手に持ったバスケットにめい一杯詰め込んだ少女が立っていた。しかも間抜けにも、落ちた所を見られていたようだ・・。
苦笑しながら俺の腹の虫を聞いた彼女はカスミと名乗り、黒髪を2つに結んだ少女はそう言った。
「あの、私の家近くなのでよかった来て下さい・・・」
カスミに着いて行くと森に囲まれた小さな村があった。奇妙にも、村の半分が焼けた状態になっている。
グーっとなる腹を抑えつつ、レキの前にあるテーブルの上には数種類の料理の盛られた皿を見る。
「ささっドンドン食べてくれ客人！レキとやら！」
「っと言っても、あまりいいものは無いのですけど」
目の前には、豪快な感じのカスミの親父さん。
「いえ、スイマセン迷惑を掛けてしまい」
「なーに遠慮せんでいい！」
バシバシと叩く背中はかなり痛く、きっと赤くなっているだろう・・。
「もうお父さん、そんなに叩くと痛いわよ！」
「お？これはスマンなー」

「いえ大丈夫です」
「今日はゆっくり休んで行きなさい」
「レキさんゆっくりしていって下さいね」
「ありがとうございます」
布団をおじさんの部屋に敷いてくれたので、遠慮なく泊まることにした。ガーディアルを出て１０日・・・何て事を考えながらも、そのまま俺は久しぶりにぐっすりと眠ることができた。
「おはようございます」
「よく眠れましたか？朝食の用意はできてるんでどうぞ」
「すいません」
「おう起きたか」
「お父さん後はよろしくね、私行ってくるから」
「あぁ気をつけてな」
おじさんはカスミを見送ると席に着き、カスミが作った朝食を食べ出した。
「カスミさんお仕事ですか？」
「いや、妻の墓に行くんだ・・今日は妻の命日なんだ」
「命日？」
「ちょうど１年前に死んじまってな・・この村の姿を見ただろ？ここは１年前にドールに襲撃されてなこのありさまさ」
「ドール？」
「昔なワシも戦場に赴き戦い、機械相手にも武器をとって戦っていたんじゃが手も足もでなかった・・多くの者が悲しいこの土地を出て行ったが、ワシは戦争が終わりやっと妻と一から始めたこの場所をどうしても離れられなくてな」
「・・・」
「しっけた話をしてしまったな、何も無いところだが村を見てきてはどうだ？」
「はい、そうします」
おじさんは森の方へ仕事に行くため途中の道で別れ、俺は村の方へ

行く。村人は少ないが皆活気ずいた所だった、悲しい過去を見せもせずにこの地にとどまって過ごしている。
「あら？旅のお方かね？これは美青年だね～」
わらわらとおばさん連中に囲まれ・・家に帰る頃は夕方になって、両手には持ちきれないほどの色々なものを持たして・・持たされていた、その姿でようやく帰るとおじさんは驚いていたが、すぐに笑いだした。
「あのおばんども、若いお前に気に入ってもらおうとしてたんだぞ」

「気に入って・・そっそれにしてもカスミさん遅いですね」
太陽はとうに地平線に沈み、時刻は８時を回っていた。
「そうだな、いつもはこんなに遅くはならないんだが・・ちょっくら探してくるか」
「僕も行きます」
その時すぐ近くで巨大な爆発音が響いた。急いで扉を開けると、村の方で火の手が上がっている。
「カスミ！！」
おじさんが慌てて家を飛び出し、俺も続いて外に出て村へ向かう。
村の中心地はすでに炎にのまれているがまだ思ったよりは広がっていない。
路地の方で悲鳴が聞こえ、村のおばさんが仮面をつけた奴に襲われていた。
「邪魔ヲスルモノハ殺ス・殺ス・殺ス・殺ス・殺ス・殺ス・・」
「おばさん立って！カスミさんの家は安全だから皆にそこに非難するように言って下さい！」
「あ・・・あぁ」
おばさんはフラフラする足取りで何とかその場から離れていったのを確認してから、レキは仮面の人物にに向き直す。
仮面は簡単に倒れたものの、付けていた仮面を外すと思った通りだった。

「やっぱり・・」

「カスミ!!」

おじさんの声がして俺が向かうと、表の広場にはおじさんが傷つき倒れ肩口からは血が流れている。カスミの方は仮面軍団に囲まれていた。

「カスミを離せ!!」

「おとうさん!」

「まったくギャアギャアうるさいなぁ〜」

仮面の中に一人子供がまじっている、子供は水色の髪を持ち前髪が長いため表情までは見えないが結構幼い。

「この女のどこがいいんんだかわかんないよね〜まぁいいや、連れて帰らないと俺怒られるんだよね、イースト達!他はさっさと殺しちゃって」

【イースト：戦争時代の兵器。旧タイプの兵器なためプログラム量が少なく単調な指令しかこなせないが、獣並みのすばやい動きで攻撃をするタイプ。護衛などに適している。】

「おとうさん逃げて!!」

「ガキ、一対多数は卑怯だって教わらなかったか?」

レキはおじさんを抱え、イーストが放った弾をかわす。

「ふ〜ん結構やるみたいだけど・・この数のイーストを相手に出来るかな?」

子供はおもちゃを見つけたように面白そうに笑う。

「危ない!!!」

カスミは悲鳴を上げ、目を瞑るがすぐに音は聞こえなくなり・・そっと目を開けると地に倒れたのはイースト達の方で・・。

『ギギィ・・・・・』
「・・・え？」

崩れていくイーストをもう一度見ようとしたとき、父に抱きしめられる。
「カスミ、無事か！？」
「・・・・おとうさん」
「レキさん一体・・危な！？」
「敵に背を向けるなんて余裕だな」
レキは瞬時に体の向きを変えかわすが、敵の予想より早い速度に服が破れた。
「ハハ余所見なんかしてるからだ」
子供はどこから出したのか、手には剣を握っている。
「楽しそうだな・・こんな小さい傷でも嬉しいのか？」
「何を！武器も持たずに俺と戦うつもりか！！死ね！！」
レキの左手から紅い剣が作られ、変幻自在の剣はすぐに敵を捕まえた。
「チッ！」
生き残ったイースト達が撤収していく。
「へぇ・・・お前手配書のレキ・D・キサラか・・覚えておけ次は必ずお前の首を取ってやる！！」
イースト達が姿を消すと、空から雨が降り出し村に放たれた火は消えていく。
レキは朽ち果てたイーストの欠片を拾い集める。
「君は・・」
「これが俺の戦友ですよ・・」
おじさんが再び声を出そうとしたとき、鳴りやんだ音を聞きつけて

村人達が戻ってきた。
「カスミちゃん無事だったんだね～」
「おばさん！皆！無事だったんだ！」
「あぁ旅人さんに助けてもらてね～！！」
「こいつらのせいで村や皆は！！」
村人達は、もう壊れて動かないイーストを蹴ったり踏んだり・・・。

「やめて！もう壊れたんです、これ以上はやめて」
「カスミちゃん？」
カスミが泣き出すと同時に大粒の雨が降りはじめ村人たちは自分の我が家の確認や話し合いをしにその場から離れて行った。　雨の中、カスミはイーストをすべて拾い集め母の墓の横に埋め花をそえた。
「おかあさん、私思い出したんだあの日のこと」

村が襲われた日、母に連れられ必死に逃げ惑っていた時1体のイーストに捕まり母は・・。
『私は殺していいから、この子は助けて！！』
母は殺され私は母の横でたたずんでいた、イーストは幼い私をじっと見てから私の前で自分を切った。
「私、機械とか関係ないと思うの、確かにおあかさんを殺されて悲しいし憎いけど・・私、信じてみる！いつの日か機械と共に暮らせる日が来たらいいのに、きっとおかあさんも喜んでくれるよね？」
イースト達の墓に埋められた花は、先ほどの雨を受け涙の様に花びらから雫が流れ落ちた。

その頃、家の椅子に腰掛けおじさんは昔を思い出していた。
戦乱の時代、多くの者達が徴兵され戦いを繰り返し・・その徴兵の一人として自分のあの場にいた・・。

戦場の中、日々強くなる機械に皆恐怖を感じ始めてい・・そして敵に囲まれコレまでかっと思い家族の写真を見ると自分の影の上にもう一つ影が上に被さった。
『家族の写真か？』
精密に作られた敵の機械は人間と見分けがつかない位だが、人間の空気は感じられない　。
顔を上げると自分の前に立っていたのは敵兵だと言うのに、不思議と恐怖を感じなかった・・死を覚悟したからかなのかはわからなかったが・・。
『あぁ妻と娘だ、娘が生まれてすぐ戦場に来たからな・・娘がどれだけ成長しているのか、1目見たかったが・・』
敵兵が武器を鞘に片ずけるのを見て・・。
『何故だ俺は敵だぞ？殺さないのか！見過ごす！？』
『もうじき戦いは終わる、今からの戦いは無意味だ』
敵兵は幾つもの血の跡があるが、平然といる姿はきっとその血は敵を倒した返り血なのだろう・・雲間からの光で敵兵の顔の表情が見えた・・。まだ幼さの残る表情の青年・・・。
『お前変わっているな・・』
敵兵は壊れた機械人形を集め運んで行く。
『・・それどうするんだ？また新たな兵器を？』
思わず聞いてしまった、敵兵は少し目の前にいる敵を見つめながら。
『・・なぁ機械は壊れたらどこ向かうのか気にならないか・・自然の摂理にも添っていない我らは・・』
『お前まさか・・・』
ピィィー！！っと撤収命令の笛の音が響くと、その敵兵は背を向け去っていった。
あの時、ワシは助けられ、そして・・・2度も助けられたな。
「レキか・・・」

何となくわかっていた、ドールっと言う事は・・人間でも機械でもないもの・・・。

「お父さん、ただいま！」

「あぁお帰り」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第三章　ガーディアルでの日

第三章　ガーディアルでの日

普段は立ち入り禁止区域の場所に2人で入りコソコソしているのは、ギルとミツキ。

「なぁ・・ギル何してんだよ～？」

ミツキは不安そうに空気通路に上半身を突っ込んだままの親友のギルを見る。

「そんなこと言ってないで手伝えよ！」

「手伝えって何を？こんな所誰かに見られたら叱られるよ～」

「・・・じゃあ誰か来ないか見張っててくれ」

「はぁ・・わかったよ・・・・・なぁレキは本当に帰って来ないの？」

ミツキはポツリとつぶやいた・・。ギルは、レキとの事をミツキには詳しく話していない、それにアキトの事も・・何かあったという事意外は・・・。

「さぁ、でもそのうちふらっと帰って来るんじゃないかな・・」

実際の場合、ギル自信がまだ混乱の中にいるからなのだが・・。あの時のレキの表情からは何も知る事ができなかったから・・。

「そっか・・アキトもレキもいなくなるなんて寂しいよな、でも何でレキ出て行ったんだろ？」

「絶対ココには何かあるんだ」

「何かって？」

「レキが出て行った理由とか・・アキトが死んだ理由とか全部・・・あぁ俺が絶対暴いてやる」

「でも暴くってどうやって？」

痛い所をつかれ、ギルは乱暴に言い返す。

「それをこれから探すんだよ！！」

本当に納得したのか、呆れたのかはわからないがミツキ頷いた。
「なるほど」

「まだ奴は捕まらないのか！」
兵士達にイライラした罵倒をする、真っ青な指揮官。前にレキが理事長室を勝手に出て真っ青になっていた男・・それが地肌なのか、やはり何か原因があってのことなのか・・。
「申し訳ございませ・・なっなにぶんガーディアルの指揮範囲以外の検索は、他の国との折り合いが悪く・・・」
「言い訳は聞きたくない」
「はっはい！！」
兵士達は慌てて理事長室を出ていく。
「どうですか調子は？」
苦笑混じで理事に声を掛けたのは、部屋の隅にいて一部始終を見ていた男、長身に白いコートを着込み少し長めの銀髪に右手にはめている指輪の赤色がやけに妖しく光っていた。
「お前がココに来るなんて珍しいじゃないか、なぁシト」
「そーですか？まぁそれは置いといて、一つ提案なんですが私に外への許可を頂けませんか？」
「見つけたのか！？」
「いえ、まだ正確な情報ではありませんので」
「お前が外へ出るとは又大変な事になりそうだ」
「必ずあなた様の元へ連れてきましょう、レキならばの話ですが」
「いいだろう許可はやる、ただしレキと確認した場合死なす事はゆるさんぞ！何としても生きて連れてこい」
「御意」

「ギル誰か来たよ！」
「あ？あれってシトだ」
「シト？」

シトと言うのは、ギル達のＯＢにあたる人物で頭良いから引き抜きで今は研究所に出入りしているらしい人物・・・だが彼の周りには良くない不陰気がある上変な噂も耐えない。
こう言う話はミツキの方が良く知っていたりする、ギルも知ってるには知っているがやはり年頃の少年の思いは女の子の方に行ってしまうものだ。
その点、ミツキはギルも知らない裏の情報を持ってることもある。
まぁ信用度はギルの方が高いことは確かだが・・・。
「シト様！！」
兵士が一人走って来て、何か小声で話をしている。
耳を澄まして聞こえた言葉の中に「レキ」という名前を見つけ、そっと近寄って聞き耳をたてる。
「ククク、おもしろくなりそうだ～まさかあのレキをこの手で殺せるのだからな」
シトの周りにはただならぬ空気が流れる。２人は恐ろしい事を言うシトの言葉に固まる・
「シト様！出発の準備は完了しました！」
兵がもう１人走って来て、シトに連絡をする。
「よし！では行くぞ」
シトが行ってしまうと・・。
「シトってマジかなりヤバくない？ってギルどうしたの？」
・・今確かにレキと同じ様な赤いものがシトの体を覆うのが見えた、どうゆう事だ？あいつとレキは何か関係があるのか？
「ギル？」
「ミツキ！こんなことしている場合じゃない、レキにこの事を知らせないと！」
「どうやって？」
「それを今から考えるんだよ！！」
理事の机の隠しボタンを押すと、後ろにあった水槽が開き地下に通

じる階段が姿を現す。

―コポ、コポ、ピッピ・・

怪しげな水の音が聞こえる・・薄暗い部屋に淡く光るものが・・。

「レキ早く私の元へ帰って来ておくれ・・・」

淡く光る機械の中に向かって理事は楽しそうに言う。

「お前もレキに帰って来たほしいだろ？」

―コポ、コポ

なぁにすぐに連れて戻ってくるさ、例え首や脳だけであってもな」

―コポ、コポポ・・・

ちなみに、ギルとミツキの情報は現段階において何の成果も上げられていない・・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第四章　道化師

第四章　道化師

レキは通りすがりの旅商人から教わった砂漠の道を歩いていたが、いつになっても人里に着く気配は無い。
「あの商人俺に嘘をついたのか？」
ブツブツとぼやいていると、派手に転けて打った顔をさすりながら足下をみると、足下には親子のミイラ化した骸が砂漠の砂に埋もれていた。親子の骸を見つめていると、親子の骸は再び砂の中へと消えていった。
―リーンリーン
っと音がする方へ目を向ける、遠くの砂漠の向こうに建物が見えた。近づくとやはり人工的な建物だが、多くが崩れ落ち現在は廃墟のようで、人が住んではいないようだ。
―リーンリーン
さっきの音が再び聞こえ、音に誘われるように、壊れた建物の中に入っていく。大きな城の様な建物の奥に子供が1人たたずんでいる。
「こんな所で何をしているんだ？」
問いかけに、子供が振り向くと顔には道化師の仮面を付けていた。
さっき音が鳴っていたのは首に付けている首飾りからのようだが。
「ここにはお前の他に誰もいないのか？」
子供は何も言わず、じっとこちらをみつめているだけ、顔に付けた道化師の仮面は泣き笑いといった表情。お互い黙ったままでいると・・。
「ようこそおいでくださいました、僕は道化師、何を披露しましょうか？」

道化師はそう言うと深く頭を下げると、懐から出したハープを弾き始めた。その音色はとても美しいかったが、どこか何かが欠けているような・・・。
「あんた人間じゃないな？」
一瞬音が止まったがすぐに弾き始め、最後まで弾き終えるとこちらに顔を向ける。
「お客さんお目が高いですね～僕はこの通りの道化しか能の無い機械人形ですよ」
仮面をはずした顔は確かに人では無く、古い人形の姿だ。
「こんな所で何をしているんだ？」
もう一度質問をしてみるとゆっくりと瞬きをしたあと道化師は答える。
「ココは墓場ですよ、多くの命有るものと、無いものとの」
「もとは立派な城みたいだけど・・？ココは、どうして誰もいないんだ？お前しかいないのか？」
荒れ果ててはいるが、建物自体はかなり高貴なもののみたい。
「ええ、今は僕しかいません」
「どうしてだ？」
「お客さんはお話が好きですね、ではお話ししましょう・・ココは何百年も続いた伝統ある城、人々はココで毎日宴を楽しんでいました、しかしあの戦争でこの場所は破壊され人々は去って行ったと言うことです」
戦争とはドールの戦争のことを指しているのだろう・・。
「それまでは僕の様な機械人形達も多く働いていました、あの頃のココは笑いがあふれ音楽や踊りが毎日続く夢のような時間で・・」
嬉しそうな表情で、あの頃を思い出しながら次には悲しそうな表情である場所へレキを連れて行く。そこには１つの墓があり新しい花がそなえてある、墓にはジュリアっと書いてある。
「この人は？」

「ここで1番人気があった歌手さ、彼女の歌は本当に美しくて皆酔いしれていた」
道化師の首飾りから彼女の姿と、まだ楽しかった城の情景を壊れた壁に映し出す。
「お前はどうしてココにいる？機械人形はすべてあの戦いに参加し、帰ってきたものはいなかったハズだが？」
静かな口調で道化師に問いかけるが、道化師ははじめからわかっているような口調。
「この場所から東西の方角に動いている機械人形がいたらしいと旅の商人が教えてくれました、探し人が見つかるかもしれない行ってみてはどうですか？」
「あぁ」
「あなたの思う通り僕は戦争には行きませんでした、何故人間達はこの感情を造ったのでしょう？それがなければ僕は・・」
「同じ事だろ？お前には少なくとも守りたい者があった、けれど、それでもプログラムのせいだと言っている時点でお前は古いモノなんだよ」
その言葉を聞いて道化師は少し考え込んだようだった。
「人間とか機械それだけの事だろうが」
「・・・それだけの事・・・はははは、僕はすでにいないものなのかもしれません・・すでにこの僕につけてくれた名を呼ぶ人はいないのですから・・」
「お前を縛る鎖はもう無いんだ・・・自由にどこへでも行くことができるだろ？」
そう言ってレキは、東西の方へと歩いていく。それを見送りながら道化師は墓に向き直す。

フワフワの緑の長い髪を持った美しい人間の少女、ジュリア・・・。

『う～ん、トワ！あなたの名前はトワね！』
『トワ？』
『だって名前が無いとふべんでしょ？機械だから永遠に生き続けることができるから！ぴったりよ！いいなぁ～ずっと皆に曲で幸せにしてあげることができるんだから』
『永遠に？』
『うん！とっても素敵な事でしょ？あっそうそう私の名前はジュリアよろしくね！トワ』
ジュリアは自分の知らないモノを沢山教えてくれた、けれど楽しい時間はすぐに過ぎ去り。機械人形達に攻め入られ、逃げ惑う人々をかき分けやっとの思いで見つけだしたジュリアは危険なのをわかって、トワが作った、たった1つの楽譜をしっかりと抱きしめて冷たくなっていた。
『今度皆の前で演奏したらいいよ！この曲素敵だもの』
『でも・・』
『じゃ私も一緒に歌うから、ね？』
『うん』
『約束だよ』
・・・大切だった、プログラム以外で僕がしたこと、彼女を守りたかったことだけど僕は何もできなかった、いやしなかったんだ・・。
「ごめんジュリア・・僕は逃げてしまってた、でも今度こそ君との約束を守るよ・・ずっと弾き続ける、きっとこんな僕でも君は横で笑って一緒に歌ってくれるよね？・・・今日は久しぶりに沢山話したい事があるんだ・・」
―リーンリーン
レキは振り返ると、砂漠が永遠と続いているだけだった。前に向き直し再び歩き始める。

「さ～て今日こそ人里に着けばいいけどなぁ・・」

砂漠に朽ち果てた墓の前に一体の機械人形が墓を守るように、側で膝をついた姿で動かなくなっていた。

―リーンリーン・・・・

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第五章　赤い化け物

「はぁ・・・・やっと人の居る場所に着いたぁ・・・」
化け狐とか、野賊とかにあって大変だったんだよな・・それもこれも政府の力がゆき届いてないためだろうけど・・。
山の道筋に湖に囲まれた町が見え、意気揚々に町を歩いていると人だかりがあった。
「おい！人にぶつかっといて無視はいけねぇんじゃないのか！？」
見るからにやばそうな男達に囲まれ、フードを頭から被った少年は黙ったまま俯いている。
「おい？何とか言えよ！仲間の治療費もらわなきゃいけないんだからよ」
周りにいる大人達は同情の目は向けるものの、誰一人助けようとするものはいない。
「泣いてもだめだぞ！？払えないって言うんだったらその体にある臓器でも売ってもらおうか！！」
今の時代、どんなに技術が発達したとしても、金持ちや力を持っている者達にしか技術は応用されない・・だから金のない貧困にいる者の主な手術方法は臓器を移植する方法だ。
男達は、少年の腕を無理に引っ張った瞬間強面の男が宙に舞う。
「何すんだよこのガキ！！お前らやっちまえ！！」
6人の男達が手には武器を持ち少年に向かって行くが・・またしても一瞬で男達を吹っ飛ばす。
「あの力・・」
「ッチ！っ撤収！覚えてろよ！！」
男達は少年をいちべつして、慌てて帰っていった。少年は脱げたフードを深く被り直し、シーンと静まった人込みを歩いていった。
「あの少年は？」
「あぁこの町はずれに住んでるやつさ、いつ来たのかしらないけれ

どね・・あぁやって時々町に降りてきては何か事件を起こして帰って行くんだ」
「そうなんですか」
「あぁこちらとら迷惑なもんだよ、あいつが来てから奇妙な事が起こるようになったし」
「奇妙な事…？」

「よっ！」
「うわぁ！？」
いきなり茂みから人が出きたもんだからビックリして少年は後ろに倒れてしまう。再び脱げたフードから見える顔つきは、１３．４歳っと言った感じだ。
「何だよテメェ！いきなり出てきたらビックリするだろ！！」
「いや～悪い悪い」
「っで何でお前、俺に着いて来るんだよ！？」
「俺泊まる所が無いんだ～」
「はぁ！？何で見ず知らずのお前なんかを！！」
「まぁまぁ」
何を言ってもにこにこしながらついてくるのを見て少年はあきらめたようにずんずんと森の中を歩いていく。着いた所は、だいぶ前に建てしばらく使われていなかったっと思われる山小屋。家具が有るわけでもなく、何も無い感じで１つベットが部屋の隅に置いてあるだけ。
ベットの下に落ちていた紙切れを拾うとそれは写真の様で見る前に少年に取り上げられる。
「勝手にいらうなよ」
それから会話をしようとも完全ムシなため床に寝ころび早めに寝ることにした。
真夜中０時過ぎ、少年はムクッと起きあがり、レキが寝ているのを確かめると静かに出て行った。

「たっ助けてくれ！！・・・うわぁぁ！」
夜中の森の中で悲鳴が上がる、その魂の抜けた体をズルズルと引きずる音が響く。その音は洞窟のある場所まで続く。
『もうすぐだ・・』
「何がもうすぐだって？」
『！！』
「お前が町の人が話していた者か？」
レキがつけた松明の火によって、辺りが照らされていく。フードの人物の足下や背後には多くの人間の屍、鮮血が一面を覆っていた。

昼にレキが村人に聞いた話の内容は、夜中にこの周辺の森を歩いていると赤い化け物が現れ人を襲うと言うことだった。
「詳しいことは解らないんだが・・目撃した人の話では赤い姿だって言うんだが、その化け物のおかげで町に来る商人が減るし、ったく商売どころじゃなくなったよ・・・そんで化け物が現れた時期とあいつが現れた時期がよく似てるから、皆あいつに近ずかないようにしているんだ・・まったく気味が悪いよ」

「って言ってたからな」
「それであんた俺を殺しに来たのか？」
「いや」
「じゃあ何しに来た？」
「噂の赤い化け物ってお前だろ、それで機械のお前が何してんだ？」

昼間の大の大人の男達を投げ飛ばした力などを見ても、普通の人間でないのは確かだ。
「・・・人間になるんだよ、人間の血と肉は俺を人間にしてくれるんだ・・・９９９人の人間を喰い殺せば俺は人間になれる！！」
今まで隠れていたようにしていた少年は陰の場所から出てくると、

少年の髪は燃えるような、又血のような不気味な真っ赤な色だった。
「なるほど、これが赤い化け物の正体か・・っで、何故そんなに人間になりたい？」
「お前には関係ない！！」
「この写真の女のためか？」

『シン、あなたが機械だなんて関係ないわ、もっと自分を自由にしていいのよ』
柔らかく微笑む少女の名はセレナ、誰からも愛される優しい人間の少女。戦乱の最中、機械である俺に優しく接してくれた唯一の人間。
『私はずっとシンと一緒よ』
『セレナ・・』
兵士達が扉を突き破りのりこんできた。セレナは自分をかばうように前に立つ。
『機械を壊せ！女、機械を隠しているとどうなるかわかっているだろ！どけ！！』
『逃げてシン！！』
『セレナ！！』
シンを狙った銃口から発射された銃弾は、セレナの胸を貫いた。目の前が真っ赤に・・・なった。

「俺が人間だったらセレナは殺されることなんてなかったんだ！」
怒鳴る声とは裏腹に、表情は悲しみと不安に染まっている。
「こんな事をして本当に人間になれると思っているのか？」
「ドールに聞いたんだ！こうすれば人間になれるって！！」
「こんな事をしてもお前は人間には・・なれはしない・・」
きちんと考えなくても機械が人間になることなんて不可能だ、なのに少年は本当に気が付いていなかったようで、崩れる様に座り込んだ・・。
「そっか俺人間になれないんだ、そうだよな・・・・・」

少年を見つめてから、少年の後ろにある躯に視線を向ける。
「出てきたらどうだ？」
少年は何の事なのか分からなく、レキの視線を追い躯の山を見ると躯の中から出てきたのは、殺したはずの人間！？しかし次の瞬間、そいつは人間の皮を脱ぎ捨て現れたのは機械だった。
「こいつが今までお前を操っていたんだよ」
「俺を操ってい・・た？」
「あぁタイプはお前の方が上でもガキタイプは許容範囲ってもんが少ないからな、操るには丁度いいてわけだ」
「何故こんな事をさせた？」
機械はゆっくりとレキの方へ振り向き面白そうに顔の組織をゆがめ笑う。
「このガキみたいに少数の機械が人間達に惹かれていた、我々機械のプライドも捨ててだ！？だからこのガキみたいに人を憎むように差し向けたってわけだ！あの方の世界を造るために！！」
「憎むようにって、まさか！？」
思い出した・・あの時・・セレナを撃ったのは・・・。
「我々が人間に化けてな、あれは楽しかった」
「テメェ！！」
「ハハッ無理だお前では敵わないさ！」
「こんな奴がセレナを！！俺は又何も出来ないのか！！」
「悔しいなら強くなれ・・だが今のまま憎む力で強くなろうと思っても無駄だけどな」
一瞬にして機械は破壊され、レキによって炎が放たれた。
「あんた何者なんだ？」
「俺はレキ・D・キサラ、お前と同じだよ」
「俺と同じ？」
「じゃあな、お前を惑わしていた元凶は消えたし、後はお前の好きにしたらいいさ」
「・・・」

レキはシキに写真を渡すと、言った通り背を向け行ってしまった。
空はもうすぐ夜明け、薄暗い森の中にも光の柱が出来始めた。
「セレナ・・・」

「ネム・・・」
レキはクマの出来た目を擦りながら道を歩いていると、道端から黒い塊が飛び出す。
「発見！！」
「うわ！？」
「よ！俺あんたと一緒に行くことにしたから」
「はぁ？」
「あんた俺が好きなようにしていいって言っただろ？だからあんたと一緒に行く！」
「・・・」
「あんな事までしたけど、まだ答えはでないし・・あんたとの行く道に俺の答えが有るように思うんだ！いいだろ？」
レキは少し微笑みながら。
「・・・好きにしろ」
シンは、ぱぁっと笑顔になりレキの後を着いて歩く。
「俺シン・スゥーよろしく！！」

それからしばらくして赤い化け物の噂は消え、森に入った人の情報で深い森にさす光の柱の下には数多くの墓に花を供えてあったと再び噂となったのだった。

☆シン・スゥーが仲間に加わった

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第六章　姉妹

「シト様！」
シトと呼ばれた男が、薄暗い建物の中の中心で膝を組んで座っている。
「大丈夫です、必ず捕まえて見せます」
「期待している」

トボトボと道を歩きながらシンは、何も言わないレキに声をかける。
「なぁなぁちょっと思ったんだけど・・」
「・・・」
「レキってどっか目的あって進んでる？」
何か今まで村を2つ通って来たけど、別に何をするでもないしなぁ・・。
「向こう」
なんかかなりアバウトに指を指してるだけにみえるんだけど・・。
「何だよそれ！？」
「俺・・こいつに着いてきて良かったのかなぁ・・」
レキが急に立ち止まったため、シンはその前方を覗き込むと道端に2人の女性がいた・・1人は木にもたれて、もう1人は必死に声を掛けたりしている。
「どうかしたんですか？」
「・・あ、妹が急に倒れてしまって・・」
「ちょっとスイマセン、大丈夫ですよ、少し疲労が溜まっていたみたいですね」
レキがテキパキと具合を見て、症状を姉に教える。
「疲労ですか・・・」
「大丈夫しばらく休んで、栄養が有るものを食べたらすぐに元気に

なりますよ」
「ありがとうございます」
こいつ人前に出ると態度変わらないか？
「よかったらお礼に私達の村へ来て下さい」
「それじゃあ少しだけお世話になろうか」
女達の家は結構良い家で、待合部屋と言われた部屋も貴重なちょうど品が並んでいる。
「なぁレキ何か変じゃないか？」
「何が？」
「何がって、こんなに良い家なのに疲労なんて・・」
だいたいこんな見ず知らずの人にほいほいついていくなんて・・。
まぁ俺の時も勝手についてきてたけど・・。
「まぁ色々あるんじゃないか？」
「人がせっかく忠告してやってんのに・・・何があっても知らなぇからな！！・・俺ちょっと散歩に行って来る！」
レキはシンが出ていった後に視線をやっていると、いつの間にか後ろにいた女の人に声を掛けられる。
「あの、お食事の用が出来ましたので・・お連れ様は？」
「あちょっと散歩に行ってくるらしいですよ」
「そうですか・・・あっどうぞ」
案内されて行く屋敷の廊下にも数多くの装飾品、絵画やつぼなどが飾られている。食堂はまた別格に、中央には長いテーブルとかなりの人数が座れる多くの椅子が並ぶ。
「客人には我が娘を助けて頂いたと聞きました、どうもありがとうございました」
屋敷の主人はバークスと言った、肥満の体つきやにやける顔などを見ると悩みなど無いっと言った感じの金持ち人物。
「いえ、困った時はお互い様です」
「そうですな！さっ挨拶をアルテとビルテ」
「先ほどはありがとうございました」

挨拶をしたのは、会釈をしただけの長女のアルテは、同じ金髪に青い瞳を持っている。アルテの隣に立っているのは、さっき倒れていた次女のビルテで金髪に薄い茶色の瞳を携えていた。

「あ～腹減った、今頃レキの奴いいもん喰ってんだろうな～」
1人腹を立てて歩き、ブツブツいいながら歩いていると、どこからか水音が聞こえてくる。
今にも消えて無くなりそうな砂漠の中、どこから流れているのか分からない湖に女が1人たたずんでいた。月明かりに、長い黒髪をなびかせて振り向いた女は何故か懐かしい感じがするは何故だろうか・・。
一瞬目が合ったと思い急いで隠れるが思った反応は無くて・・もう一度そっと覗いてみると女の姿形も無くなっていた。

「いやー今日は楽しい宴だった！客人よ今日はもう遅い、部屋でごゆるりと休んで下さい」
レキは何か引っかかったが、案内された部屋で休んでいるとシンが慌てて帰ってきた。
「どうした？」
「やっぱりココ何か変じゃないか？」
「そうか、それよりお前腹減ってるだろ？ほれ」
差し出された大きなおにぎりにかぶりつきながらも怒るシンに、レキは苦笑する。
その時屋敷の地下深くから音楽が響く、その音楽は気味悪く、そして何故か懐かしい　。部屋の扉が開きアルテが立っていた。
手には明かりの蝋燭を持って。
「深夜にスミマセン、お客様のために父がお呼びしろと申しまして」
「そうですか、わかりました」

「レキ！」
気味悪いが１一人で部屋で待つことは、できないと判断したシンはしかた無しにレキについて歩く。アルテは薄暗い廊下を迷わず進み、行き着いたのは音楽が聞こえている所。
だが道は無く、大きな絵画の前に立ち止まってしまう。アルテが絵画に描かれた水瓶を持つ女の瞳を指で押すとガガガ・・とお音をたてて絵画の下に通路が現れる。
「こちらです」
地下道を進んでいくと、廊下の両端にいくつもの部屋がありその奥に１つの扉があった。
手も使わないのに扉は古びた音を立てて開く。地下室には明かりが無く、足首位までの水の中にある無数の青い小さな明かりが幻想的な景色を造っている所に人が１人いた。
「あ！さっきの女・・・」
水の上に女神銅像があり、それにもたれる黒髪の女　。
「カラ！？何故ココにいるの！」
カラと呼ばれた女はゆっくりとこちらへ振り向いたその姿は、腰まである長い黒髪に同じ漆黒の瞳、片方の目の方には包帯を巻いてある。
『・・赤鳥・・青龍・・黒光・・・』
何だろうこの感じ・・空気がピリピリするのを感じた。
カラはフワッっと空を飛びレキに近づく、そしてレキの肩に手を置き。
『・・背ニ羽・・右手ニ青力ヲ』
「そこまでだ！！」
周囲はすでに機械兵達にに囲まれていた。
「インドール！？」
っと、館の主人であるバークスは不適な笑みを浮かべている。
「君の顔は良く拝見させてもらっているよ、手配書でね」
ガーディアルが造った手配書ってわけか。

「レキ！手配書ってなんだ！？」
「アルテ、何をしている！そいつを連れてこい！」
アルテはビクッと体を震わす。その時カラの周囲の空気が変わったと思うと、水が一斉に攻撃した。
「お父様！！」
「一瞬青い光が見えた・・じゃあこのカラって女も・・・。」
カラの青い光は翼の形になり、カラの腕に降り立った。
『…舞』
圧倒的な力、恐怖さえ感じる力・・カラは空を舞い消えた。
何とか攻撃は当たらず、煙に紛れて屋敷の外に出る事ができたっと思ったら周囲をすでに囲まれていた。
「またインドールかよ！いったい何体隠してんだよ！！」
「レキ様、どうかお父様を助けて下さい！」
「アルテ！戦乱の世、お前を軍政府から引き取ってやった恩を忘れたか！さっさと捕まえろ！！」
「お父様！もうこんなこと止め下さい！！」
「アルテお前、裏切るか」
「裏切るなんて・・どうかお父様！！」
「ビルテ、行け」
傍らにいたビルテは言われた通りに、レキ達を攻撃しだす。
「ビルテやめて！！」
アルテが銃弾によって倒れる・・・・銃弾を撃ったのは、バークスだった。
「何て事をするんだ！！」
「人間の命令を聞かない機械なんてただのクズだ！！さぁあいつらを始末しろ！！」
しかし命令にインドールは動かない。
「？どうしたと言うのだ！？」
「・・・ア・・姉・・サン・・？」
ビルテは混乱していた、その混乱が近くにいたインドールにも影響

したのか。
「ビルテ！！何をしてるんだ、そのクズと一緒に殺せ！！」
何だ！？ビルテが暴走しているのか？・・・機械のビルテが・・妹の死によって・・？
インドールは、急激なビルテの力の増加に次々動かなくなっていく。

「・・・ビルテ・・モ・・ウヤメテ・・」
アルテ自らの心臓部を壊すと、ビルテも同じ様に心臓部が破壊され2人の機械の姉妹は倒れた。
「アルテ！ビルテ！」
「この機械ごときが！！・・すべてを破壊尽くすんだ！我が機械達よ！！」
バークスはビルテの暴走が収まり、動き出したインドールに命令をする。レキとシンを攻撃している間にバークスは逃げた。
「シン、少し伏せろ」
レキの顔から表情が消え赤い光が体を覆うと剣が現れる。その剣は恐ろしいほどの力でインドールを一瞬に倒し、2人の手を握らせる。

「アルテ・・・ビルテこれでいつも一緒にいられるよな・・」
機械であってもお互いを思い失った悲しみは、人と同じ様なのかもしれない・・。

「クソ！あんなに使えない奴らだったとは！！」
いざこざの間に逃げたバークスの前に黒服の人物が2人。
「この失態はどうするものですか？ミスター・バークス」
サングラスをかけ青い髪の長身の男　。
「いや！今一度チャンスを！必ずやつらを！！」
「そうですね～やっぱり機械が古かったからですよね～」
もう1人は少し小柄な感じで、ふわふわの緑の髪の少年。
「えぇそうです！！だから今度こそ・・・」

「ゴミはやはり使えないな・・」
「あ～あ、どうするんだよ～俺達が怒られるのになぁ」
「シト様に言う前に俺達が殺せばいい」
「やった！僕久しぶりに遊べる～楽しみだな♪」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第七章　砂の記憶

政府の兵士達が一つの部屋を開けると・・。軍政府から配布された、豪華な部屋でのんびりとくつろいでいるシト達を見つける。
「いつまでこんな事を繰り返してるつもりですか？理事達からも催促を受けておりるのですよ！」
軍政府が世界各地の部署にいるレキや逃亡機械人形達の排除を行っている機関。しかし一向に捕まらないレキに対しての取り締まりが激しくなっている。
「ゲームってのは楽しんでやらないと」
「これは軍政府直々の命令ですよ！！」
軍政府から来た使者は怒りに体が震えている。
「まぁ近いうちにレキ・D・キサラを捕まえて見せますよ」
楽しそうに笑うが、目はちっとも笑っていないシトを見て、使者はシトと言う人物を怖いと思った。

「レキ！ちょっとこっちに来てくれよ！」
砂漠をいつも通りに歩いていた時、シンは砂に向かって何かをしている。
「ここに何かいるんだよ」
シンが砂を少し掘り起こすと、下からは布が出てきてその下で何かが動いた。
「子供！？っと犬？」
布の下から出てきたのは、少しやつれてはいるが確かに人間の子供が眠っている。
「お前何であんな所に居たんだ？」
ひとまず子供を安静に寝かせる場所に移して、子供が目を覚まし喋りかけると最初は怯えていた子供だが自分に危害を加えないようだとわかると喋り始めた。

「名前はジュリって言うの、東の方から来て・・お母さんがこっちの方に働きに行ってるから」
ジュリと言った子供は、7歳になる少女でテンパの焦げ茶の髪と同じ色の瞳。少し痩せ気味の小さな子犬を抱きしめている。
「お母さんいつも手紙を送ってくれてたのに・・2年前から手紙が来なくなったの、村のみんなは行くなって言ったけど」
「どうして村のみんなはどうしてそんな事をいった？」
「みんなはね、無駄だって・・どうしようもない事だって」
涙を溜めながら話してくれたが、しばらくするとまた疲れたようにジュリは体を丸めて眠りについた。
「レキどうする？」
「ほっとくわけには行かないだろ？明日には近くの村に着くから」

朝一に置き3人で近くの村へと向かい、正午が過ぎるくらいには村に着いていた。
「ここでジュリとはお別れだ」
「え？」
ジュリは不安そうな顔で俺達を見上げるが、自分の村に帰るんだ。
「嫌だよ！お母さんに会いに行くんだよ！？」
ジュリはついには泣きながらレキに言う、横で犬がクゥンと心配そうにジュリを見つめる。
「子供が一人で旅をするなんて危険だ・・・村のみんなも君のことが心配してるはずだよ」
ジュリはしばらく地面をじっと見つめて・・。
「・・もうちょっと待ってみる、お兄ちゃんが言うように村へ帰ってお母さんが帰ってくるのを・・」
俺達はジュリの村の方向へ行く旅の者にジュリを近くまで乗せってくれるように頼んだ。
「なぁレキあんたがそんなに優しいんだって思わなかったよ」
レキの手にはジュリから預かった、母親とのペアの黒色の石のペン

ダントがあり。シンは嬉しそうにレキに話しかける。
「優しい？」
「うん、だってあの子を助ける結果にはなったわけだしさ」
「今のところはな」
今のところという言葉が引っかかったが、レキの方はジュリが去った方をしばらく見つめていた。
「さぁ、行くか」

「さぁて今日もはりきって行かないとな！」
商人がジュリの眠って居る方へと行くが、そこに居たはずのジュリの姿は無く、商人が貸したはずの毛布が砂の上に落ちていた。
「どこ行ったんだ？、まぁお前も行くあてがないなら一緒に行くか」

毛布の傍にいた犬に聞くがクゥンと鳴くだけ、もちろん見渡して見てもジュリの姿は無い。
商人は不思議に思いながらも、しばらく辺りを探しても見つからなかったので出発することにした。
昨日寝た場所が見えなくなる時、犬は一度振り向いて「ワン！」と一声吠えた。
首にはあの黒色の石がついたペンダントが光っていた。

朝日が明ける少し前にジュリは目覚めていた。段々と体は砂に帰って行く・・ジュリは静かにレキと会った方角を見て、傍に寄り添うように眠っている犬を撫でると、微笑をしてすべてが砂へと消えた。

『ありがとう、お兄ちゃん』

「レキ！あの子どうしたんだろうな？」
シンは気になってレキに聞いてみる。
「今頃、母さんに会えてるさ」

「え？・・・ちょっレキ！待てよ！！」
空はいつまでも続いている・・例え場所が生と死が違っても・・・。
「おい！レキってば！！」

>>>Next

第八章　古い知り合い

いつも通り2人で野宿をしていると物音がして、シンが不思議に思い、音がした方へ静かに覗いてみると・・・。
「うわっ！！」
いきなり固まりが飛び出して来たもんだから、シンは驚いて後ろに倒れる。
「なっ何か出てきた！！」
「へぇ～この俺様の攻撃を防ぐなんてやるじゃねーか」
レキによって受け止められた腕の持ち主は、長身で体格のいい男の様だがこっちからじゃレキの体で姿は見えない。
「でも次はどうかな！！」
レキはいつもとは違う表情で男を相手していたが、真剣というよりは眉間に皺よってる・・・。
「おい、いつまで気づかないつもりだ？」
「あ゛？」
そう言われてじっと男がレキの顔を見つめる。その時ちょうど男の姿が見え、男は緑の短髪で少し浅黒い肌に黒色の入れ墨が顔に彫ってある。
「・・・あぁ！お前！！！・・・ってか、なんだこのガキ？」
「俺の連れだ」
「へぇ～お前が他人を連れてるなんてな、ふ～ん」
攻撃をやめたと思うと今度はにやにやした顔でシンを見つめる。
「まぁいい今日の所はこのガキに許してやるよ、じゃ～な」
男が残していった紙切れを拾うとそこにはレキの名前が書かれている。
「レキ、これって手配書・・・？」
レキはしばらく男の後姿を見て、再び歩き出した。
「・・・あいつと知り合いなのか？」

それには答えず・・でもどう見ても一方的に知ってる以上だったようなぁ・・・。でもそれ以上聞くなオーラがレキから出ていたもんだから、気になっても聞けなかったため、なんかすっきりしない状態のシンであった。

「頭こんな所にいたんッスか～」
砂漠の中に崩れた遺跡のような場所から数人の人物が出てきた。
「何してたんですか？」
「そーですよ心配してたんですよ！！」
口々に文句を言う仲間達に、さっきの刺青の男が笑いを返しながら軽い口調で答える。
「悪い悪い～まさかあいつに出会うなんてな、皆これから戦闘の用意をしてくれ」
「え！？」
「リラ！情報を掴んでくれ」
奥から出てきたリラは、ショート髪で少し黒肌の女が現れる。
「なんのですか？」
「レキについて」
レキの名に皆一瞬固まり、そして顔つきが変わる。
「位置に着け！」

のんきにいつも通り飯を食ってるレキを見て、色々聞きたいんだけど・・・。あの男だって気になるし・・。
「シン、あいつは俺には恨みがあるが、根はバカじゃないからお前には危害は無いさ」
「いや、それを心配してるんじゃないけど・・」
レキは何も言わないからな・・俺自身の事よりレキの事の方が心配だよ・・・あれって絶対手配書っぽいし・・・。
クシャクシャとシンの頭を撫でられ、恥ずかしさと子供扱いされたのが少しムッとなった。

「もう寝ろ」
「・・・わかったよ・・」
大きな砲撃音に飛び跳ねるように起きると、レキはすでに起きていたようで煙の上がる方を見ていた。
「シン、ここに居ろ・・野暮用だ」
「え？あっレキちょっと待てよ！う～ほっとけるわけないだろ！！」

「よぉ1日ぶり、ちょっと大きな目覚まし時計で悪いな」
「あの手配書見たときにやまさかと思ったけど、やっぱりお前とはなぁ・・・っでお前の事結構調べさしてもらった・・っが、本当相変わらずだな」
「・・・」
「あの時もそうだ、人間達の犬になっていると思っていたら、今度は人間を殺したり・・友達になったり？」
「お喋りをしに来たのか、ライメイ？」
「そうだそうだ、本題を忘れる所だった、まぁお前にこんなに早く会えるなんて・・急に神に感謝したくなったぜ」
2人の間に流れる空気が重く感じ始め、レキの腕から赤い炎が浮かぶ。ライメイと呼ばれた男の方も同じような黄色の様な光を身にまとう。
「あれって！？」
「行くぞ」
激しい戦いが繰り返されているが、レキの方がまだ力の有るように思う。
「久しぶりだぜ、こんな力で戦えるなんてな！！」
次の一撃がレキの腕を切り、思わず体が動いて飛び出してしまう。
「レキ！」
「シン！？」

「戦いの最中によそ見なんて余裕か？」
「おっと！お前に出て行かれたら頭に怒られるんだ、じっとしてれば何もしないさ」
「そーそー、ただココであの兄さんがやられるのを見てればいいさ」

ライメイの仲間達らしい男達に捕まってしまう。
「クソ！離せ！」
「昔からテメェは変わらないな、そう言う目がむかつくんだよ！」
傷ついてもレキの表情は変わらず、怪我した方の腕も対して気にしてないようだ。
再び攻撃してきたライメイをレキは受け止める。
「な！？」
「お前にどう思われようと俺には関係ないだろ・・・」
「・・・・ケッ！やめだやめ！」
「お前らそのガキ離せ」
「え？は・・はい！」
捕まれていた腕を離され、シンはレキの元に駆け寄る。
「レキ！！大丈夫か！？ってこんなに血出てんじゃん！！」
ライメイは駆け寄ってきた仲間たちに武器を預けながら、俺たちのやりとりを見つめる。
「頭～いいんですか？せっかくのチャンスなのに」
ライメイはしばらく黙っていると思うと、１人歩いて行ってしまった。
「か、頭！」
「レキ、ちょっと腕動かすなよ！」
シンに文句を言われ、仕方なしに腕を見せると・・レキの腕にはさっき受けた傷跡があるにはあるのだが、すでに傷跡は治り始めている。
それにこの手触りといい本当の血？レキは人間なのか・・。とりあえず傷跡に包帯を巻く。

「・・・無茶すんなよ」
とりあえず一言だけ文句を言うと、レキは俺の頭をポンポンと叩く。
「ガキ扱いすんな！！」
「はいはい」

「皆、俺はあいつらと一緒に行動することに決めた」
「「え！？」」
「ちょっと待って下さいよ！！」
「まぁいいじゃん、それにレキ達に付いている奴らも気になるしな」

「あれは新政府の者です」
情報担当のリラが言うとライメイはやっぱりなと頷く。
「新政府の奴らか・・・おもしろそうだな」
仲間達はあきらめ溜め息が出る。
「まずそいつらを殺ってからだな、俺がレキを倒すのは」
「でも頭どうするんですか？」
「俺はレキと行動し、悪いが政府の方の情報収集頼めるか？」
いつものヘラヘラした様子ではないライメイの姿に仲間達は一瞬言葉を失うが、そのなか口を出したのが女のリラ。
「頭何言ってんですか？我々はいつでもあなたに付いていくと決めたはずですよ？」
リラの言葉に他の仲間達も賛同する。
「そうですよ！」
「頭、新政府の奴らなんて、やっつけちゃいましょう！」
「皆、サンキュ！」

あれから2日ライメイ達の出没もなく、いつも通りの旅をしていると・・・。
「お～い！！」
「なぁレキ、すごい気になるんだけど・・あれってどうみても・・」

ライメイが少し離れた所から走ってくる。
「お前何で付いて来るんだよ！って手を振るな！！」
「俺も一緒に行ってやる」
「「はぁ！？」」
「まぁよろしく頼むわ♪」

★ライメイが仲間に加わった

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第九章　生きる場所

『お前の名前は“レキ”』
闇の中から聞こえる声・・小さい声なハズなのに、何故か耳にしっかり聞こえる声。
『・・レ・・キ？』
『そうこの世のすべてを砂礫にする者、誰のモノにもなってはいけない』
すべてを見透かされたような・・抵抗する気もなくなる・・まさに創造神・・。
『お前の進む道は血塗られた道しか無い！最後になるまでもがき苦しめばいいさ！！』
『逃げなさい！そして生きろ！レキ！！』
誰なのか分からない・・誰だと問い掛けることもできない・・・。
『俺達を裏切るのか？同胞の俺達を！！』

誰かが呼んでる、目を覚まさないと・・でも・・体が重い・・・。
「！！おいレキ！！」

『・・・目を覚ませ』

「おわ！何だよ急に起きるなビックリするだろ！！」
「・・・悪ぃ」
いつもと調子が違うとこちらが驚く・・・。
「そーいったら、ここん所ずっと東に向かってるけど・・・誰かに会いに行くのか？」
「あぁ聞きたい事があるからな」
レキは何も言わないけど・・誰かを探してるのか？ライメイは知ってるようだけど・・・。

「レキ、俺はあんたに何があってのも着いていくと決めてるし、いつかは話してくれるか知る方が早いかは解らないけど、あんたの事を少しはわかっていきたいと思ってるから！それだけ！」
「シン」
「俺、先に行ってちょっと水でも探してくるから」
「青春だねぇ～」
一部始終を聞いていたライメイはニタニタ笑う。
「一度死ぬか？」
「冗談冗談」

「・・・はぁ」
レキが調子が悪いのは、この間の傷がまだ治りきってないからかもしれないし、一度どこかの大きな町で休まないと。手配書が回ってるってことはいつ何があるか分らない状況なんだろうし・・。
「何だよ？・・・ちょっ、服引っ張るな！・・・え？」
そこにいて、服を引っ張っていたのは小さな子供？が5人、皆布切れを体に巻きつけただけのみすぼらしい姿。
「ねぇお兄ちゃん、旅の人？」
「あっあぁそうだけど」
「じゃあ疲れてるよね？」
「え？は？ちょっと」
子供の力とは思えない力でズルズルと腕を引っ張られて着いた先は、土で固めただけの家が折り重なっている場所。
「こっちだよー」
土で出来た部屋の中は思ったより広く、壁を背に座り込んでいる人や寝そべっている人がぎっしり居る。
「ようこそおいで下さいました」
「はぁ？」
一番奥らしい部屋には陽の光も入らないのか、照らす物はあっても薄暗い部屋で表情までは分らない。

部屋には結構な人数が座っていて視線が突き刺さる・・・。
「無理矢理にひっぱてきた事に失礼を・・」
「はぁ」
1人だけ椅子に座った人物が一番えらいようだ。
「皆、ちょっと席を外してくれ」
他の者が部屋から出て行くのを確認すると、一番偉いらしい人物が静かに話し始める。
「レキ様ですね、早速ですがお願いがあり今日お越し頂いたのです」

「え・・・ちょ・・」
「まず、来てくれたことに感謝をします、私はココで指揮を取っているレインっと言う者、ココにはレキ様と同じ様に多くの機械人形がいます、そのため軍政府から強引な攻撃を受けてまして」
「軍から守って欲しいっと言う事？」
「そうです、3日後に最後の攻撃をと伝令が来たんです」
レインが伝令の文章を見せてくれた・・・。
「・・・ちょっとスイマセン、息抜きをしてきてもいいですか？」
ここ数時間ず～っと、説明ばかりだったことにレインも気づき休憩をさせてくれたが、自分がレキじゃないということ伝えそびれてしまった・・・。
「とりあえず今の内にレキに・・・」
っとこそっとその場から逃げようとした時、子供たちに見つかってしまい・・。
「お兄ちゃんどっか行くの？」
「僕達を助けてくれないの？」
「・・・・・はぁ・・・・・どうしよ・・・」

「・・・にしても、あの小僧どこまで行ったんだ？」
いつまでも帰ってこないシンを探しに大の男2人が腰を上げる。

「俺・・・何でこんな子供と遊んでんだよ・・・・・はぁ」
結局逃げ出せないまま、子供に捕まり遊んでいるシン。

「お頭、本当によそ者のあんな奴を信じるのか？」
「そうですよ！何か弱そうですし・・」
「大丈夫だ、それよりレキ様はあくまで助っ人だ、レキ様の力を借りずとも我々の力で戦う心得はしておくように！」
「はっ！」
皆はひとまずレキの事は置いといて、自分達の戦いへと意識は移す。
しかし、副頭の短髪に頬に傷がある青年は納得が言っていないように舌打ちをしてその場から離れた。

「スイマセン、子供達が迷惑をかけたようで」
「いえ、皆元気ですね・・・あの、どうしてレっ・・いや自分の事を知ったんですか？」
「それは、ドールと言ったら我々機械の同胞の中の救世主っと言った感じの存在だったんですよ」
「救世主？」
「はい、私は実際見たことは無いのですが、あの戦乱中、また戦後もレキ様の存在は私達に希望を見せてくれていたのです」
っていうか、レキってドールなのか？ただの人間ではないだろうとは思ってたけど・・・。いつもレキの姿を思い出しても本当人間の様に見える・・不思議な力を使うことはできるけど・・。
「そうだ！ここに攻め入ってくる軍政府に何故力が必要なんだ？機械人形ならそれなりの戦力はあるんじゃ・・？」
「確かに整備がなされていないとは言え、機械には自分を守るだけの力はあります・・けれどココのまだ幼い子供達の８割は人間の子供なんです」
子供達の多くは戦争孤児で、身寄りのない子供たちを機械達が育てているのも戦争中では考えられない・・だけど子供たちはどのこも

ここの人を信頼しているようなのは分る。
その時砂風が吹き、いつも被っていたフードが脱げると、レインは、腰までである金髪の美人女性であるが首から右腕は機械だった。
「戦争が終わり人と我々が、手を取り合い暮らせる日々を今の仲間達と願っていたんですが、やはり人と我々は違うのかと不安があるんです・・今回の戦いが終われば何か答えが出るような気がするんですけどね・・では、どうぞお休みください・・」
恭しく会釈をしてレインは帰っていった。
「人との共存か・・ここまで聞いたら逃げるわけにはいかないようあなき気がするし・・・寝るか」
その時後ろで気配を感じて振り向くと、以前から俺に敵意むき出しの視線を向けている傷のある青年が立っていた。
「レインは何と言っても、俺達はお前に手伝ってもらおうとは思っていない！わかったらよけいな事はするなよ！」
睨んだままそう言い終えると行ってしまう。
「俺だってどうすればいいのかわかんねえよ・・レキ・・・・」

目覚めて見た光景は、小さな子供までも武器を運んだり訓練したりといった状態だった。
シンも一応は戦争を体験しているから、武器なんてあたりまえだったけど・・・やっぱり傍からみたらすごく悲しい光景だ・・。
「あ！お兄ちゃん今日も遊んでー」
「ダメだよお兄ちゃんは大事なお客さんなんだから！」
子供達の中でも年上の子供がそう言ってくれる。
「でも・・」
「いいよ、遊ぼうか？」
どちみち逃げられないし・・やることも無いしな・・。
「うん！！」
「これは？」
子供に連れられて砂漠の方へ行くと見慣れない遺跡が数多くあった。

「遺跡だよ～昔の人が造ったモノなんだって」
「地下に大きなお部屋があるのー」
「うん、大きな道みたいなのもあるんだよ」
「地下に部屋？道か・・ちょっと見せてもらってもいいかな？」

「お頭東・西・南の方角１２キロ地点に政府軍が留まっています！」

「数は現在の確認では各方角に２００人ほどだと思われます、武器の方は戦車なども多数」
「全部合わせて６００か・・」
こちらの人数は２００弱、その中で戦える者は１００人足らず・・。武器もこちらには数を用意してはあるが、持久戦になればこちらには圧倒的に不利。
皆が席を外し各々の準備に戻るのを見て傷のある男がレインに近づく。
「レイン勝ち目は有るのか？」
シンに喰らいつき、レインと呼び捨てにしている男はゲイルと言いココでは副頭として、レインとは幼馴染で戦乱時代から一緒に行動している男。
「適当な策が無いならどうするんだ？このまま戦っても俺達は・・・いいとしても、でも子供達はどうするんだ？」
「ゲイル・・確かに今のままでは、しかし私達は・・」
「レイン！！」
「誰だ？」
「あの・・・」
シンが入って来たことに、ゲイルはあからさまに嫌な顔をする。
「子供達はひとまず近くの遺跡に避難させました」
「近くの遺跡？そんな所に連れ出して何をするつもりだ？」
「あそこには古い遺跡がたくさんあります、砂漠は昔大海原だった

り巨大な都市だったりと聞いたことがあります」
「そんな古びた遺跡に何が有るって言うんだ！？」
「地下に大きく広がる大通路があり、そこに部屋らしきモノもいくつかありました、砂の中のシェルターならば」
「敵に気ずかれなく近ずくことができ、爆弾を防ぐことも可能！」
「これは子供達が書いてくれた周辺の地下の道です、しかしこれは通路を爆撃か何かでふさがれる前に行動しなければいけないし・・・もちろん老朽化した遺遺跡です、ばれて直接攻撃には弱いですけど・・」
「あの子供達がこんな道を知っていたなんて・・・ゲイル今すぐ作戦を変更、この地を生かして戦う準備を！」
「わかった」
「レキ様ありがとうございます」
「・・・あんた本当に政府と戦う気でいた？」
「何を言ってるんです？」
「あんたみたいな目を持った人を俺は知っている、あんたには慕ってくれる多くの仲間がいる・・死に場所を探すのはまだ早いんじゃない？」
その言葉にレインは何も答えなかった、っと言うよりは答えれなかったの方が正しかったのかは解らなかった。けど俺はこの人達には生きてほしいと思った。

「おい！そっち警備が手薄だぞ！」
「だってこっちは北ですよ、敵がいないって・・」
「何で東西南に敵がいるのに北だけ・・・まさか・・・」
「ゲイル、望遠鏡ある？」
「何に使うんだ？」
「おかしいと思わないか？北だけ敵がいないなんて・・まるで俺達を逃がす様に？北に何かあるんじゃないか？」
ゲイルは慌てて北の方角へ望遠を向けると、北は巨大な湖があり、

その湖にそって赤い光。

決戦の日・・双方睨み合いが続くかと思いきや、日が昇るとすぐに攻撃が始まった。

一度に砲撃されるとひとたまりもないが、何とか地理に利ってやつで何とか攻撃を塞いでいるが・・。

「レイン何を考えてるんだ!!」

たまたま通りかかった司令部でまたもや・・。

「自分が政府軍に侵入するなんて!!」

「作戦はまず軍の指令が置かれている湖の基地を落とす、それからこの地下道を使い直接東西南同時に攻撃を行う」

皆はレインの方をじっと見つめている。

「私は本当は死に場所を探していたのかもしれない、戦乱の世を生き残り何をするでもなく生きてきた・・それがこんな結果になってしまったのだと思う、この戦い私は皆を死にさらしてしまった・・・」

レインは皆に頭を下げる。

「何を言ってるんですか、レインさん!俺達は皆お頭が思う道こそが俺達の道だったんですよ!」

「そうです!我々はきっと頼りすぎていたんですね・・」

「これからは私達に何でも言って下さい!」

「一緒に戦いましょう!!」

「皆・・・」

レインは再び頭を下げ、顔を上げたレインは死神を振り払ったように凛とした顔していた。

テキパキと指示を与え、湖の方は水の底から爆薬を仕掛け混乱している間に、北にいる敵軍をつぶす作戦・・。何とか勝利を収めることが出来たが、アジトは砲撃でバラバラになってしまい・・。

「これから我々は新しい家を探しに行きます」

戦いから1日で多数のグループに別れて旅立った。最後に残ったの

はレインとゲイルと子供達。
「私だけでなく、私達の命を助けて頂いてありがとうございました、このお礼は二度と忘れません」
「レイン、実は俺・・」
「いえ、私達にとってあなたはあなたです」
初めて見るレインの笑顔。ゲイルはぶっきらぼうに一言「・・・元気で」と言うと先頭にたって歩き始めた。
「お兄ちゃん、また一緒に遊んでね！」
「それでは・・・」
子供達は最後まで手を振っていたが、レインは前だけを見て振り返る事は無かった。

「おーい！！」
聞き覚えのある声に振り向くと、レキ達がこっちに向かって歩いてきていた。俺は思わずレキに抱きついてしまった。
「何だ～俺には熱い包容は無いのかよ」
「シン何してたんだ？」
「それが！・・・大変だったんだよ～！！」
珍しくレキとライメイは顔を見合わせて肩をすくめたのだった。

戦いにしか生きられない、そんな人がいるなら、戦いの果てにあるこの時代どうやって生きているのだろう。

「シン！早くしないと、また迷子になるぞ！」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十章　かつての友

暗室の中、コポコポ・・・と水の音がする。
「さぁそろそろ目覚める時間だ」
理事はそう言うと制御装置に触れる。
『身体異常無し・・体温・神経・・すべてクリア・・・身体保護液体噴出まで約5秒・4・3・2・1』
体を包んでいた培養液が無くなると、中に入っていた人物はゆっくりと目を開く。
「どうだ調子は？・・・良く目覚めてくれたな、我が息子よ・・」
液の中にいた人物は虚ろな瞳で何も言わなかった・・。
「失礼します」
「何だ？」
「シリウスの村の方で見つけたと連絡が来ました」
「解った、お前が目覚めたイイお祝いができるぞ・・・なぁアキト」
理事の笑い声が響き。
「いつか私の元へ来るんだ、レキ」

『・・・レ・・キ・・・・・』

「レキ！レキ！」
「何だ？」
まだ遠くの方にしか見えないが、確かに前方に町が見える。結構大きな町だ。
「町だよ！町！」
「何だ？お前町めずらしいのか？」
「違うここんとこ小さい村と砂漠ばっかりだったからさ！」
ライメイの嫌味も今ばかりは気にならないくらい楽しみだった。こ

の町であんなことが起こるとは思いもよらなかったが・・。
「レキ～早く来いよ！！ライメイは来なくて良いぞ！！」
「何だと！！」
町についてもシンは浮かれているが逆にレキとライメイは無言のままだった。
ライメイがおもむろにレキの腕を握る。
「こんな所でゆっくりしてていいのか？腕動かないんだろ？」
普通に見れば調子が悪いなんて思わないが、注意深く見ればレキは腕の動きが微かに遅い。
「お前には関係ない」
レキは大した事では無いと言うように、ライメイの腕をはらう。
「ココで軍にでも見つかって、倒されたらどうするんだ？」
「・・・」
「お前を倒すのは俺だからな、他のやつに倒されたらおもしろくねぇだろ」
前をいっていたシンが今日の夕飯などを買い込んで店先から手を振る。
「・・シン何買って来たんだ？」
レキは何事もなかったかのようにシンにいつも通り話しかけるのを見てライメイはムスっとしながら行ってしまった。
「飯とかだけど・・・ってライメイ？」
「ほっとけ・・それじゃ宿に行くか」
「え？宿で泊まるの？」
レキと旅に出てちゃんと宿に泊まるのなんて始めてかもしれない。
「うわぁ～フカフカ♪」
ベットにダイビングをして喜んでいるシンを見て少し微笑んだのを俺は気付かなかった。
「シンにとって、人間はどう思う？」
急に話しかけてきたレキの方へ俺は座り直す。
「人間？俺は・・共に暮らしていければいいと思うけど、人間達が

俺達のすべてを認めてくれるとは思わない事は・・・レキは？」
「・・・・」
「何でこんなこと聞くんだ？」
「いや、何でもない」
その時俺は、レキは何か迷っているように思えた。レキがドールなのかどうかも聞けづにいるけど・・。レキの力はもしかしたら危険なのかもしれない、けどただ殺しあうけの道具じゃきっとない。
「それなら俺だって必要ないじゃん？俺も一緒、それなら不安じゃないだろ？」
それを聞いたレキは少し微笑んだ様に見えた。
「何だ！？」
急いでカーテンを開けると夕暮れを過ぎ、黒くなった空に赤い火が見える。
「シンここにいろ！」
「俺も行く！」
外は大勢の人々のパニックの状態で、逃げ惑い悲鳴が聞こえる。そのためすぐに跡を追ったのだが、レキを見失ってしまった。
何とか人混みを抜け裏路地にはいると、奥の方で子供の声が聞こえる。行ってみると2人の姉弟と思える子供がいた。
「どうしたんだ？」
「フリクが！！」
少女は１０歳位で服が汚れて少しケガをしている。フリクと呼ばれた少年はぐったりとして、頭からは血を流し、足や手にもかすり傷の傷が数カ所ある。
「大丈夫だよ、どこかフリクを休ませられる場所ある？」
少女は混乱しているのか答えないので、自分達の宿に向かいフリクをベットに寝かし傷を手当てする。
「・・うぅ・・」
痛みで声を上げたフリクを見て、少女は青い顔する。
「君の名前は？」

「・・・テ・・ル」
「そっか、じゃテルはフリクの手を握ってて、そうすれば早く元気になるからね」
少女はなんとか頷き、フリクの手を泣きながら握る。それを見てから、シンはフリクの額に手を当ててるとしばらくして白い光が現れ、少しの間フリクを包むと光が消えると同時にフリクの荒かった呼吸は落ち着いたものになっていた。
「もう大丈夫だよ、お兄ちゃんはもう行くけど、フリクの目が覚めたら安全な所まで避難するんだよ」
「うん、お兄ちゃんありがとう」
少女の頬の涙はまだ消えて無かったが、俺はレキを探さなければいけない気がして・・。答える代わりに、少女が安心するように微笑み、頭をなでてから宿を飛び出した。外にはもう人の姿は無く、爆撃音以外静まり返っている。

「まったく弱いのに来るなってんだ」
1人出ていったライメイの足下には倒されたインドール達。次々に爆発する町やわらわらと出てくるインドール達に飽きれながら・・。

「これはヤバイか・・・早く2人所に戻った方がいいかもな」
その場を立ち去ろうとした時、ライメイの後ろで気配が・・。
「あなたがライメイか」
「誰だあんた」
現れたのは青い髪を持つ青年、サングラスを掛けているため表情までは分らないが冷たい空気が流れる。
「レキ・D・キサラに関係する者はすべて処分って命だ、あんたにはココで死んでもらう」
ライメイは楽しそうに笑った。
「ふ～ん、面白いやってみろよ」

レキが町の広場に差し掛かると、フードを被った人物と前に見覚えのある人影ともう1人・・。
「レキ久しぶりだな」
ガーディアルの理事、自ら出向いてきていた。　もう1人のフードの方にレキが視線を向けると理事は面白そうに顔をゆがめる。
「お前にプレゼントだよ、まぁお前が私と共に来てくれたらの話だがな」
「誰がお前と！！」
「ふん・・お前は私をよほど殺したいとみえるが・・な」
理事に攻撃をしたがフードの人物に受け止められる。その時、町に雨の様に爆撃が降って来たため爆風でその人物のフードが脱げるとその人物は死んだハズの・・。

「・・ア・・キト・・・何故！？」

アキトは別れた時のままの姿・・髪が伸び、肌が白くなってはいるが・・・、その顔や姿はアキトと同じ・・。
「驚いたか？お前の友人をわざわざ連れてきたのだよ、喜んでもらえたかな？」
「レキ久しぶりだな、急にお前がいなくなったから心配したんだぞ？さぁ一緒にガーディアルに帰ろう」
あの頃と同じ様な笑顔で、言葉で、差し出された手をレキは取ることができなかった・・・。
「どうした？」
「お前・・・アキトに何をしたんだ！？」
嫌な想像が頭を巡る。
「レキお前とはないだろ？俺の親父に向かってさ」
「親父・・？」
「レキ、お前俺と一緒に来てくれないのか？・・それとも・・あの時と同じようにもう一度俺を・・・殺す？」

「！！」
「だったらお前を殺して連れて帰るか・・・」
アキトの合図で潜んでいたインドール達が現れレキに向かう。しかし数が多くても、インドールとレキの力は歴然の差だ。
「レキ！」
その時、シンがレキの姿を見つけ走ってきた。
「シンこっちに来るな！」
「え？」
その隙、アキトの刃がシンへ向かい、それを防ごうとしたレキは腹に刃をうけた・・。いつもより腕の動きが鈍く止めきれなかった。
「レキ！！」
「ハハ、レキ立ちな！俺を殺したお礼はしないと」

「どうして・・」
ライメイの腕は機械の心臓とも言える“核”をもぎ取っていた。青髪の青年は地に倒れたまま動かなくなってしまった。
「こいつはやっぱり機械か・・・でもこんだけの性能・・・ったくよけいな所で時間を食った、早く見つけないとやばいか」
ライメイがその場から消えしばらくすると青髪の青年は立ち上がる。

「あれが、ライメイか・・・」
「油断した～？」
のん気な声が頭上から落ちてくる、見上げると緑のふわふわの髪を持つ少年。
「リンジェ」
「ちゃんと仕事はしてきたからね！」
怒られると思ったのか、急いで言うリンジェ。
「ならいい、こちらもデータは入手できた、今日は引き上げるぞ」
「うん、シュキ」
リンジェとシュキは炎の中に消えていった。

「レキ！レキ！」
「何だ？レキお前が誰かを側に置くなんて珍しいな、アキトの代わりか？」
「シン逃げろ！」
レキが地に伏せるなんて初めてだ・・・何だよこいつレキをやるなんて、そんなことより今はこの状態をどうするかだ！！
「レキ、ちょっと寝てて」
「シン？」
アキトの方へ向いたシンは目にも見えない位の早さで動き、残ったインドールをすべて倒す。
「ハァハァ」
「君、なかなかやるね、ただのアキトの代わりってわけではないようだな」
シンは肩で息をしながらアキトの方へ構えるが力を使いきったように重い・・。その時アキトに異変が起こり、頭を押さえ倒れてしまった。
「アァー！！」
「ちっ！まだ完全ではないっと言う事か・・・しかたない今日の所は引くことにしよう」
理事の後ろに飛行船が止まる、それから出てきた白衣の人物達はアキトを連れていく。
「レキお前が帰って来てくれることを楽しみにしてる」
2人がいなくなるとシンは荒い息をして、その場に座り込んでしまった。
「シンお前・・」
遠くから段々と巨大な音が近ずいてくる・・。
「あー疲れたってお前ら平気だったか？って何だレキやられたのか？うわ、バカじゃねーの？」
シンは何とか呼吸を正し、立ち上がる。

「大丈夫なのか？」
「・・・うん」

俺達は攻撃が終了したのを知ってから、急いでその町を出てレキの言う目的地シリウスへと向かった。
狙われているのはレキ・・・。
その間俺は気まずくレキと話せないままになっていた。
そしてレキも何も聞かなかった。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十一章　シリウス

あの町で起こった後、俺たちは気まずいまま目的地のシリウスに着いたのは、それから一週間馬車に揺られてからの事だった。
「ここがシリウス・・・」
オアシスに囲まれた大きくはないがゆっくりと時間が流れている平和そうな町だ。
「すいません、カスガ、カスガ・ミヤと言う人物はこの町に住んではいないか？」
「カスガ？あぁあの、それならほれ」
町人が指した方角には丘の高台にある一軒の家。一直線にその丘の家に行くと、緑の蔓にグルグルに巻かれ屋敷・庭には色とりどりの数多く直物が咲いている。家をのぞこうとした時、ちょうど屋敷の門の前で言い争っている声がする。
「ちょっと！これがそんなに高いわけ無いでしょ！高く見積もっても２５０がちょうどいいでしょ？」
門の前にいるのは少女と商人。少女の方が大の男の商人よりかなり強気だ・・。
「そんな殺生な～」
「ダメなら買わないわ、早く帰ってちょうだい！」
「う・・わかりました、じゃ２５０で」
「おい」
レキの声に振り向いた少女は、ピンクのカールした髪を２つに束ね服装は黒のレースのミニドレス。まだ少女なのにその瞳には威圧感があった。
「・・・・・」
「カスガ、俺の顔を忘れるくらい歳を取ったのか？」
カスガと呼ばれた少女はその言葉に子供の顔から大人びた顔つきに変わる。

「入ったら？」
「なぁライメイ、カスガってどんな人なんだ？」
「お前そんなのも知らないのか？カスガは戦乱時代第一線で機械人形を造っていた技師」
「技師？」
「・・確か今年で・・二百・・」
「そんなに年いってない！！今年で・・・」

「入るのかい！？入らないのかい！？」

「・・・まぁなんだ・・レキをいや、俺達の産みの親ってわけだ」
カスガの人声に不思議なくらいレキとライメイは静かにカスガの後に続いて屋敷へ入る。丘の向こうから見るとそんなに大きな家のようには見えなかったが、実際近くで見てみるとかなり大きな屋敷だ。
「フェイ！客人だよ！」
「ヨウコソオ・・出デ下シマシタ」
屋敷の奥から、藍色の肩までの髪に少しきつめの同色の瞳を持ち、メイドの服を着た２０歳位の女機械人形が出てきた。丁寧にこちらへ礼をしたあと客室まで案内後、お茶まで用意してくれた。
フェイと呼ばれたメイド機械人形は、言葉には機械なまりがあるものの容姿、動作は精巧な作りだ。
「おい、シンを頼むぞ」
「ほーい」
「え？レキ？」
色々珍しい部屋を見ている間に、レキはカスガに連れられて奥の部屋に行ってしまった。部屋に残るのはシンとライメイ・・何か気まずいメイドさん。
「シン、俺ちょっと出て来るわ・・お前はココにちゃんといろよ」
いつものようにあっという間に部屋から出ていたライメイ・・・２

人きりになってそっとメイドさんを見てみると、無表情で見つめられる。
「オ菓子デモ持ッテ来マショウカ？」
「だっ大丈夫です・・あの、レキとカスガさん？は・・・」
「レキ様は、今カラ１５年前ニカスガ様ニ造ラレマシタ」
「ここで作られた・・・」
レキの力を見たら普通の人間じゃないことはわかる。けど見た目はどこからみても人間・・・でも作られたと聞くとそれが現実なのかと思う・・。やはりレキは・・・。
「ソウデス、ソレカラスグニ、レキ様ハ戦場ニ行ッテシマッタンデス・・カスガ様ハトテモ、レキ様ノ事ヲ心配シテイマシタカラ・・」

カスガの腕は確かで、レキの壊れた腕もすぐ元通りの動きを取り戻す。
「カスガ、シンを頼むぞ」
「何を言って・・」
動くようになった腕を最後は自分で無理やり付けてレキは立ち上がる。
「レキ！まだ腹の穴は治りきってないよ！」
声をかけた春日の方を一度振り向き何か言おうとしたようだったが結局カスガに軽く頭を下げたまま部屋を出て行ってしまった。

ってか・・・レキもライメイも何してんだよ～ってあれレキ？
庭の裏を横切って歩いていくのは確かにレキだ。視線を向けていると屋敷の入り口にいたのは政府の役人・・シンは慌てて追いかけようとしたとき、カスガが部屋に入って来た。
「どこに行くんだい？」
「どこってレキが！！」
「レキは自分で行ったんだ、お前を頼むって言ってね」

「！！そんな・・」
信じられず部屋を出ようとするが、カスガに止められる。
「お前が行った所でレキの足手まといになるだけ、じっと帰って来るのを待ちな」
「・・嫌だ！俺はあいつと一緒に行くって決めたんだ！！」
「まったく何で機械人形と言うものはこんなに不器用なんだか・・・」
シンはカスガの手を振り払って出て行ってしまう。連れ帰ってこようとしたフェイを止め、カスガはゆっくり椅子に座って呟く。
「だが・・それは我々人間も同じか」

「ったくレキのやつ、行くにしても俺に一言ぐらい言って行けよ！！」
シンがレキを見つけたころ、すでに政府の役人に連れられ飛行船に乗せらそうになっていた。
「レキ！！」
「シン！？」
「何だ？あのガキも仲間か！！捕まえろ！！」
「シン、必ず帰って来る！お前はカスガを守ってやってくれ！！頼んだぞ・・・」
「レキ！！」
飛行船は空に浮かび、沈み行く太陽の方角へと飛んでいってしまう。

「レキ、何で・・何で俺に・・何も言ってくれないんだ！！」
ブチ切れヒステリックになったシンの怒鳴り声が虚しく空に響いていた。

飛行船は何事もなく目的地に到着した、目的地は思った通りガーディアル・・そして兵士達に囲まれて、裏の道を進み行く。
しばらく歩くとレキがココを出た状態そのままだった、学生が同じ

日常を楽しんでいるのを見ていると急に背を押され、どこかの部屋に入った。
「・・・戻ってきたか・・・」
暗い部屋に照明がさすと、不適な笑みをした理事長・・と傍らにはアキトの姿。
「私はいつかお前が帰って来ると知っていたさ、お前はココを離れては生きられないんだからな・・・お前は二度と自由なんて与えない、お前は私のために生きるのだからな」
そう言うと、レキの力を分析し防御壁を張った部屋にいれられる。一面白い部屋に白いベットが一つあり、横に何かを測定するのか機械が置かれている。窓もなく、天井は高く出入りはできないまさに監獄、そして唯一ある鏡の向こうは見張り用なのだろう・・。レキは何も文句も言わずベットに腰を掛ける。

「ミツキ・・ミツキ!」
「何だよギル?」
消灯時間はとっくに過ぎて、眠りに入って行こうとしている時にギルに起こされるミツキは機嫌悪そうに言う。
「いたんだよ!!」
「何が?」
「レキが!レキがココに帰ってきてんだよ!!」
「ほんとか!?」
「あぁ!確かに見たんだよ!帰って来てるの!!」
ギルが話すには、兵士達と一緒に一般人立ち入り禁止区域へと入っていったそうだ。
「あそこは・・・理事達の住んでる所だよな・・・・」

「そんなに心配なら、行ってこい」
ひとまずシンは、カスガの屋敷に戻ってレキのことを話す。
「でも、レキが・・・」

もちろんすぐにでもレキを追いかけたい・・・けど、レキにカスガを守ってやってくれって頼まれたし・・・。
「私の事なら心配要らない、そう簡単には死なないし、殺されないさ」
その言葉に、フェイやライメイまでも複雑な顔をしたが、それは一瞬のことで・・　。
「それより、お前変わった機種みたいだ・・・私の造ったんじゃないし・・・お前どこから来た？」
「それは・・・気が付いたら普通に暮らして・・自分が人間じゃないってことも大分後に知ったから・・」
「なるほど・・まぁお前なら大丈夫だろ、レキよりは強いようにみえるしな」
「俺がレキより強い？」
「あぁ、あいつはもとは・・・人間だからね」
そんなの初めてだ、確かに戦争中強力な力を身につけるためサイボーグとなる人間はいたと聞く・・けれどレキは・・。
「ほれ、行きな！」
カスガが投げた旅の荷物をシンは受け取り、しばらく悩んでいたが礼を行って部屋を飛び出す。

微かに耳を澄ますと、本棚の後ろにある隠し扉の部屋から歌声が聞こえる・・　。
「カラ、お前も行っておいで」
部屋の中央に穴が掘られ水が入っている、その中に鎖で四方を止められた椅子に座るカラ。カスガの声に瞳を開け、歌を止める。その歌もまた人の歌声とは違う、感情がないような複雑な音だった。
鎖はカラの歌とともにはずれはじめ、すぐに鎖は水の中に沈む・・そして水からでたと思うと、一瞬にしてカラの姿は消えてしまった。
「行カセテ、良カッタノデスカ？」

「籠の鳥も、最後まで大空を飛ぶ事を諦めない・・・って事さ・・・」

「カスガ様・・」
「フェイ、用意だ！これからだ」
「ハイ」
「一度来た道は二度と帰れない・・・か」
青く澄んだ空だが、カスガは眉をひそめて呟いたのだった・・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十二章　ガーディアル

ガーディアルに着いてからのレキは、繰り返し繰り返しの研究材料の毎日だった。
どの研究員もレキのデータに驚きと、実験できる喜びでいっぱいだ。
「どのデータも、他の者とは比になりません！」
理事に報告する研究員達、そしてガラスの向こうには機械の中で検査されているレキの姿。
「父さん、他のガーディアルから至急の連絡です」
「・・わかった」
アキトは理事が部屋を出たのを見て、ガラス越しにそっとレキに視線を移す。あのレキという男を父はお前の友人だと言った。けれど自分には記憶がなく・・・でも自分でも分からない気持ちに頭が痛くなる。アキトは頭痛を感じレキから目をそむけた。

「だー！レキを追いかけるって言ったのはいいけど、どっちにいったんだよ！！」
砂漠の真ん中に立ち尽くしていると頭上からポタッポタと落ちる水に雨かと上を向くと・・・。
「わぁぁぁ！！？」
水で全身が濡れている黒髪の女が木々の上から自分を見下ろしていた。・・でもこの女どこかで見た事が・・・。
「カラか！！って登場の仕方怖すぎ！！・・・・ってどうしてここに！？」
急に現れた人物にオロオロとしていると、カラはシンの頭をぺしぺし叩く。
「治った？」
「・・・・治った・・・・って、あんた何者だよ？」
前に見た通り腰まである黒髪に黒い瞳で、左眼には包帯が巻かれて

いるし！その上、なんか・・・ぼ～っとしている。
「レキの知り合いかな？」
「俺に聞かれても・・・」
「レキの所、行く」
この女の事はわけわからないが・・道に迷っているため仕方なくカラについて行く事にした。カラは目的地が分っているようで迷うことなく歩いていく。数日間ほとんど歩きっぱなしでいい加減どうしようかと思っている頃に、前方に大きな建物が見えてきた。
「あの建物って・・・」
「ガーディアル・・・戦後平和を維持するための教育機関・・それと小さな都市でもある」
「ここにレキがいるってこと？」
頷くカラを見て、そうと分かれば後はレキを連れ戻しに行くだけだ！
カラがシンへ懐から取り出したものを手渡す。偽装ＩＤカードと白衣のおかげで案外簡単に侵入することができた。
正面からどうどうと行くとは思わなかったが、逆にどうどうとした方がいいのかも・・・。警備員に見つかってもさっきまでとは別人のようにビッシッっとしたカラはすごく頼りになった。
なるべく目立たないようにカラの後を黙って歩いていくと、生徒が２人が人目につかない所で喋っている。
耳を澄まして聞いてみると“レキ”の名前が聞こえた気がして思わず生徒の前に飛び出してしまう。
「レキを知ってるのか！？」
思わず大きな声を出してしまったシンの方を、２人の生徒は驚いて振り向く。
「あんたレキの事知ってるのか？」
「あ・・あぁ・・・俺たちレキを助けに・・・」
「レキ、どこ？」
「助けにって・・・えっと、こっちだ・・・俺はギル、こいつはミ

ツキって言ってレキの友達だよ」
「レキの・・俺はシン、こっちはカラ・・」
話しながら歩いていくと、立ち入り禁止の通路に来る。
「ここはガーディアルの理事の部屋や研究室があるんだが、立ち入り禁止で防犯カメラも設置されている」
「僕が見た時は兵士達に連れられて入っていったんだけど、ここからの事はわからないんだ・・ただ、このガーディアルの中央にある白い建物は研究施設なんだけど、もしかしたらそこにいる可能性は強い」
「そこに入るには？」
「・・通路は１つだけで、もちろん警備員がいる」
ギルとミツキもレキを心配して色々調べてくれていたのが暗い表情でわかった・・。
「カラ？」
「行ってみる、待ってろ」
「わぁ！？」
言い終わるか終わらないかでカラの姿が一瞬で目の前から消えたので、ミツキは驚いて叫んだが、シンとギルは落ち着いていた。
「何で２人も驚かないんだよ・・・」
カラがいなくなって、少しその場で待ったがいつまでかかるかわからないのでギル達と一旦寮に向かった。
「ここ・・レキの部屋だったんだ」
「俺の部屋で話そうぜ、その格好じゃ目立つし・・」
ギルに変えの制服を貸してもらい、着替えたあとレキの話を聞く。
「あんたはミツキとは違い、力に驚かないんだな」
「あぁ、レキの事は何となく・・な、でも何でこんなことに・・・レキには何かあるのか？」
「・・・・それは」
ポチャンと水音がしたと思うといつの間にか部屋の入り口にカラの姿があった。

「・・・見つかった」
「あの・・・」
「・・・いいよ、いつかレキ自身が話してくれるかもしれないしさ・・・あいつをレキを助けてやってくれ」
ギルとミツキに力強く頷いてから俺はカラと共に部屋を出た・・・。

「お頭、こんな所にいていいんですか？」
「レキ捕まったんでしょ？助けに行かなくていいんですか～」
ライメイは、のん気にアジトに帰って来て酒を飲むばかり。
「いいんだよ、あいつがやるだろ～それより今は・・」
短髪の髪の女、リラがタイミングを計ったようにライメイの前に出る。
「各地で他のガーディアルが謎の攻撃を受け、次々に壊滅している所もあるようです・・・政府はこのことに関して動きはまだ」
「謎の攻撃か」
「それに最近、キメラや処理を行っているはずの機械人形をよく見ます、整備などもされている状態なので誰かが裏で噛んでると・・・」
「そうか・・・メグに会いに行って来る」
「お頭、メグってあの・・・大丈夫なんですか？」
「まぁ火急の用だし、レキがらみとなると動くだろう～そんじゃ後頼むな」

「何、レキどこにいるかわかった？」
カラが指さしたのは、立入禁止の理事の空調用のパイプ。っといても人間が通るには狭いし何より俺の背じゃそこまでたどり着けない。
これじゃ無理だなぁっと思ってるとカラは体を液体化する。
「って、あんたはそれできても俺は・・」
呟くと同時に警報が鳴り響く。その音でここを守る警備兵達が現れ

るがカラはするりとパイプへ入る。
「シンは足止め」
「へ！？」
「危なくなったら、逃げて」
「ってちょ！・・・俺もしかして・・・おとり・・か！！」
ガクッと気分落ちをしながらも、敵に囲まれるとやるっきゃない・・・。
「早く帰って来てくれよ～（涙）」

「どうだ調子は？」
ガラスの向こうから理事声がする、レキの方はベットに座った状態でガラスを見つめるといつもは見えなくしているガラスに向こう側が映し出される。理事の傍らにはアキトが立っていた。
レキと目が合うとアキトは自分の感情がただ不思議だった。・・・ただ・・・何故アイツを見るとこんなに胸がざわめくんだ・・・。
「アキト何をしている、行くぞ」
理事達が出て行くと同時に何かを感じ足を止める。それはレキにもわかったようでレキとアキトは頭上を見上げる。
大きな音がするとともに天井が崩れると同時に湿った風が部屋に吹く。
「何が起きた！？」
慌てる研究員や理事をよそに、空から舞い降りたのは、黒い髪をなびかせる女。何十メートルもする上から落ちても、軽く音をするだけの着地でレキの前に立つ。
「カスガの仕業か・・・」
黒い雲に覆われた空から雷の音が近づき、ポツポツと雨が降り注ぎ始める。
「どうなっている！さっさとあいつらを捕まえろ！！」
理事の罵倒が飛ぶ、しかしアキトはただガラスの前に立ちレキを見つめていた・・・。

「レキ」
雨が結晶化して翼になって、その翼は青い光に包まれている。カラの腕に捕まり脱出をする途中、ガラスの前でアキトと目が合う。
「アキト！！」
アキトに向かって手を伸ばす、だがアキトとの間には冷たいガラスがあり、そしてアキトは手を出すことはなかった。ただ、アキトの頬にはぬくもりはすでに無い・・冷たい滴が流れていた。

「・・・ハァハァ・・・一体どれだけいるんだよ！！！」
シンは倒しても倒しても出てくる敵にウンザリだ・・。
そこへ緑のふわふわの髪をし、自分と同じ位の少年が現れた。その少年はあっと言う間に敵を倒すとシンの前に近ずいてくる。
「警戒しなくてもいいよ、君は僕らの仲間なんだから」
「仲間？」
油断したシンは、少年の力によって壁に体ごとぶつけられそのまま気を失った。

「そう、ただし君が僕らの仲間になるんだけど・・シン・スゥーくん」

部屋の隅から白い服を着た人達がシンを連れて行く。
「クスクス」

「レキ！」
「ギル、ミツキどうだ？」
ガーディアル中を捜してくれたギルとミツキだが、やはりシンの姿は無かったようだった。
「やっぱりどこにもいないよ・・」
「入れる所はすべて捜したんだが、どこにも・・・」
「そうか・・・」

一先ず騒がしくなってきたガーディアルを離れるために、レキとカラはガーディアルにある前に秘密基地みたいな感じで使っていた部屋に隠れた。秘密基地と言っても、今では使われていない寮の一室なのだが・・。
「どうするんだ？」
状況はすぐにここを離れた方がいいのだが・・シンを置いて行くわけにはいかない。
「だから待ってろといったのに・・・」
「何やってんの？」
「「うわぁ！？」」
どこから入ってきたのか、レキの後ろからひょっこり顔を出したライメイ、ギルとミツキは多少のことには慣れたが、急な事は心臓に悪い。
「俺は顔が広いんでね♪って、シンが連れ去られた？ったく・・・これだからあまちゃんは・・」
「・・・・」
「まぁ、そう簡単には殺されはしないだろ？それより・・本格的に動き出したぞ、早くここを離れた方がいい」
「レキ・・・」
「そう言えば、この間アキトによく似た人を見たんだよ・・・理事とかと一緒だったんだけど・・」
そのギルの言葉に、いつもは表情を変えないレキも表情を変えた。
「ギル、ガーディアルが変な動きをしだしたら教えてくれないか？俺はお前達を守りたい・・・」
「・・・レキ、言っただろ？俺達はお前の友達だって！・・・ガーディアルの情報は調べておくよ」
「すまない」
「・・僕も調べるから！！」
「ありがとう、ミツキ」
「2人には言ってないことはたくさんある・・・だけどいつか話す

から・・・必ず・・・」
ミツキは再びの別れに少し涙ぐみ、ギルはいつものように明るくレキの背中をたたく。
「約束だぞ、必ずまた会おう」
「・・・・・あぁ」
「レキ！行くぞ！」
ライメイがレキに向かって叫ぶ。レキはギル達と別れ、ライメイ達のもとへ走る。頭上を舞っていたヘリは3人を見つけ追うが、レキ達は振り向かず前だけを見て走っていった。
「ギル・・・」
ミツキが不安そうに名を呼ぶが、ギルには何も答える事はできなかった。
3人の姿・ヘリの音が聞こえなくなると、砂のすれる音が耳に響く。世界中の人が何も知らない所で、何かが起こり始めている・・。背後から迫る不安はあったけれど、今は友の約束を信じれば必ず大丈夫だと自分にギルは言い聞かせた。

「レキ、シリウスに戻るんだろ？・・悪いが先に行きたい所があるんだ」
「久しぶりにメグに会いにいかないか？」
メグと言う言葉にレキは険しい顔をするが、ライメイはおもしろそうに車を走らす。
鼻歌交じりのライメイとは違いレキの表情は険しかった。

車が走り続けて4日で、キトンの前にある町に着いた。
「少しココで休んでいかないか？」
返事も待たずにライメイは人混みへと消えてしまう。　レキとカラは顔をお互いに見て、一先ず人が少ない場所に移動する。
「お前は何が目的だ？・・・顔見知りならたくさんいたが・・・あんたは見た事が無い・・何故名前がわかったのはわからないが・・」

「言えない、私は先に戻る・・・するべきことがある」
カラはそう言い残し体を液体化したと思うとすっと大地に溶けていなくなってしまった。
「・・・・シン」
カスガに応急処置だけをしてもらった腕が痛む。ずっと忘れていような傷の痛みに顔をしかめ、腕では無く胸を押さえる。今はもう動いていない心臓を・・・。

「ここにいたか・・・ん？あれ一人？」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十三章　復興の町キトン

ソラと別れ2日が経ってようやくキトンの町に着いた。
「まぁ行ってからのお楽しみってやつだ」
ライメイに連れらるまま町を歩いていく。キトンの町は、戦争時代に戦場となった場所だ・・・人々は逞しいもので、荒れ果てた土地を耕し町を一か
ら作り直した。だからか町にいる人々は自信と明るさを持っているようだった。

「お頭！！！助けてください！あの女かなり恐いんっすよ～！！」
ライメイの仲間らしい男たちは怯えきっている表情で助けを求める。
それを見てライメイは俺の方を自信満々で指さし・・。
「あぁコイツ連れて来たから、安心しろ」
それを言ったと同時に、男たちがきた方向から大きな音と悲鳴が・・・。
近づいていくと、一つの建物が揺れている（現実では揺れる事なんて無いのだが・・）そして建物の前にはだらしなくのびた男達がひっくり返っている。ライメイは少し仲間達にすまなそうな顔を向け、その揺れる建物へ入っていく。

「何！！あたしの酒が飲めないって言うの！！？」

部屋の中はバーの様だが、すでに見る影もない状態に壊され、建物の前と同じ様に人が倒れている。その中央に地べたに座っている女が一人。
「久しぶりだな、メグ！」
メグと呼ばれた女は、すわった目で両手に酒を持ったままで振り向

く。
「そのバカ声ってライメイ！！？何しに来たの！！？」
怒声と共に手に持っていた酒びんを投げつけるが、それをライメイは軽く避け・・・レキが酒びんを受け止める・・。
「・・・レキ！！？・・・／／／／／」
避けたライメイに掴みかかろうと近づいたメグがレキを見つけ急に顔を赤くし、口ごもる。
「メグ久しぶりだな、元気そうでなによりだ・・・」
メグとは戦乱時、同じ部隊では無かったが面識はある人物だ。
「え・・あっ・・レキどうしたここに？」
質問にライメイが口を開く。
「メグに頼みがあって来たんだ」
「頼み？」
「あぁ、けどその前に！」
無理やりレキの腕を引っ張り、メグの前に出す。
「まず治してやってくれ」
メグがレキの腕を見て声を上げる。
「カスガの所へ行ったんでしょ？なのにどうしてこんな状態なのー！？」
レキの腕は皮が剥げ、血の色をしたどす黒い液体が漏れている・・・生身で無くても痛覚をデリートしないかぎり痛みは相当のはず・・・。
「レキこっちへ来て！！」
メグは機械の修理を行い、情報で知らないものは無い位の情報通・・しかし実の所情報にはかたよりがものすごくあるのだが・・機械修理はカスガの元で弟子として働いていたからかなりの腕前だ。
「・・・さすがカスガね・・肉体と機械が精密に繋がれている・・・ふぅ・・・はい終わり、悪いけどこれ以上は私では・・・」
「いや、助かった・・ありがとう」

にっこりと微笑むレキに、メグは赤くなる。
「役に立って良かった、だけどすべての組織がくっつくまで2時間は絶対安静！！」
レキを部屋に残してメグは休憩室に移動する。
「メグ、終わったのか？」
「えぇ何とかね・・・ライメイは知ってたの？レキのこと」
「さぁね」
追求しても答えを言わなそうなライメイ見て、メグは質問を変える。
「・・・本題は？」
「あぁ・・ここ最近のガーディアルと新政府の動き、それとアイツらの情報」
「ガーディアルと新政府・・・・と、アイツらの情報・・・高くつくよ」
「レキにも請求したのかよ？」
「レキは別！憧れのレキ様なんだがら！！」
「・・・・お前結構ミーハーだな・・」

窓の外には、鳥達が空で舞っているのをレキは見つめながら。
『お前は化け物だ！！けしてどちらにもお前の居場所など無い！！』
昔の自分を捨てると決めてから夢は見ない・・人間の時の記憶か・・
それともまったく別のものか・・ただ頭に浮かぶ・・声と映像。
「居・・場所・・か・・・・」

「レキ！どうだ調子」
部屋にいたのはライメイと黒髪のボーイッシュな女性が、机に座り茶を飲んでいた。
「リラと言います、いつも頭が迷惑をかけてます」
レキが言う前にリラは自己紹介をする、どうやらライメイの仲間のようだ。それにしてもコイツと違って礼儀正しい・・・。
「メグか？・・もうすぐ帰ってくると思うぜ」

ライメイが言った通り、メグはほんの数分経つと帰ってきた。
「あ〜高くついた！！ったく」
ブツブツ言いながらも、メグはレキ達がいるのがわかり席に着く。
「レキ、あなたの連れは新政府が統括している町にいるわ」
「新政府軍の領土に？」
「ロウス、新政府軍の中央の１つの町・・ガーディアルのシトと呼ばれるグループが不信な動きをしているらしい」
「シトか・・・同じガーディアルで何度か理事と接触している所を見た事がある・・」
「ですがそこへ助けに行くとなると危険ですね、新政府軍は機械を敵のように思っています・・もしばれたらやっかいな事になりますよ」
「だが行かない訳には行かない、それに動きを把握する必要がある」
「そうね、嫌な空気が流れている感じがする・・・レキ、私達も気になることがあるから後から行こうとは思ってるけど・・・」
「俺は今から行ってくる」
「・・・・そう、じゃ気をつけてね・・・」
レキが建物から出て行くのを見送ってから、ライメイ達はメグの方へ向きなおす。
「・・・・・・じゃぁこっちの本題といきますか」
「えぇ」
ライメイ達は真剣な顔をし、メグは計算機を取り出す。

アキトはガーディアルの中庭にある、永遠と湧き出る湧き水を眺めていた。
レキを捕まえろと父に言われたのに、彼を見ると体が動かなかった・・それに頬に伝うものがなんなのか・・・。
父は、彼は俺を殺した奴だっと聞いた・・でも俺は何故・・もう一度会いたいと思うのだろう・・・・。
「アキト何をしている、実験の途中だぞ」

「・・はい、すぐ行きます・・」

>>>Next

第十四章　闘技場《前編》

シンは牢屋のような場所に入れられたまま、かなりの時間が経っていた。
クソー！どうなってんだよ・・扉は鉄製、高い天井・・空気穴は小さくて通りぬけることなんてできないし！！
「あ〝〜腹減ったなぁ・・・レキ、心配してくれてるかなぁ・・・」
こうやってする事も無かったら色んなこと考えちゃうな・・。俺がレキについて旅に出たことや、それがだんだん事件とかに巻き込まれていくこと。
レキの行く道に俺の答えが待っていると思った、だからレキについて旅をしてたけど・・・俺レキのことってほとんど知らないんだよなぁ・・・すごい力を持ったドール、そして元は人間だったレキ・・そしてレキの力を欲する人間達・・。
「あ〝〜！弱気になったらダメなんだ！まずココを抜けださないと！・・それからだよな・・レキに・・」

レキはメグに教えてもらった、ロウス＝政府機関の町に向かっていた。
『お前は化け物・・・誰にも干渉せず誰もお前には干渉しない・・お前はお前と思う事は許されない・・すべて我らの手中の中・・・』
頭の中に繰り返し浮かぶ言葉・・そしてそれはレキを縛る言葉。最近その頻度が増えてきた。
「決められた・・運命か・・・・」
奇妙な笑みを浮かべながら、ロウスに向かう馬を急がせた。

「ライメイ、何を考えている？」
仲間達に指示を仰いでいたライメイは、メグの言葉に振り向く。何が？と聞いたライメイには怪しい瞳の光を携えている。

「他の人に干渉しないハズじゃなかったの？」
「今でもそうさ！俺はレキを倒すが、他の者に倒されてもおもしろくないだろ？ただそれだけさ、それじゃなメグ」
部屋を出ようとしたライメイを見て、メグは複雑な気持ちになる。大きなため息をひとつついてキッパリと言う。
「・・・私も行くわ、ロウスに」
「・・・それじゃ皆さんで出発と行きますか」

「クッソー・・引っ張っても叩いてもこにの扉びくともしねぇ・・・」
「・・おい出ろ」
声がする方の扉を見ると、兵士が数人立っていた。言われるままに兵士の後を着いていくと、すれ違いに政府の上官らしい者達と会うが、何故か頭を下げるのは上官達の方だった。兵士達に連れられてしばらく歩いていくと、大な歓声の声が響き渡っている。何だと思いながら、その歓声のする方へ行くと、暗い牢屋にずっといたせいで目が光りに弱っている、しばらくして目が光りになれてきてそこで見たものは・・。
視界に飛び込んできたのは、闘技場？の様な場所。中央には平らな広間があり、数人の人物が武器を振り回し戦っている・・その周りには大勢の人々が歓声の声を上げていた。
「ようこそ、シン・スゥー君だったね？」
声の主は太りきった体を重そうに揺らし、全身を黒いスーツを身につけ、髪はテカテカに固められている。指や胸には大きな宝石の塊があったが、正直って完全に似合っていない・・。
「君はこれからあそこで最強を競って戦ってもらうよ」
近くにいた側近の男らしい人物がシンの腕にナンバーの入った鎖を結び付ける。
「これは君の会員証、これにはコンピューターで自動的に記憶されていく、色は赤・青・黄色になりその色は体調や成績などが記憶さ

れますので・・・」
もうひとつ渡された名刺の様なカードは銀色で、名前と写真が載せられている・・その他は何のへんてつもないものなのだが・・。
「まずは君達選手の控え室だ」
案内された所は、控え室って言うよりは、結構きれいで長い廊下の両端には扉が永遠と続いている。数人の人物は廊下に座り込んだり、何かブツブツ呟いたりしている。
「ここだ、今日の午後１０時から君の初戦が始まる、それまでに体調を整えておくのだな」
「ちょっ！今日！？」
シンの質問には答えず、行ってしまった・・。
「やぁ兄ちゃん新入りかい？」
数人の男達がシンの後ろに立っていた、その男達はニヤニヤとあやしい笑みを浮かべながら近づいてくる。
「かわいそうに、こんなにまだ若いのになぁ～」
「本当に、でもここに連れてこられるって事は兄ちゃん何をしたんだ？」
「まぁすぐにここを出られるさ」
「そうそう、死体となってだけどな」
「人にそんな事を教えるくらいなら、おじさん達こそ頑張ったら？次がないんでしょ？」
幼い声にシン達が振り向くと、１０歳位の金髪で片目を長い前髪が隠している少年。
「ッチ！」
男達は少し怯えた感じでそそくさと去っていった。
「お兄ちゃん今日来たの？」
「あぁ・・俺はシン、君は？」
少年は人懐っこい笑顔で答える。
「僕はロンだよ！よろしくねシン！！」
そう言うと、またねと手を振って行ってしまった。

シンは決められた自分の部屋と言っても、部屋の中にあるのはベットと洗面台があるだけ・・。
「おい時間だ出ろ」
電気もほとんどついていない廊下を歩いていくと、先の方から光が見えそっちの方から人の声が聞こえる。光の道を進んでいくと大勢の人達のが、真ん中にある舞台を中心に歓声をあげている。その中央では人間や機械人形達が戦っている。
「あっ！お兄ちゃん」
向こうの方から自分の姿を見つけたロンは嬉しいそうに手を振り、走り寄って来る。
「お兄ちゃんもココでお仕事するんだ？」
「仕事？」
その時大きな歓声があがり中心をみると・・。さっきまで中央で戦っていた、人間の方が機械人形の刃に貫かれている。
「おーっと勝者が決まったようです！！」
司会者の声に合わせて歓声が響く。それをじっと見ていたシンに向かってココへ案内した兵士はおもしろそうに言う。
「さぁお前の番だ、せいぜいバラバラにされないようにな」
「お兄ちゃん頑張ってね！」
何を頑張るのか、ロンが言っていた仕事って・・・わからないまま中央へ行くように命令され・・・。
「今度は新人の人間だ！！さてどの様な試合を見せてくれるのか！！」
耳が痛くなるような巨大な声でアナウンスする司会者にウンザリだが、自分と同じく舞台の上に来たのは、シンよりも倍以上ある体格の機械人形だった。
「ルールはいつもと同じ！どちらかが死亡あるいは戦闘不能になるまで戦ってもらいます！！では始め！！」
観客達はスタートと同時に歓声を上げ始める。
死亡や戦闘不能って要するに、どっちかが死ぬまでってことじゃな

いか！？
「・・・・・ゲテ・・」
「・・・？？」
「タ・・・・助・・ケ・・テ・・」
確かに機械人形が言った・・言ったと言っても機械同士だけに理解できる電波の様なもので伝えたのだが・・。大きな腕を振り回し向かってくる機械人形を避けながら、シンは思う。
「お前・・・・意思が残ってるのか！？・・・・」
こういう闘技場は戦争が終結するとともに世界各地にできてたということは聞いた事があったが、大抵の場合は廃棄処分決定となった機械人形を買い占めた金持ち達の道楽でやられることが多かったようで・・・・。
「・・・・助・・・テ・・・・」
こんな場合、意思などのプログラムは消去されているハズ・・なのにこいつは意思が残ってる・・・ここは不法な闘技場ってわけか・・・。
いつまでも勝負がつかない試合に観客達はヤジを飛ばし始める。
「・・・苦しいのか？・・・・」
その言葉に一瞬機械人形が涙を流した様に思えた。それはただの思いこみなのか、オイルが流れただけだったのかもしれないが・・・。頷く機械人形の急所を破壊する。早業だったため他の者達には見えなかったが、機械人形は動かなくなった。
「・・・・」

「勝者新人！なんと言うことでしょうこの私でも、あまりの早業で見えなかった！！」
「お兄ちゃんすごーい！！」
試合が決まり舞台を降りると、さっきの兵士がまた来て部屋に連れて行く。
「ふん・・今回は運が良かったな！次は無理だろうがな！！」

「・・だったら、あんたが俺と戦う？」
兵士は青い顔をして、部屋から出て行った。その後、部屋の扉をノックする音がして扉を開けてみると。
「ロン？どうしたんだ？」
「お兄ちゃん、今日の試合すっごかったよ～！！」
「はは・・・あっ・・ロンどっかに土あるとこないか？」
「土？あるよ！」
ロンの後を着いて行くと、なんとか一人通れるような通路がありその先は外に出る事ができた。
「へぇ・・・こんなとこに通路なんてあったんだなぁ・・」
シンがポケットからだしたモノを土の中に埋めていると、不思議そうにロンが覗きこむ。
「何してるの？」
「これはさっき戦った奴の核だよ・・・こうして弔ってやらないと」
「機械なのに？どうして？」
ロンはわからないっといった感じで、目をぱちくりさせていた。
「・・っにしても・・ここじゃあんまり寝心地良くないかもしれねぇけど・・勘弁してくれな」
「ロン！早くこっち！」
違う子供の声がして、振り向こうとすると兵士達の声が聞こえるとロンがシンの服の裾を引っ張った。
「ん？何か今物音がしなかったか？」
「気のせいじゃないか？」
「そーだな・・今度はこっちへ行くぞ」
兵士達は気づかずに行ってしまった。
「ロン・・あんな所で何してたんだよ～危ないよ？」
今度は振り向くと、そこにロン位の年頃の子供達がいた。
「うん、ちょっとね・・それより新しい仲間を紹介するよ」
そう言うと一斉にシンの方へ視線を向けた。
「おっおう・・よろしくな」

それから、ロン達が秘密基地に行くというので一緒に行くことになった。通されたのは、オンボロの地下室でその壁には破れているが、アズの絵がが掲げられていた。
【アズ：この世界での女神の名前。ボロボロの無垢の布の服を着て、手に持っている天秤には人の心臓と零れ落ちる砂、裸足の下に茨が生えている絵】
部屋を見わたしていると部屋の電気が消され、数本の蝋燭の火だけになる。
「ロン？何するんだ？」
「仲間の弔いだよ」
そう言ってロンは隅から出して、台の上に置いたのは・・まだ幼い機械少女の首だった。
「この間、仕事で壊れちゃったんだ・・だから・・」
次の瞬間、機械の少女を分解し始め使えるモノを探し取り合いまでしていた。
「な！？何してんだ！！」
「お兄ちゃんも欲しいの？」
「そーじゃねぇよ！！こいつお前の仲間だろ？例え壊れて再起不能であっても・・そんなこと・・」
ロン達は、本当にわかっていないようだった。
仲間って事はこいつらも機械人形なんだろうけど・・理解できないのか、それともそういう風に制御されているのか・・・。
「だって、人間みたいに土に返らなでしょ？それに火で燃えるわけでもない・・どうするの？」
「どうって・・とにかく、もうやめろ！いいな！」
ロン達は不服そうな顔をしていたが、なんとかやめてくれた。それからしばらく皆部屋にいたが、ボソボソと喋るかじっとしているかのどちらで・・とくに何もしなかった。一人が扉から出て行くと、ぞろぞろと他の子供達も部屋から出て行く。
「それじゃ僕達も帰ろう！お兄ちゃん」

「あ・・・あぁ・・・・・」

>>>Next

第十四章　オアシス《中編》

ロウスに向かう途中、レキの頭が痛み始めた。痛みには慣れているはずだが、痛みにはどんどんと増加していき・・レキは頭を抱えその場に膝をついてしまう。
覚えのある頭痛にあの映像と声が響く・・・。
『お前は決して何かを得ることはない・・・苦しむがいい・・そして悔やむがいい、お前が犯した罪を・・』
何度繰り返してもその意味を思いだそうとしても靄がかかったように思考を塞ぐ・・・。
レキは激しくなる頭痛にとうとう気を失い倒れた・・・。

「あ〝〜退屈だなぁ・・」
連れてこられて一週間になるが、客の中には政府の制服を着た奴らもいたので政府との関わりがある所に下手に手をだせないし・・・。
分ったことと言えばそのことと兵の数や建物の構造くらいで・・・。
「お兄ちゃん！遊ぼー」
そんな考えをよそにロンや子供達には懐かれ、毎日遊ぶ相手をしていた。他にやることも無いからだけど・・・。
「よーし、今日は何する？」
「お兄ちゃんが鬼だよ」
「よーし、捕まえるぞー・・・うわ！？」
しばらく子供達を探して一つの部屋に入り壁にもたれると・・壁が忍者屋敷のように回転してシンはこける。
「イテテ・・・」
水音みたいな不思議な音に俯いていた顔を上げると・・怪しげな光と水が混合された様なモノが多数飾られている。近寄ってみて驚いた・・円柱のガラスの容器に入れられた・・人の心臓・・臓器がホルマリン漬けになっている。

「何だこれ・・医療関係じゃなさそうだけど・・」
奥にもう一つ大きなモノがあったので、近寄ってみると・・・。
「！？コレ！！」
人間の女の半身は機械の管やチューブで繋がっている。
「気に入ってくれたかな？」
白衣を着て眼鏡をかけ、長い髪を後ろで一つに結び神経質そうな顔をした女が現れた。
「シン・スゥー君だったかしら？どう？ここはね・・・新たな機械人形を作る研究室なの・・もちろんあなたの戦闘データも取らしてもらったわ」
女は辺りの試験管を眺めながら楽しそうに喋る。
「子供達も頑張ってくれてるけど、やはりあなたは違うわね・・どう私の研究を手伝ってくれない？」
「・・・研究？」
「そう、神を作るのよ・・世界最強のね・・」
「・・は？神？？」
「世界を作るのよ・・これからの未来は力のあるものが治めるの・・今のくだらない世界などおもしろくないでしょ？」
「・・・そうやってまた戦争でもしようっていうのか？」
「新しい未来のためなら・・・神もそうお望みのはずよ・・ククク」
女を掴みかかろうとすると・・・いつの間に現れたのか虚ろな瞳の子供達が女の前に立ちふさがる。
「何で・・お前達・・」
「いい子ね、お母さんを守ってくれるなんて・・でも大丈夫よ」
女には最初から、シンは子供には手を出せないということがわかっていたようで余裕に笑みを浮かべて姿を消した。女が消えると、子供達は正気を戻したように何があったの？と口々に喋るがこの部屋のことに驚く者はいなくて・・・。
「なぁ・・・この子は？」
ガラス容器に入れられた半身の女を指さすと子供たちはわらわらと

近寄っていく。
「キョウだよ」
「前は一緒に遊んでくれたんだけど・・でもお母さんが病気治してくれると、また遊んでくれるんだって」
病気を治すとはこの機械との結合の事なんだろうけど・・・子供たちがお母さんと呼ぶさっきの女の気になるが、まだ幼さの残る体に無数の傷跡と機械の配線・・首までの青い髪に色白の少女・・キョウの存在が気になりながらも俺たちは部屋を出た。

「あっ気が付きましたか？」
レキが目を覚ますと、傍らには少年と老婆が自分を覗き込んでいた。
「体の具合はどうだい？砂漠で倒れていたのをこの子が見つけて来たんだよ」
小さなオアシスのある村で、外には休憩を取っている商人達が見える。
「俺はトタって言うんだ、それでここは商人達の休息地でもあるバールニサの村だよ」
レキは少し頭が重くは感じていたが、それも少しの事でたいした事ではなさそうだった。
「兄ちゃん何処から来たんだ？」
「うん？・・・さあ何処から来たんだろうな・・」
「・・兄ちゃんも俺達と同じなのかもなぁ」
「同じ？」
「うん・・戦争の時に住んでいた村が戦場になってさ、もうあそこで住むことできないから・・俺達は転々とオアシスを回って暮らしてるんだ」
村と言っても確かに、テントや簡易性の家で暮らしている人達ばかり・・戦争が終わっても生きる場所が見つからない人は大勢いる・・。ガーディアルなど政府が管理する住処に入れるのも一部の上流階級のみだ。

「すまないね・・トタは、戦争で両親と兄を亡くしてね・・」
シンの事が気になるので村を出ようと思ったがトタに構っていると
いつの間にか夜も更けていた。老婆ははしゃいで眠ってしまったト
タの頭をなでながらレキを見て微笑む。
「恨むと言う事はないのですか？」
「なあに今はこの子がいる、それだけで私は十分だよ、ただトタに
は安心できる住まいを見つけてあげたいんだけど・・なかなか難し
いね・・・」
「兄ちゃん行っちゃうの？」
「あぁ、世話になった」
支度を整えたレキを見て、寂しそうに言うトタの頭を撫でた時爆発
音が響き、急な攻撃で襲い掛かってきたのは武装した盗賊達だった。
貧しい人のグループが旅人や政府の支援が無い村を襲う情報はあっ
ちこっちで言われている。
穏やかなオアシスの中がパニックにおちいって、逃げ惑う人々と悲
鳴。
「ばぁちゃん！！」
爆風で砂埃が舞い、小さな体のトタが見えなくなる。
「トタ！どこだ！？」
やっと見つけたトタは血を流し地に倒れて・・トタを座り込んで抱
きしめている老婆の姿があった。レキに気づき老婆は口を開く。
「・・・私を庇ったんだよ・・こんな老いぼれ庇う必要なんか無い
のにねぇ」
レキはだらりとしているトタの腕に触ると、脈は無く胸に銃弾を受
けていた。
「・・・この子を渡したりしない！」
レキが握っていたトタの腕を奪い取る。しばらくブツブツ言ってい
た老婆が、ばっと顔を上げると昨夜話した時と同じ優しい表情で・・
。
「あんたは早くお逃げ・・私はこの子と逝くよ・・・」

正気に戻ったのかは分からないが、老婆がレキに言う。
「恨む・・か・・」
そう呟くと、どこから持ってきたのか老婆は爆弾を数個ポケットから出した。
「さぁ行きなさい・・・あなたの未来にこの子の分までの幸があらんことを・・」
「なんだ？こんな所にもいたのか・・はは、さぁ死ね！！」
盗賊に見つかり、老婆はトタを抱きしめ爆弾に火を付けた。大きな爆発音が響き、あたりの砂を巻き上げた・・視界が良くなると盗賊達は、辺りを物色していた。
「クッソ！！あの老いぼれ・・自爆しやがった！」
「ん？なんだお前？」
「コイツ俺達にびびって逃げられなかったんじゃないか？」
盗賊達がレキの周りに集まって笑い始める。
「何とか言えばどうだ？」
肩に置かれた手をレキが見ると、盗賊の一人は悲鳴をあげ燃え出した。
「・・・・・」
盗賊達が仲間をやられ次々にレキに襲い掛かってきたが、同じように悲鳴を上げ燃えその場に倒れる仲間たちを見て残った残党たちは急いで逃げていく。

『お前は永久の苦しみを・・・罰を・・』

また頭の中で響く声・・・。
レキは無言のまま、赤く染まった頬と自らの手を見つめた・・。
「俺は・・・・」
しばらくしてレキがオアシスから離れると、無数の盗賊の屍が散乱していた。

>>>Next

第十四章　アズの子供たち《後編》

「ここがロウス？」
「あぁ」
「・・・あぁって・・・何もないじゃない！」
確かにメグが言う様に辺りにはでこぼこの岩やちょっとした丘はあるが、それらしい建物などは見当たらない。ライメイは胸倉を掴まれグラグラとメグに振り回されながら答える。
「ち・・・地下だよ！！・・使えない新政府だと言っても、見えるとこでばっちり悪さなどは許してくれないでしょ？」
「入り口は！？」
ニヤッと笑うライメイが指を鳴らすと、メグはライメイの部下達に捕まった。
「やっぱり敵の懐に入るなら、正面からが一番疑われにくいだろ？」
「・・・それはよくある作戦だな・・っで・・・なんでこんな格好！？」
メグに着せられた服は、フリフリのレースとリボンのドレスに羽が飾られた帽子。
「さっきのカッコじゃ入れてくれないだろ？」
そう言うライメイも、似合わないスーツに髪を上げている。
「リラとジュン！後任すわ・・それじゃ行くぞ」
「なんだお前達は！！」
人目につきにくい大きな岩が転がる場所の奥に兵士たちの姿が見える。ライメイは政府の兵士達にも動じず、ポケットからＩＤカードを出すと兵士達は慌ててゲートを開く。ゲートをくぐり道なりに歩いて行くと、確かに地下に建物があり何層にも分かれる階があった。ＶＩＰ用のエレベーターが自動的に止まり扉が開くと、眩しい光と大きな歓声が聞こえる。その中央には闘技場があり、回りには多くの人と壊れた機械人形が無残に散らばっていた。

「ライメイ・・噂には聞いたけど実際来るのは初めてだよ・・しかしまさか政府の人間が関係してるとわね・・」
「へぇ・・結構な人物が揃ったもんだ」
ＶＩＰ席にいる人物の多くは昔なじみのある顔ばかり・・。あの戦争で得をした者たちって言うわけなんだろうけど・・・。
「戦争の無意味さを痛感させられるわね・・」
「メグまっそんなに恐い顔すんな・・・それよりレキの姿が無くないか？」
「・・確かに・・私達より早く出たし、レキの事ならもうとっくに着いててもいいハズなのに・・」
ライメイとメグは少しの嫌な予感にかられたが、今は一先ずココの目的と、レキの探し人を見つけるのが先決。

あのキョウと呼ばれた女を時々部屋を抜け出しては様子を見に来ていた。どうしても気になる・・・それにここの秘密を知ってる俺に何も言ってこないあの女の方も気になる・・。
「え？・・・・あれ？・・・今、何かに呼ばれたような気がしたけど・・・もしかして君か？？」
キョウへ言葉を投げかけるがもちろん反応は無い。時間も遅くなってきたので部屋を出ようとしたとき激しい警告音が後ろで響き始める。
振り向くとこの間みた半身機械の少女の入ったガラスはメキメキと軋む音を鳴らし、少女の体に付けられた機械の部分が暴走しかけていた。
「おっおい！！」
意識の無いと思っていた少女の表情は、苦痛に表情を変える。
「・・・またなの？」
あの女が特に慌てる様子でもなく、研究員達を連れて入って来る。
「それが・・またの拒否反応を起こしたみたいでして・・」
「やはり強度した体と言えども、これは並大抵に扱えないって事か

しら・・・」
警告音は変わらず鳴り響くが、何かをするわけでも無くキョウを見て喋ってるだけ・・。
「・・・そいつ苦しがってるだろ！？何故何もしない！！」
シンは思わず研究員達の前に姿を見せると、兵士は銃を向けるが女が軽く制止して冷静に喋る。
「じゃあ、あなたがどうにかしては？」
「・・・お前！！」
シンが助けようと近寄ろうとするより先にガラスが割れ、体を包んでいた液体が流れ出る。機械の半身を引きずりながらゆっくりとケースから出てくる姿に研究員達は悲鳴を上げて後ろに下がろうとするが・・・。伸びてきたコードにつかまり数人の人間が体中に巻きつき息絶える。
開かれた少女の瞳は真っ赤で・・・髪は白髪に変わり・・機械の体がキシキシと軋む音がする・・。

警報音で次々に兵士達が集まってくるがキョウの姿を見て襲いかかるもの逃げまどうもの立ち止まるものさまざまで・・。キョウは女に向かってコードを伸ばすが何故か女に傷を付けることができない。
「無駄よ、私はあなたのマザーなのだから」
その言葉を聞いてキョウは体を引きずり部屋から出ていく。
「おい！待て！！」
シンがキョウにやっとの事で追いつくといつの間にか外に出ていた。そうか・・建物自体が地下に潜ってあんな闘技場をしていたってことか・・。
後ろの扉が開く音がしてそこにはロンの姿があった。よく見てみるとロンの服にはべったりと血が付き、ロンに続いて入ってきた子供達数人も血で汚れている。ロン達は無機質な瞳で少女と同じ方を見つめているので同じ方を見ると・・・。

「・・・レキ！？」

そこにいるのは紛れも無くレキだった・・けれどいつもの雰囲気が違う。
俺がレキにどうしてここにいるのか聞こうとした瞬間、ロンの後ろにいた子供達が一斉にレキの方へ向かって攻撃を始める。けれどレキも躊躇無く、子供達を倒していく。
「！？・・・レキ？・・・なんで・・・」
残ったのは、キョウとロン、レキとシンの４人・・・。ロンが獣の様な声をあげ、レキに向かっていく・・・。
「レキ！ロン！２人もやめろ！！」
叫びも虚しく・・・ロンはドサリと音をして倒れてしまう。
シンはロンに駆け寄り少し呼吸はあるものの・・急所を貫かれこれではどうしようもない・・そして見上げたレキの表情は・・寒気がするような機械人形の顔・・・。

「ライメイ、辺り騒がしくなってきたぞ・・何かあったのか？」
ライメイとメグは書類などを調べていると、辺りでは警告音が鳴り部屋の前は兵士達の足音が聞こえる。
「そうみたいだな・・・あっと・・これこれ」
ライメイが数枚の封筒から取り出したのは旧政府の軍事情報。今は新政府に変わり、新政府は戦争を嫌いと言うこともあり、今では旧軍事施設はほとんどが機能停止しているとは言え、今でも金持ち達はここの様にして娯楽に使っている。
「まぁそう言うな・・」
「何も言ってない・・・」
「顔に書いてある・・まぁ世の中蛇の道は蛇だ」
メグは苦笑を浮かべライメイに言うと、ライメイも溜息を付きなら も同じく苦笑する。
「さて、そろそろ行きますか」

ライメイとメグが向かったのは一番地下にある部屋、そこでは一番豪華な部屋で金持ちや政府の者達がパーティーをしている場所。
「誰だ！！？」
「酷いですね・・私達の顔、お忘れになりました？」
多くの者がライメイ達を見て傲慢だった態度だった者たちも表情を変える。
「どうしてお前達が！！」
「処分でもされたとお思いですか？」
ライメイやメグの体から光が放たれる。巨大な爆発音と共に、地下に隠れていた建物の本体が現れる・・。それはシンの耳にも聞こえていた・・。
「何だ！？」
レキとキョウはその爆発音が死合の合図のように戦い始めた。さすがにレキの力は圧倒的で、半身が機械なだけのキョウに勝ち目は無い。
「・・・どうして・・・・何で・・もう・・やめてくれ！！」
シンの体から以前現れた白い光が現れ、レキたちの動きを止める。その光の後、キョウの半身はどんどんと溶けたように崩れ落ち・・瞳が本来の色に変わり、キョウは本来の姿に戻る。

『・・・ロン・・・みんな・・・・』

正気に戻ったのもつかの間、キョウは優しく悲しい表情でロンに向かって手を伸ばしたまま動かなくなってしまった。

「・・・シ・・ン？・・・・」
レキもまたいつもの表情に戻りその場に崩れる様に倒れた。シンが駆け寄り触れた瞬間、何かが聞こえた・・・これはさっき自分を呼んだ声・・？
どうしてロン達が戦い・・どうしてこんなことに・・・ぐるぐると

分らないことばかりで動けずにいると聞き覚えのある声がする。
「おーい！シン、レキ！」
シンがどうしようか迷っていると、そこへライメイが仲間達と来た。
「どうしたんだ！？」
「わからない・・レキ何か急に・・・」
「・・・取り合えずここを離れて、休める場所を探すぞ」
ライメイの一言で車は走り出した、レキは相変わらず眠ったまま・・・。車の後ろには、もくもくと立ち上る煙に大きな音をさせながら、ヘリが数台集まってきていた・・それらはすべて・・政府のものだった。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十五章　嵐の前

ライメイはテキパキと仲間に指示を与え、ライメイと一緒にきたメグと言う人がレキの様子を見ていた・・・・。
しばらく車で走り、着いた先は以前は町だった場所のようで畑の跡、あっちこっちに建物の残骸がある。
「シン、こっちだ」
崩れた部屋の壁を退けると地下に続く扉・・しばらく細い階段を行くといくつか部屋があった。
一つの部屋にレキを寝かせ、メグはしばらくレキの様子を見ていたが・・レキの呼吸が安定すると後ろで黙っていた自分に声をかける。
「シンだっけ？そんなに深刻な顔しなくても、大丈夫よ・・前の傷は開いてるけど、レキの事だし支障は無いわ・・・じゃ、何かあったら呼んでね」
メグが部屋から出て行と、シンはレキの腕を見る。前に傷を負った腕は、まだふさぎきってない・・そっとレキに触れてみる・・。
「何で無茶ばっかするんだよ・・・・」
安定したとは言え、触れた腕はまだ熱っぽく短く呼吸を刻むレキに文句を言いたくなる・・・。
でももう一つ、前に聞こえた声が気になっていた。
「聞こえない・・・・やっぱり空耳だったのかな・・」
「何が、空耳だって？」
「レキ！大丈夫なのか！？」
いつの間にか起きていたようでゆっくりと瞳を開け、傍にいるシンを見つめる。
「・・・・ココは？」
「ロウスの近くの町・・レキ、何か覚えてる？」
「・・・いや・・」
「そっか・・・でもレキ起きてくれて良かったよ、ほんと驚いたん

だからな・・」
レキは謝罪の言葉は発しなかったが、クシャっとシンの髪をなでる。
色々聞きたいことはたくさんあったが、具合の悪いレキにあれこれ聞くのはっとためらっているといつもの調子でライメイが顔を出す。
「お取り込み中悪いが、レキちょっと来てくれ」
しかたなくレキについてライメイの方へ移動するとメグや他の人たちも集まっていた。
「これだ・・シンがいた所の書類と、今の新政府の勢力図だ」
新政府の役人の半数以上は前の政府上がり・・特に、複数のガーディアルはその指揮下に置かれている状態。
「これじゃあ、悪事もやりほうだいってわけだな」
おもしろおかしく言うライメイに、メグは少し溜息を付いてからレキを見る。
「案外落ちぶれるのは早いわね・・・・」
新しいものもいつかは、古いものとなる・・そして人々は再び古いものを排除し新しいものを欲する・・それの繰り返しだ。
「レキ、俺達はこれに記されている所を行ってみようと思う」
ライメイが言うのは、シンが捕まっていた場所で見つけた書類・・旧軍の施設。
「まだあんな場所がありそうだしな・・」
「レキはどうするの？」
メグがレキの方を見ると、他の者達もレキの方を見た。レキはしばらく黙ったまま、書類を眺めていた・・そして口を開こうとした時。

『・・・キ・・レキ・・』
『聞こえる・・け無い・・』
『・・せぇ・・これで・・大丈・・夫なハズ・・』
「・・ギル？」
レキはポケットからベルトが壊れた時計を取り出す。これは前に機械いじりが好きなクラスメイトから、俺達４人はこれを貰っていた・

・。一見普通の時計に見えるが、色々便利な機能がついている・・
今使っているこの電話の様な機能もそれの一つだったはずだ。
『レキ！？ほ・・ら！やっぱ・・り通じた！』
「どうした？」
『動きだした！・・ガーディ・・アル、政府達も動き始めたみたい・・』
どうやらギルが言おうとしているのは、ガーディアルを含めた政府が何かしらの動きを見せたみたいだ・・。
「ギル、今どこにいるんだ？」
『・・俺達は・・ガーディアルを離・・れてる！今は・・シリウスに向か・・てる・・』

それを聞いたレキははじかれたように顔をあげて、シリウスに向かうと一言言って慌ただしく用意を始める。
「そんじゃ、一応決定か～皆用意してくれ！！」
「シン、行くぞ」
シンはレキに何も聞かず、用意された車にレキと2人乗り込む。
「・・何も聞かないのか？」
「・・・レキはずるい・・レキは何も語らない・・けど、俺や他の人達には聞く・・それって何かずるい気がする」
シンの言葉にレキはしばらく黙ってこっちを見る。俺はその視線に負けそうになりながらもレキの方を見る。沈黙がお互い続いているとレキが口を開く。
「・・本当は俺自身もわからないだ、俺はどうしたいのか・・どうするべきなのか」
「言っとくけど！俺は自分で決めてここにいるんだ、だからレキはもっと俺に頼ってもいいんだぞ！！」
っといつも足手まといになっているのに偉そうに言ったあとチーンと固まっていると、珍しくレキが笑った。いつもの少し悲しげな影がある笑顔ではなくて・・・俺はそれだけで嬉しい気持ちになった。

「あ゛！レキ今笑っただろ！！」
「そうか？」
何事も無かったかの様に、レキの表情はいつもの顔に戻っている。
「絶対笑った！レキいつも無表情だからさ、レキって表情あるのか気になってたんだ～うん！時には笑った方がいいよ！」
「・・・じゃ、行くか」
「うん、どこへでも行っってやる！！」
レキの事は気になる。けれど今はただレキが少しでも自分の背負っているものを一緒に支えられたらって思う。とりあえずやれるだけやってみようと一人こぶしを握りしめ誓ったシンだった。

「お久しぶりですね・・・ガーディアル理事長様・・・」
映像に写る男は、偉そうに椅子に腰掛け、腕組をしている人物。
「いえ、今はこうお呼びした方がいいですかな？・・・政府特別指揮官長様」
【政府特別：新政府が裏向きに作られた部署。旧政府の者達が多く集まっており、武器なども多く所持し新政府と口論が耐えない。】
「お前こそ何を考えているんだ？・・・シト」
シトと呼ばれた男は怪しい笑みを浮かべている。
「それはもちろんレキ・D・キサラの捕獲でしょう？」
「まぁいい・・すぐにお前の面の皮など剥がせる・・今回の動きについて話に来た」
「では、やっと清浄なる世界を作るプログラムが？」
「そうだ・・詳しいことは後知らせる」
そう言うと、映像は切れた。
「ククク・・・これであの方の思う通りだな・・」

この時、俺は何も知らなかった・・・。
そしてレキ自身も気づいていない・・本当の意味を・・・。
それは・・俺達をどこへ導いていくのか・・。

「シン見えたぞ、シリウスだ」

でも、俺達の思いより先に・・未来のプログラムは決まっていたのかもしれない・・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十六章　過去の話

レキとシンは、シリウスに着くと以前会ったギルとミツキと再会した・・。
ギル達は何故カスガの屋敷にいるかと言うと、ガーディアルでの不穏な動きは一般の市民達にも感じられるようになり、ガーディアルから離れる者達も出てきているそうで・・・。
「っで、お前たちのことを聞きつけてここでうろうろしてたのを私が見つけてね」
カスガは口調や態度こそ違わないが、レキの無事な姿にほっとしている様に見えた。だが今の状況上、ゆっくり感動のご対面をするわけにもいかず会話もほどほどに本題に入る。
「ガーディアルも今では武装して、戦いの準備をしている・・それに政府から来た伝令も追い返す状態・・」
「皆は何がどうなってるのかわからず、不安なんだよ・・・」
「それじゃガーディアルにいる人達が今じゃ全員人質って事？」
「・・そう言う事になるだろうね・・」
重い空気が流れたまま夜が来て、ひとまず状況を把握する事だけをして休む事にした。布団に入っていたシンは、窓辺の椅子に座って空を見上げているレキを見つけたが、何も言えずに固まっていると。
「俺はガーディアルを・・新政府と戦うことになるかもしれない・・」
「・・・」
「それは前から・・本当は決まっていたのかもな・・」
「レキ・・俺は・・」
「・・・・シン、もう寝ろ・・明日からは忙しくなる」
レキはそれ以上シンの方を見ず、窓の外の夜世界を照らす月が雲間に陰り始める空を見つめていた。シンは何も言えず、布団にもぐり直しレキを見つめいつの間にか眠りについていた・・。

「・・・はい、準備は着々と進んでおります」
暗い部屋に一つの画面には、映し出される腕を口の辺りで組んでいる人物が映る。画面の人物は一つの笑みを浮かべ映像は途切れた。

「あ～あ、つまんないよー」
小柄なふわふわの緑の髪の少年は、机の上に座り浮いた足をぶらぶら動かす。
「リンジェ、机の上に座るなんて行儀が悪い」
小柄な少年リンジェは口を膨らませながらも傍らにいた青髪の長身の男の言うことを聞いて机から降りる。
「まぁまぁすぐに楽しくなるさ、なぁコウキ」
金髪をワックスで固め頭にゴーグルを付けた男が、面白そうにナイフをくるくる回しながらそう青い髪の長身のコウキに言う。
「ほんとなの、シト？」
リンじぇたちとは少し離れた席に座っていたのは、以前ガーディアルでも見かけたシトと呼ばれる男。
「あぁ、そろそろお声がかかるころだろう」
「けどさ～準備してるけど・・あのレキと言う者達はどうするんだろうなぁ？」
「僕も早く、あいつらと戦いたーい！」
「我慢も後少しだ・・あの方が目覚めるその時までな・・」

「父さん！？」
大きな音がしてアキトが部屋に入ると、理事の机の上に置いてあった物がすべてひっくりかえされていた。その原因は理事自らがそうしたようだが・・。
「理事！どうしたのですか！！」
他の研究員達も音を聞き、アキトのすぐ後から走ってきた。
「どいつもこいつも・・私を馬鹿にしやがって！・・・フフフッ今

に覚えておけ！！」
研究員達が怪訝な表情をするなか、理事は高らかに笑みをもらした・・。

「シン、レキってどう？・・あのさ・・レキって他の人に本心とか打ち明けないだろ？・・君だったらレキの事何か知ってるかなっと思ってさ・・」
「・・・レキの事・・」
「何してんだよ！レキ待ってるぞ」
ギルがそう聞いてきても答えに困っていると、その時ちょうどミツキが俺たちを探しに来て、話は中断したけど・・・俺はレキの何を知ってる・・・・？
レキの事・・俺だって知らない・・レキは誰にも本心を言わないのかなぁ・・俺がレキのこと知りたいって言ったら迷惑なのかもしれない・・。
「・・シン？どうした？」
「え？ううん何でも・・・」
「そうか・・？・・それでまず・・・」
レキはカスガやギル達に説明と、これからどうすればいいかを話合っていた・・けどシンは何も頭に入らなかった・・。
「どうしたんだい？」
いつの間にか、昼になり皆は昼食の為に席からいなくなっていた。
「レキのことかい・・・どうして分かったって？顔に書いてるよ、それにさっきの話の時だってレキの事をじっと見てるしさ」
カスガはシンを見て笑う。それを見て無意識の行為とは言え見られていたのことに顔が熱くなる。
「カスガさんは、レキのこと・・・知ってますか？」
「レキの事か・・ほんとあの子は器用じゃないからね・・」
カスガは遠くを見るように目を細め、溜息を一つついた。
「私の口からはほんとは言うべきではないのかもしれないが・・レ

キは元人間だった事は言ったね？」
「・・はい」
カスガはシンに近くにあった椅子に座るように促す。
「私がレキと会ったのは、まだ戦乱の続く日々・・レキが８歳になる時だ・・・・あの子は戦乱で父親を無くし村々を転々と渡り歩いていた・・そしてココへ流れ着いた」

どこの村に行っても、厳しい状態なため・・余所者には冷たい時代。
『・・うるさい！！母さんの事を言うな！！』
『何だと！余所者の癖に！！』
子供同士が取っ組み合いの喧嘩をしている。
『こらこら、何やってるんだい！』
『うわぁ！カスガだ逃げろ！！』
子供達はカスガの姿を見ると、レキを残して蜘蛛の子様に走り去った。
『レキ！！・・・スミマセン！』
嫌がるレキを無理やり引きずって帰り軽い手当てをしていると慌てて入ってきたのは、レキの母親のマーサ。
マーサは余所者と嫌われながらもレキのためにあちっこっち頭を下げて生活をしていた。
『そんなに謝らなくてもいいさ、さっきのはまたあいつらが先にレキに手を出したんだろうしね』
『そーだよ！あいつらが悪いんだ！』
『レキ！・・まったくこの子ったら・・』
『べぇーだ！』
レキはカスガの屋敷を走って出て行く。
『ほんとここはいい所です・・』
『それは私がいるからだよ・・しかしいつどこが戦場になるかはわからないが・・』
『いつまでもここの様な時間が続けばいいのですが・・』

窓ガラスの向こうは曇り、今にも雨が降りそうな空模様だった。マーサは軽く挨拶をすると、カスガの屋敷から帰って行った・・。
『カスガ様・・』
『フェイ・・・・どうして人は戦うのだろうな・・私もその一人だろうが・・平和を祈る思いをいつか間違ってしまっていたのかもしれない・・』
それから数日後、カスガの不安・・いや誰もの不安の通り・・・戦乱の荒波が押し寄せてきた。
『カスガ様！』
フェイが外の音を聞き、カスガの部屋に入って来た時は・・カスガは部屋で目をつぶり座っていた。
『カスガ・・様・・』
『母さん！！』
戦火が町の近くまで来ている、慌てて気づいて母を呼びに行く。
『レキ！来てはダメ！！』
母の悲痛な声が響く、静止の声など聞こえず扉を開ける。
『レキ！早く！早く・・逃げて！！』
『！！母さん！！』
母を撃ったのは機械人形・・後ろでは人間達が命令を下している。
『・・レ・・逃げ・・』
力なく落とした腕を・・体温を失い冷たくなりつつある母の体・・。激しくなる銃撃・・迫ってくる機械人形達の姿・・。
どうして自分には母一人守れない、自分の命さえも・・どうして自分は無力なんだろうと・・・。
カスガがレキ達2人を見つけた時には、マーサはすでに冷たくなっておりレキは虫の息だった。けれどレキはカスガの足を握りしめ絞り出すようにそう叫ぶ。
『・・俺を・・機械に！・・誰にも・・負けない・・力を！！』
これでやつらと戦える。誰かを守れるそう思ったのに・・・意識を失う一瞬母の悲しげな表情を見たような気がした・・。

『気がついたかい？』
『・・・カス・・ガ？・・・・』
ぼやける視界の中・・カスガを見た気がする・・・あの時・・ほとんど感覚のない顔に・・冷たい水が一滴落ちて来たように思えた・・。
『絶対死なせたりしない・・』
再び薄れる意識の中・・母さんが銃撃に倒れた瞬間を、脳裏で何度もスローモーションの様に見ていた・・・。
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・母さ・・・ん・・・』

「あの時、レキを助けるためにはそれしかなかったとは言え・・私は・・」
生命維持装置のクダを体中に付けたレキが必死に涙を堪え懇願していた・・・・。
「・・レキを助けてくれたんでしょ？もっと胸張ってください！きっと大丈夫ですよ！俺がついてるんだから！」
涙が零れそうなのを我慢して、無理やり笑顔を作りカスガに言う。
お互いそれ以上何も言えなかった・・・。

俺は・・もっとレキの事が知りたい・・。
・・この時代レキは何を思い生きてきたのか・・・。
レキは・・・・・何を求めて・・いるのか・・・・・。

「シン、カスガ、話始めるぞ」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十七章　死に場所

旧軍事施設から爆発音が連続で鳴ると、もくもくと煙が立ち昇る。
「ライメイ！こんなに盛大に爆破していいの？」
「ん？あぁ、まっこれくらいやらないと目立たないだろ？」
そう言うとライメイ笑いながら仲間達の所へ行ってしまう。
旧軍事施設とは言っても、戦乱が終わって7年・・未だ政府の手は届いてないようで、武器や金品などが多く残っている。
「こんな状態じゃ、いつまで経っても整備の行き届いた治安なんて遠いわね・・・それに・・」
ライメイの後姿を見ながらメグは嫌な感じを受ける。何かが始まろうとしてる・・それとも終りが近づいているのか・・・得体のしれない不穏なものを・・。メグはそんなことを思いながら空を見上げ背伸びをする。
「ライメイ！次は何処行くの？」
さてどうなるかわかんないけど・・とにかく私はレキの味方なんだから！！

話し合いの結果、一先ずガーディアルの動きを見張ることと同時に政府の方も調べる情報集めに重点をおくことにした。
そう決めてから人の出入りが激しくなり毎日とっかえひっかえの情報で俺たちは目の回るような忙しさだった。その間に少し休憩をとっていたレキの耳にシンの声が聞こえるので言ってみると・・。
「レキ！早く早く！」
騒がしいと思っていた玄関の敷地には入りきれないほどの人・・正確には機械人形達が集まってきていた。
「レキ・D・キサラ様とお見受けいたしますが・・？」
その中の1人がレキの姿を見て話しかけた・・。
「・・・・そうだが・・」

レキが答えると同時に、皆の口から感激の悲鳴が上がる。それにシンはビックリしながらレキの傍に来ると、レキを見上げる。
「我々はあなた様と共に戦うためにやってきました！」
「私達は皆、自らの意志でこちらへ・・どうか共に戦うことを許してください」
口々に戦いに連れて行ってくれという機械人形達、頼もしいはずだがレキの表情は暗かった・・。
「・・・レキ？」
「おや・・すごい人数だね、とにかくこっちへおいでそのままそこにおられちゃあ目立つからさ」
カスガは機械人形達にテキパキと指示をする、1人がカスガの名を呼ぶと再び歓声の声が上がった。レキもカスガも機械人形の中では有名なんだろうなぁっとシンは思った。
機械人形達がとりあえずの自分たちの場所を決めて辺りが少し静かになるとシンはレキと共にカスガの屋敷に戻り、情報収集の作業を続けたが・・。
「・・やっぱりレキは嫌なのかなぁ・・一緒に戦うの・・」
「シン」
「なっ何！？」
ぽつりと言った自分の言葉がレキに聞こえたのかと驚いたが、それには触れずレキは壁にかけてあった上着を羽織る。
「あと任せる・・」
「ちょっ・・レキどこ行くんだ？」
「少し風に当たってくる・・・」
そう言うとレキは部屋から出て行ってしまう。町の方は、戦火が近くにまで及んでいることもあり町の人達の半数以上はこの町から一時避難して行ったため、ここんところは寂しかったが、今日はあっちこっちで機械人形達の声が聞こえて賑やかだ。
「おや？・・・レキはまたどっかに行ったのかい？」
「・・・なんかレキの様子おかしかった気がする・・」

カスガは大量の資料をさっきまでレキがいた机に置き、賑やかな窓の下を眺める。
「・・・あの子のことだ、自分でなんとかするさ」
「でも・・・だから、不安なんです・・・・レキは1人で抱え込み・・すぎるから」

そして事件が起こったのは次の日の夜明け前。
「どうしてです！！？」
大きな声が聞こえシンは目を覚ます。
「カスガさん！何があったんだ！？」
シンが近くに居たカスガに何があったか聞こうと近寄ると、かなり険悪な不陰気・・・。
「答えて下さい、レキ様！！」
「そうです！どうして私達が戦う事を許してくれないのですか！！」
レキはしばらく黙った後、ゆっくりと口を開く。
「・・・・・あんた達には生きようという姿が見えないんだよ」
シンは何を言ってるんだと思ったが、あからさまに機械人形達の表情が変わった。
「何を言ってるんです？我々は・・」
「・・・・死に場所を探している者に手を貸されても困ると言ってるんだ」
「なっ！！あなたは私達を侮辱するのですか！？」
「侮辱？ならば聞こう、何故ここにいる？」
「あなた様と共に戦うためです」
「では、何故戦う？」
「それは、もちろん機械と人間の共存のため・・・」
「・・・・・この戦いで生きて還ってこようと誓ってきた者は？」
機械人形達は皆口を閉ざしてしまう。重たい沈黙を肩腕の無い古い型の機械人形がぽつりと喋る。
「私達には・・・もう戦うすべしかないのです・・プログラムの性

で自ら命を絶つこともできない・・・」
「だから俺にお前達を殺せと？」
「・・・・・・・・・・・・・」
「何とか言ったらどうだ？」
「レキ・・もういいよ」
カスガはレキの方に手を置き、そう言うとレキはその場に背を向けて歩いていった。
「すまないね、あの子は不器用な生き方しかできない子なんだよ・・」
「やはりレキ様も・・・我々を救うことはできないのですね・・・」
機械人形達は口々にレキの悪口を言い出した・・・。
「何言ってんだよ！！何もわかってないのはあんた達の方だろ！！
レキは今まで苦しんで、今も苦しんでる・・人と機械の狭間で・・
あんた達こそ何もわかってないんだ・・・・」
「シン・・・」
「レキに戦争で奪ってきた命・・・それに苦しんできたレキに・・
どうして自分達を殺してくれなんていうんだよ！！・・・・そんな酷い事ってないだろ！！」
シンはそう言うとレキを追いかけた。
シンがいなくなるとシーンと静まり返った広場に、１人が話はじめた。
「私は間違っていました・・・いつもどこかでドールであるレキ様には私にはない力を持って、いつか清浄なる道へ導いて下さると・・・」
「俺もだ・・・レキ様はいつも我々のことを思ってくださっていた・・」
「そうだ・・レキ様こそいつも自分達のこと心配し・・あの戦乱の中を導いて・・・」
パンパンパンと大きな手を叩くカスガは注目を呼び掛ける。
「ほらもうくよくよ悩まずに、答えが決まったんなら早く準備にか

かりな！！」
「・・・・準備・・・・？」
「戦いに行くんだろ？・・・・もちろん生きるための戦いにさ」
カスガの一言に、吹っ切れたように皆準備を始めた。

「レキ・・・」
レキを探していたシンは見つからないため、部屋へ一旦戻るとレキがいた。
「シン、お前はココに残れ」
深い呼吸をしてレキはシンの顔を見ずに言った。
「・・・・・俺はお前を守ることができないかもしれない」
少しの双方の沈黙のあとシンはレキの頭を殴った。遠慮なしに、本気で。
「俺は別にお前に守ってもらおうなんて思ってない！！・・・そりゃ俺はガキだし、弱いけど・・・俺はレキと一緒に戦いたいんだよ！！気持ちだけじゃ俺がレキの方を守るって思ってるくらいだ！！！」
シンの声が響く。レキは頭を押さえたまま言葉を発しないので・・シンは少し声を小さくして言った。
「・・・俺が言いたいのはそれだけだから・・・レキの足手まといになることは判ってる、だからレキが残れって言うんだったら・・俺は・・」
シンは言葉を言い終わる前に途切れた、それはレキがシンを抱きしめていたからだ。
「ほんとお前には敵わないな」
呆れと苦笑交じりにレキはシンを抱きしめる。シンはムッとした感情を向けると、レキはシンから顔をあげる。
「なっ！？どうせ俺が言った所でダメだと思うけどな、シン、お前の道が俺の道にあるなら・・俺の道を開くのは案外お前かもしれないな」

「え？」
「行くぞ」
呆然とするシンに、レキは扉を開け手を出す。
「行くんだろ？」
「当たり前だ！！」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第十八章　動きだす影

「レキ様、これを見てください」
仲間が持ってきた衛星テレビには新政府の役人が最近の一連について話しているニュースが映っている。
『近日各地でテロと思われる反抗が行われ、多大な被害を・・・新政府ではこのことに・・』
「駄目だな・・・新政府には奴らを止める力は持っていない・・」
「それに政府の方に力を貸している者もいるだろうね・・」
レキとカスガの言葉に皆言葉が無くなる。
「別にそれでどうなったわけじゃないじゃん、俺達は自分たちができることをするだけじゃん！」
シンが大きな声で言うと、一瞬その場はシーンと静まったが・・皆口々に言い出す。
「そうだよな・・・俺達は勝つために戦う」
「新政府のやつらはまだ7年だ・・これからだ」
「ほら、レキ準備準備」

それから数日、数週間と経ち・・政府からの情報も日増しに厳しくなってきていた。
「ここもか・・・」
悪化する毎日の中、レキ達はガーディアルの元へ出発した。
「レキ・・アキトの事、俺少し聞いていたんだ」
ギルは少し言いにくそうに言葉を繋ぐ。
「アキトの母親は貧しい村出身だけど父親・・アキトの父親は・・」
「理事・・・」
「知っていたのか！？」
「知っていたわけじゃない・・ただ何となくそんな感じがした・・」
アキトが毎日勉学に励み、そしてそれでも尚・・・誰かに認めても

らおうとしていたのを感じた。その視線の先にいた人物も・・・。
「そっか・・・俺達はここに残って、カスガさんの手助けをするよ・・・気を付けてな」
ギルとミツキは涙が出そうになるのを堪えた顔で言い、そして一歩後ろにカスガが立っていた。
「カスガ、皆で帰ってくるからね！」
レキはカスガの顔は見たが、何も言わなかった・・その変わりかシンは元気に言って別れた。

出発後も情報は険しくなるばかり・・。
「西側はほとんど落とされた・・・政府の奴らは何してんだよ！！」
イライラとした口調があっちこっちから聞こえる。
「・・・レキ食事持って来たよ・・・あれ？」
簡単なテントの布を捲り中を覗くと、レキの姿は無くて・・・。
「シンさんどうしたんですか？」
シンがウロウロしているのを見て仲間達が声を掛ける。
「レキ見なかった？」
「いえ、見て無いですが・・どうしたんですか？」
「ううん、何でも無いよ」

『破壊兵器・・・・・例え心を持とうがお前の性ですべては・・・・』
レキの脳裏にはまたあの声が聞こえる・・聞き覚えが無いのに・・どこかで聞いた事があるような・・・。
昼間は灼熱の砂漠・・夜は極寒と思えるほどの砂漠・・・。レキは砂漠に寝そべり満点の星空を見つめた・・・。
「レキ！！やっと見つけた～」
声がしたがレキが何も反応しないのでシンが文句を言いながら足音が近付いてくる。
「レ～キ、寝てるの？」

満点の星空から一瞬にしてシンの顔で視界はいっぱいになる。
「シン」
「何だ起きてるんなら返事しろよ～探したんだよ」
「何で？」
「へ？」
「何で俺を探してた？」
「いや、ご飯って思って・・どうしたんだよ？」
「・・・・じゃぁどうしてここにいるって思った？」
珍しいレキの質問に、いつもと違う雰囲気にシンは戸惑いながら返事をする。
「え・・レキって結構こういう風景とか好きだろ？あんまり人ごみとかは・・・好きじゃないみたいだし」
「逃げたとは思わなかった？」
「はぁ？レキはそんな事しないだろ？」
「・・・」
「俺はレキのこと、知らないことが多いけど・・・少なくとも俺はレキはそんなことはしないって思ってる・・一般的に言ったら・・性格とか功績とか、人間性とか・・・そういう風に言うのかもしれないけど！」
最後の方はなんか恥ずかしくてぶっきらぼうな言い方になったけど、レキは何も言わずにシンの言葉を聞いている。
「でもさ・・・それも確かにあると思うけど俺は違うと思うんだ」
「違う？」
「うん・・・何て言ったらわかんないけど・・えっと・・強いと思う・・・・けど、最強とかそう言うんじゃなくて・・あぁ～」
「ははは」
急に笑い出したレキに驚いてシンは視線を向ける。
「ありがとなシン・・それじゃそろそろ帰るか？」
「う・・うん、レキ」
今度はシンがレキの手を握ったのでレキが驚いて視線を向ける。

「あのさ、もうちょっと星見ていかねぇ？ここすごい静かだし！」
「寒くないか？」
「う～ん、あっ！引っ付いてたら暖かい・・・って・・」
レキは驚いた顔でしばらくシンの顔を見ていたが、少しだけ顔を緩め砂漠の地にもう一度腰を下ろす。
「そうだな」
そう言えばレキが声を出して笑ったのってさっきのが始めてだよな・・。

あれからしばらくレキとくだらない話をして、テントの方へ帰って眠りに付く間際。
「明日は皆帰って来れる・・・レキも俺も・・一緒に」
そう祈りながらシンは眠りに付いた。次の日、ガーディアルに向かって再び車を走らす。

「シト？」
「はい、ギルさん達が調べていたのですがさっき情報が入りまして・・ガーディアルの方でシトらしき人物を見たと・・シトと言う人物は一体？」
「シトはガーディアルの理事達の気に入りだ・・・各地で理事に言われ何かをしていた様だが・・この様子だと」
「この様子だととは？」
「・・・いや何でもない、次の指揮を伝えに行ってくれ」
仲間は少し怪しげな顔をしたが、レキが言った通りに連絡を伝えに言った。
「レキ、何でもないわけないのに・・何で言わなかったんだ？」
「今は目の前にある問題はガーディアルだ・・不確かな情報に振り回される状況じゃないだろ」
「でも・・シトって奴が何か罠を仕組んでいたら・・理事とかと組んでたりしたら・・・」

「それは無いだろう・・シトは俺がガーディアルに居た頃からガーディアルの忠誠心など無い輩だ・・もし罠を仕組んでいたとしても」
「行くって？・・・・レキ・・でも」
シンが言いかけた言葉をレキは強引に終わらし、仲間の元へ行ってしまう。
確かに今の状況が緊迫したものだって解ってるけど・・何か引っかかるんだよな・・・・。
「あ～駄目だ！俺がしっかりしなくっちゃ！！明日にはガーディアルに着く・・・レキと一緒に帰るんだ！」

シリウスからガーディアルまで来るまでに、政府の幹部が次々に狙われていた・・理事は政府との繋がりも深いだろうから、反対勢力を狙ったとしてもこう次々と幹部を狙うなどおかしい・・。
大きな爆発音が響き、少し離れているがもくもくと何本も立ち上る煙は、目的地のガーディアルからだ・・。
ガーディアルの周辺も敵がいると思ったがなく、すんなりガーディアルまで来れたのだが・・・。
「レキ！！」
レキとシンは、ガーディアルに乗り込もうとして近くまで来ていたが、誰かに・・先を越されていたのか・・。
「レキ・・これ・・どうなってるんだ？」
戦争が終わったと聞いても、この光景を見る限りでは・・今だ戦争が続いている様にしか見えない。次々に打ち込まれる大砲や銃弾、どこから来たのか大勢の機械人形・・。
「それに・・この音、何だろ？」
何の音かはわからないが、キィーンと微かに聞こえる音。嫌な音・・・。
「これが機械人形を操っているんだ・・低周波だよ」
「この音で？」
「あぁ、プログラムが簡単なほどその影響は強くでる・・逆に強い

者もなんらかの影響は出るがな・・」
「レキも？」
レキはガーディアルの方をから、シンの方へ顔を向け。
「俺は普通じゃないからな・・お前こそ大丈夫か？」
「うーん、俺も平気みたい」
レキはシンに少し柔らかい表情を向けたと思うと、再びガーディアルの方へ顔を向ける。
「シン、お前はここにいろ」
「え？レキ行くんだろ？俺ももちろん行くよ！！」
銃弾が飛び交う中を、切り抜けながらなんとかガーディアルの傍まで来れた。外は仲間達が援護をしてくれている手はずだ・・けど、俺達には効かなくても・・この低周波の影響が無いとも言えないだろう。
「シン、着いてくるなら・・・ここからは敵陣だ気をつけろ」
「う・・うん」
ガーディアルの中はシーンと静まりかえり、以前来た時とはまったく別の場所の様だった・・・。人一人居ない異様な空気がガーディアルに満ちている。
「・・・誰もいない・・・敵も・・、そう言えば、生徒達はどうなったんだ？
「あぁ、それは大丈夫だ」
レキが短く言うと、どこからか足音が聞こえる。
「待ちくたびれたぞ？」
現れたのは全身頭から靴まで白ずくめのシト、ガーディアル内でも何度か見たことがありどこか得体の知れない男だ。
「シト・・」
「まったく、俺が直々にお前を倒しに来たんだよ、かのお方のためにな！！」
そう言うと同時にレキに襲い掛かってくる。両手に持たれた刃、そして何よりも人並みはずれた動き。

「気付いたか？どうだ、いいだろう？」
自慢そうに自らの改造された肉体を俺達に見せる。盛り上がった筋肉は不気味な形をし、膨れた血管、そして体のあちこちにパイプが伸びている。
「どっ、どこがいいんだよ・・・」
ぼやきに睨まれて思わず、シンはレキの後ろに隠れる。
「新しく生まれ変わったのさ、あるお方の力によってな！間抜けな人間どもとは違う、新たな世界へ導いてくれるのさ」
・・何だよコイツ・・頭おかしいんじゃ・・ってか、絶対おかしい！！
「お前はこのガーディアルの手先ではないのか？」
「はぁ？ガーディアル？冗談じゃない、言っただろ？俺は間抜けな人間どもにはうんざりなんだよ・・だから邪魔なお前らをここで倒させてもらうぜ！！」
素早い動きで攻撃してきたシトだが、レキは刃を受け止めて膝で素早く折る。
「貴様・・・・・」
飛んだ刃の先がシトの頬をカスルと流れ出たのは緑色の液体。衝撃で数個のパイプに傷が入ったそこから異臭が漏れ出した。
「出来そこないのお前は俺には敵わないさ」
シトを残し俺達は静まり返ったガーディアル内の頂上へ向かって移動し、一つの扉の前にまで来た。
「行くぞ」
「うん」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第一部　最終章　ガーディアルの崩壊

最上階にある、理事長の部屋の前に立つと俺達を待っていたかのように自動的に扉が開く。
「クスクス・・」
ガーディアルの巨大なマザーコンピューターの上に座っている少年・・そしてその傍で血を流し倒れているのは・・理事だった・・。
「・・レ・・キ・・」
「アキト！？」
壁にもたれるようにして倒れていたアキトは、同じく大量の血と傷を負っていた。
「ようこそ、伝説のドールと称えられたレキ・D・キサラ」
「・・お前は？」
頭から被っていたマントを取り、腰かけていたコンピューターからふわっと浮いたと思うと軽い音をして降りてくる。
「僕はシュセイ・・新しい世界を創造する者だよ」
シュセイと名乗った少年は肩までの少し長い銀色の髪と、青い瞳を持ち肌は透けるように白い・・表情は柔らかく微笑んでいるが、瞳はどこか冷たさを感じる・・。
「新しい・・世界を創造だと・・？」
・・・何だろう・・この感じ。シンは得体の知れない感覚に戸惑っていた。
「そうだよ、この人間の性で腐りきった世界を蘇らすのさ」
シュセイはとても楽しそうに笑ってそう言う。
「シュセイ、そろそろ時間よ」
扉から入ってきたのは、青い髪をした女性に声を掛けられるとシュセイは素直に立ち去ろうと背を向けた。
「待て！」
「今日の所はこれでお別れです、生きていればすぐにでもまた会え

ますよ・・その時は同士としてか敵かはわかりませんが」
シュセイの姿が消えると、違和感が無くなったことにシンは君の悪さを感じていたが、外から聞こえる巨大な爆発音に意識を向ける。
「「！？」」
ガラス張りになっている壁の側に行き、下を見下ろすと・・・。
「レキ！あれって！！」
下の方では今だ戦いが続いているようだが、その中央で次々に人間達を倒しているのは・・。
「ライメイ！！」
激しく鳴り響く警告音。ライメイに気を取られている内に、死んでいたと思っていた理事がマザーコンピューターの前にいた。

『自爆装置作動開始シマス・・』

「あいつ！！・・・レキ早く逃げないと！！」
レキが理事の側に行った時には、すでに理事は事切れていた・・。
「レ・・キ・・父さんは？」
アキトは足を引きずり、片腕をダランと下ろしたまま近付く。レキは、ゆるく首を横に振る・・。
「・・・・レキ早くココから逃げろ・・自爆装置と一緒に研究施設にある核が同時に自爆するプログラムだ・・ここら一帯は・・」
プログラムを見たアキトは、理事の横に腰を落としながら言う。
「ごめんな・・最初から最後・・まで、迷惑ばっかりかけちゃったな・・」
「アキト・・」
「俺はこの様・・もうすぐ動けなくなる・・レキ早く行け」
「俺にもう一度、お前を殺せって言うのか？」
レキの声は震えていた・・・それを見てアキトはレキに微笑む。

「・・レキ・・違うよ、俺はお前に生かせてもらってたんだ・・・」
アキトの口調は穏やかな者だった・・腕に冷たくなった理事、自分を苦しめた父を抱き、死が迫っていると言うのに・・。
「俺は父さんの事も、自分自身の事にも決着を着けなければならないだけだ・・」
無言のままレキは立ち上がり、アキトに背を向ける。
「ありがとう・・レキ・・」
「行くぞ、シン」
アキトの言葉に少し背を向けたまま止まっていたレキだったが、すぐにそのまま振り向かずに歩いていく。
「う・・うん」
急いでレキを追いかけようとした時。
「レキを助けてあげてくれ・・」
「・・・うん」
シンは少し返事に迷ったが、すぐに一言返事をした・・それを聞いたアキトは本当に優しい笑顔だった。
「さぁもう行って・・」
シンはアキトに頭を下げ、そしてレキの後姿を追っていった。警告音は段々と止み、辺りを不気味な死の空気が漂っている・・。

「父さん・・一緒に行こう・・・母さんの所に・・・これからはずっと一緒だから・・」
冷たくなった父の目を閉じ、固い装甲のガーディアルの天上をアキトは仰ぐ。

「・・・・・・・・・・・・・レキ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんな」

巨大な爆発音と強烈な光の光線・・大気が・・すべてが震える様だった・・・。
シン達はどうにかその爆発域から脱出することができたが、ガーディアルの姿はどこにも無く・・その周りで争っていた者達もすべて無に帰っていた・・。
「レキ！シン！」
「メグさん！！」
走ってくるのはメグや生き残った意志のある機械人形達だった。
「皆無事だったんだ！・・ライメイは？」
ライメイの名にメグの表情が変わる。
「ライメイの奴・・私達を裏切ったんだ・・・」
「え？じゃぁやっぱりさっき見たのは・・・・」
「これからどうしますか？」
機械人形達がレキに指揮を仰ぐが先に答えたのはメグで。
「一先ず撤退だ、今ここにいても何もならないだろうし・・なぁレキそれでいいだろ？」
メグ達が視線を向けると、レキはガーディアルの方を見ていた。
「あぁ」
「それじゃ決まりだね、みんな用意して！」
メグ達が準備に取り掛かり始め場を離れ、シンがレキの方を振り向くと。
「・・・・・レ・・・！！レキ！？」
レキの姿がグラッとふらついたと思うと同時に、レキは倒れ込んだ。
「レキ！レキ！」
急いで駆け寄ったシンの必死の呼び声にも、レキは反応を示さなかった・・・。
そしてレキの頭の中には、再びあの声が響く・・・。
『お前はずっと苦しみと共に生きるがいい・・・それがお前に与えられた宿命だ・・』

第一部END　>>>Next・・・第二部

第一部　最終章　ガーディアルの崩壊（後書き）

これで第一部は終了です。
次回から第二部へと続きます。
こちらも同じく読んで頂けると嬉しいです。

第二部　第一章　鼓動

「どうだい様子は？」
カスガは微笑んで、手に持っていた料理の皿をシンに渡す。
ガーディアルの一見以来、レキは眠ったままだ・・外傷自体はそんなに無いそうだが、どうしてレキが目を覚まさないのかはカスガにもわからないらしい・・。
「ほらちゃんと食べな、最近ほとんど食べてないだろ？レキが目覚めてもあんたが倒れたら意味ないんだから」
カスガは近くにある椅子に座り、レキの状態を簡単に確認していく。
「何してるんだろうね・・」
「え？」
「こんなに思ってくれる人がいるのに、悲しませて・・ったく」
「カスガさん・・・・」
「そう言えば、シン・・あんた昔の記憶が無いって言ってたよね？どこから来たか・・・」
「はい・・それが何か？」
「いや、何でもないよ」
カスガはしばらくレキを見てから、部屋から出て行った。部屋にはレキと2人っきり・・辺りは静か・・だけど・・。
「・・レキ・・」
そっと触れたレキの頬はかすかなぬくもりがあるだけで冷たかった・・。

レキは深い眠りの中で、昔の幻影を見ていた・・。
機械を憎み、戦争を起こす人間達を憎み、何もできない自分を憎んでいた昔・・。
毎日毎日・・機械と人間を殺し・・虚ろに横たわるもの達の中に立ち尽くして・・。

自分が一体何なのか・・自分こそが・・いらないものなのに・・・。

『このまま眠りたい・・・もう何も見たくない・・』

安らかな浮遊感の中、眠りに落ちそうになるレキの耳に羽ばたきの音が聞こえる・・。

眩しいほどの光・・羽ばたきの音が近付いてくる。

『・・・誰だ・・・?』

窓からさしこむ月明かり・・。現実に帰ってきたのかと思うと自分の片手に温もりがあるに気づき、ベットから起き上がるとシンが手を握ったまま眠っていた。

「・・・・・シン」

こう眠っている姿はまだ自分より幼さが残る。シンの髪も、手で触ると柔らかい・・。

「・・ん・・・・・レ・・・キ?」

シンが眠そうに顔を上げレキの姿をみると・・表情が一層に幼くなる。

「心配かけたな・・」

「・・・レキ!」

抱きつかれて、レキは言葉を失った。シンの顔は見えないが、レキはそっとシンを抱きしめた・・微かに震えるシンの体・・。

「ゴメン・・」

謝罪の言葉をもらしシンの背中を軽くたたく。そのシンの温もりがよりこちらに帰ってきたのかという実感を感じた。

それから、少しの間照れ笑いをしながら、カスガ達に目覚めた事を伝えた。カスガはレキを抱きしめ涙を流していた・・。

「まったく・・いつまで私を心配させるんじゃないよ」

「あぁ・・すまないカスガ・・皆も迷惑を掛けた」
騒ぎを聞き付け、部屋にやってきたメグ達にレキが言う。
「レキ・・・良かった気がついて・・」
メグも目に涙を溜めている。ひときしりの再会を喜んだが、夜も遅いので一先ず明日に話と言うことになった。
先ほどレキが眠っていたベットにシンは座り、レキは窓辺の椅子に座る。
「レキ・・・」
「何だ？」
「・・・・・・ううん、何でもない・・」
「そうか？それじゃもう寝ろ・・・疲れてるだろ」
「・・うん・・お休み・・・・」
しばらくするとシンの静かな寝息が聞こえ・・レキは月の出ていない漆黒の夜空を見つめる・・・。
レキはシンに気付かれないように震える手をもう一方の手で押さえ・・・・。

「・・・まだだ・・まだ・・俺は」

「シュセイ」
シュセイは多くのコンピューターの前に腕を組み座っている。
「セラか・・」
薄い色の青い髪をした女性をセラと呼ぶと、セラはシュセイの側に静かに近付く。
「準備の方は順調に進んでおります」
「そう」
次に入ってきたのは、ライメイと知らない数人の人物。
「どうだい調子の方は？」
「はい、同士もちゃくちゃくと集まって来ております」
どの人物も人間と間違うほどで、見た目的にはドールと違いないの

かもしれない。状況や連絡を聞き終えると、他のものはシーンと静まりかえる。
「ライメイ、君はどうだい？何か意見でもあるかな？」
「・・・・・いえ別に」
そう答えるとシュセイは軽く笑い、帰っていいと皆に言うと、皆部屋から出て行った。
「ねぇねぇ、シュセイ様！アイツと遊びたい～」
窓辺にいつの間にか現れていた内の1人、緑のクルクルの髪を揺らしながら言う少年。
「リンジェ」
鋭い口調で言うのは、窓辺に立つもう1人で、青い髪に長身で無表情な青年だった。
「む～だって～」
「そう言えば、シトの件はどうなった？」
シュセイは姿勢を崩さず、2人の方へ椅子を向ける。
「シト？あ～うん、ちゃんと命令通りにしたよ～」
「はい、その後ももちろんその通りに・・」
シュセイは楽しそうにクスクスと笑う。
「・・・さて僕はしばらくココを離れるからセラ、後をよろしくね」
「はい」
「え～僕達は？」
リンジェはシュセイだけが遊びに行くと思い、文句口調で言う。
「ん～そうだね、今まで我慢させちゃったし・・それじゃリンジェ達には狩りを頼むよ」
「狩り・・ですか？」
「うん、愚かな人間達の狩りタイムだ」

「ライメイ」
長く冷たい石段を敷き詰めた廊下を歩くライメイに、柱の影から声を掛ける。

「リラ」
黒い髪を短く切り、男勝りの顔つきの女性リラ。
「他の皆は？」
「皆与えられた場所で静かにいます・・これから本当に？」
リラは詳しくは言わなかったが、ライメイにはその質問の意図がわかっていた。
「あぁ・・もう後戻りなどできないさ・・皆には心配するなと言っといてくれ」
「・・・わかりました・・・どうかお気をつけ下さい・・」
「あぁ」
ライメイはいつもとは違う表情で前だけを向いて歩いていく。リラはその後姿を複雑な表情で見ていた・・。

「レキ様！！」
助かりレキ達と共にシリウスの町に一度退却してきた、機械人形や人間兵士達が屋敷に入ってくる。
「レキ？」
兵士達が何も言わずとも、レキは表情を変えなかったがどこか違う気がシンにはした・・そしてレキはそのまま外へ向かう。
空は厚い雲が多い被さり、夜のように暗い。

『お前は消して、安静の地など有り得ないモノだ・・お前は永久の生の中苦しむモノ・・』

再び脳裏に浮かぶ声が聞こえる。
レキはただそこに立ち尽くしていた・・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第二章　月

シュセイの目前に広がっているのはもくもくと立ち上る煙と真っ赤な炎、そして人間の悲鳴と亡骸。
「あ～あ、新政府の軍隊もこんな弱いんじゃつまんなーい」
リンジェは口を尖らせて文句を言うと、横に立っている長身の男が目線でたしなめる。
「だって～人間なんて弱いんだもん」
「リンジェ、計画のためです」
各地の大半はシュセイ達の手に落ちた、新政府軍も逆らう事は出来ず最近はコンタクトをとろうとしてくるものが多い。
「そろそろかな」
シュセイの言葉に3人は表情を変える。
「やった～！やっと遊べる～～♪」

目覚めたレキにはどこにも異常が無かったので、仲間達とこれからを話し合い、シリウスの街からは離れ、シュセイの手の者に落とされた廃墟の街に拠点を置く事にした。
「ほんとにもう大丈夫なのかい？」
シリウスを離れる時、珍しくカスガはレキに聞いた・・。
「あぁ心配かけた」
「レキ、お前はもう一人前だ・・仲間の荷を背負う時は誰にでもある・・だが自分の生きる道も大切な事をきちんと知っておくようにな」
「わかってる、それじゃ」
・・レキとカスガさんってやっぱりお互いを解ってるんだろうなぁ。
シンは少し羨ましく感じた、自分が何者か何処から来たのか・・詳しい事は何一つ覚えていない。
「シン、どうした？」

「え？ううん何でもない」
話をまったく聞いていない上の空のシンを見て、レキは疲れているのかと思ったようで休むように進めるので取りあえず部屋の方へ移動はするけど・・。

「最近では各地に前の戦乱で功績を上げた者達が、シュセイの元にぞくぞくと集まっている様です」
レキの元には、シュセイを止めようと集まった者、自分の道を彷徨う者の少数が集まっているだけだった。
最初は多くいた仲間も、シュセイ達が行っている周波数は世界中に拡大し、ほとんどの機械人形はその影響でシュセイの元に行くか、戦意喪失した者が多い。
「西の町一件と南の町三件が、すでに連絡が途絶えました」
「クソッ、あいつら皆殺しにするつもりなのか！！」
日に日に悪化する現状に皆苛立ちが見える。
「レキ様どうするんですか！？」
皆の視線が集まり、レキが口を開こうとした時、大きな物音・・足音に気づき見ると。
「あ！」

「ゼェゼェ・・・あのクソヤロー！！」

急に入ってきて、扉を破壊、入ったと同時に暴言・・・。
「メっメグさん・・・」
シンは慌ててメグの後を追って作戦会議をしていたレキ達のいる部屋に入ると、シーンとする部屋の中、シンが何とか声を掛けるとメグの名前に周りは少しざわつく。
「メグ？どうしたんだ？」
「どうしたもこうしたもねぇーよ！あのヤロー・・・あ〝〜ムカつく！！」

「レッレキ・・」
「メグが切れるとこうなるんだよ」
平然と言うレキだが、メグはその間バタバタと暴れ叫んでいた。
・・切れるとこうなるって・・この間は確か酒乱とかっても聞いたけど・・。
「おいメグ」
レキがしばらくしてそう言うと、メグは正気に戻ったように咳払いを一つして近くにあった席に座る。
「あっレキ・・・ちょっとイラついてて・・」
急に態度が急変して俺も驚いたけど、やっぱりレキはしれっとしていた・・・慣れてるんだなぁ・・。
「メグお前、ライメイの所にいたのか？」
「・・・・えぇ」
ライメイの名に驚く周囲だが、それ以上にメグの名に驚いていた。
「あの・・あなたってメグ・・」
「そうよ、お察しの通りだと思ってもらって構わないわ・・・それよりレキ、アイツ本気よ」
さっきの表情とは変わり、メグもレキの様な顔になる・・・それはドールの顔・・。
「どうする？他のやつらも数人集まってるし、形成的には・・・」
「行かないわけにはいかない、俺達は平和の世を作ってきた・・・もう二度と表には出ないと思っていたが、やるべき時にやらなかったら後悔が残る」
レキは自分だけと言わず、俺達と言った。
「確かに相手は同じ機械人形同士、今まで人間に虐げられ差別されてきたのは事実・・・だが、個々の意識と平和を願いここに集まった・・・俺達はシュセイを止める」
レキの言葉に集まった者達の意思が固まる。
「「おーーーーーーー！！」」
「・・・それじゃ皆の意思も固まったようだし、本格的な準備をし

なくちゃね」
生き生きとし出したメグの表情に少しばかりの冷や汗が出たが、有名な指揮官なだけあってシンの目からみてもさすがだと思う。
「シン」
シン自身もメグの命令・・・もといい、メグの指揮で作業をしていた。
「レキ、どうしたんだ？」
レキの所へ行くのはいつもシンからで、レキが自分の所に来ることはほとんど無いためシンは少し驚く。
「いや、ちょっとな・・・仕事中なら悪い」
去っていこうとするレキに、今から休憩するところだと言う。
「今日はすごい満月だね」
「あぁ・・・・」
夜空には太陽の様に大きく淡い光を放っている。
「レ・・・はっハックション！」
静寂を一瞬にしてシンの大きなクシャミが響く。
「あっごめん！」
「これでも着てろ」
「あっうん・・ありがとう」

一瞬シンの脳裏に浮かぶ光景・・。ボロボロのマントがなびく・・・
その人物は・・・・。

「シン？」
「え？あっごめん、ぼぉーっとしてた」
・・今の何だったんだろう・・・見たことのない光景なのに、何か懐かしい感じが・・・。
「大丈夫か？疲れてるんだったら、もう休め」
「ううん、平気だって！コレくらい倒れる俺じゃねぇって」
「・・・ならいいが」

レキの横顔がいつもより影が差しているように思えて、シンはレキの頭を抱きしめる。
「・・・シ・・ン？」
「前にカスガさんに聞いたんだ、レキが小さい頃何かあるとお母さんにこうやって抱きしめられてたって」
「母さんか・・・・シン・・お前には話しとこうと思って」
「何を？」
「俺がドールになった本当の理由」
「でも、それは前に・・・」
シンが言いかけたのを軽く制止、レキは星空を見上げながら話し始めた。

「・・・・・・俺は怖かったんだよ、戦乱で父親を亡くし、母さんと戦火を逃げる毎日・・」

赤い炎が天高く燃え、死臭とすべてが燃えた臭いが漂い・・・。
生きる希望を無くしつつある人間達は狂乱する・・・。
「シリウスの町もよそ者はあまり受け入れてもらえない状態・・・何とか町外れに住んで、そんな時ここも戦火に巻き込まれた」
レキは何かの本を読み聞かせているように淡々と話していく・・・。
「家にも兵が乗り込んできて、母さんを殺したんだ・・・俺はただ怖くてそれを見るだけで・・」
シンはレキの肩に触れると、微かな震えを感じた。
「そのまま母さんを置いて・・・逃げたんだ・・・俺が町に辿り着いた時は町も戦火に巻き込まれ、周りに見慣れた人間の躯が転がっている・・・憎しみと恐怖が俺自身を支配し、何者にも負けない力を欲した」
レキは大きく一息ついて。
「その願いの通り、強い力を手に入れた・・けれど結局俺は壊しただけ・・・・この手で手に入れたものなんて何も無い・・・」

泣きそうだとシンは思った。
レキが本当は憎しみや恐怖でドールとなったのは何となくわかった・・・機械人形達も人間に虐げられたりとしてきた事がつもり、今のこの戦いを生んでいる・・・・。
「・・・・俺はレキの苦しみを全部解ってあげることとはできないかもしれない・・・けど、レキは立派に色々なものを手に入れてきたよ・・ほら！」
シン達が立っている丘の上から見下ろすと、仲間達の灯火が見える。
「メグや皆や、カスガ・・そして俺だっているし！レキの元に集まったのは皆違うかもしれないけど、これはレキの歩いてきた道が間違いじゃなかったって思うと思わない？」
「・・・・・そうだな」
「それに、今のレキだから俺はきっと・・・好きだし、一緒に歩いて行こうと思うんだ」
俺がレキにあれこれ言ってるうちにだんだん解らなくなってアワアワしてるとレキの表情が和らぐ。頭をポンポンと軽く小突かれ、俺達はまた寝転がって大きな月を眺めた。
その柔らかな光が俺達の行く末を照らしてくれてるように思えて・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第三章　もうひとりの母

カスガは1人屋敷の自室にあるお気に入りの古い椅子に座っていた・・。
フェイには使いを頼み、明日にならないと帰ってはこない。町にも人の姿はない。
シリウスの町はどんなに世の治安が悪くても、ほとんどその影響は受けなかった。それは軍や政府の勢力に力を持つドール製作者のカスガの力の影響もあったが、それを自分が望んでかは関係なく・・だがそれでも誰かの幸せを守れるならとそう思っていたけど・・・。

「・・どうやらそれも今日で終わりかね・・まったく言うことを聞かない子だよ・・」

静かに開いた扉の横には、柔らかく笑う銀髪の少年シュセイが立っていた。
「初めまして、我が母なる人・・あなたの事ですから僕がなんのために来たか・・わかりますよね？」
カスガは深い溜息を付きシュセイの方へ向く。
「・・それで私がどうするかもわかってるんだろ？」
「えぇ、けれどあの人はどう思いますかね・・」
けれど、カスガは一度目を瞑り開いた時にはいつものようにまっすぐな表情をしていた。
「・・・・もう私は必要ないさ」
「そうは僕は思いませんけど・・まぁ僕達の計画に醜い人間は必要ない・・けれどあなたは違う・・他の人間どもとは違い優秀な人間・・どうです？僕達と一緒に新世界を作ってみては？」
「新しい世界・・か、お断りだね」
カスガは笑顔ではっきりそう答えたことにシュセイの顔から笑みが

消える。
「あなたも醜い無能な人間の1人ということですか・・」
「そう言うことだ・・お前達の思い通りになんてごめんだね」
首元に静かに向けられた剣にカスガは静かに目を閉じた。

バタバタと足音をさせながらレキは部屋に飛び込む。後ろから付いてきたシンは部屋に様子を見て、一歩後ろに下がる。
血と機械オイルが部屋中の壁や床を汚し、その部屋の中央にはカスガが・・正確にはカスガと思われるモノがうつ伏せに倒れていた・・。
しばらくレキはただソレを傍らで見つめていただけで・・何も言わなかった。
「カスガ様！！」
フェイが遅れて入ってきて・・それを知ったレキは無言のまま部屋から出て行ってしまう。
レキが物音に惹かれるように入った一室は、カスガの部屋の様だった。数え切れないほどの本は、本棚だけでなく床や机などにまで置かれている・・その中に一冊の古びた日記帳を見つけた。
日記帳のページをめくり読んでいくと、そこにはカスガが語ることのなかった苦悩と苦しみが綴られていた。

『戦争が悪化しつつある。研究室で戦争を一時も早く終わらせるための兵器【ドール】を造っているが、果たしてそれがうまくいくのだろうか・・平和な世が早く見たい。』

『研究の成果が上がり始めたが、戦争はまだまだ続くようだ。シリウスの町に人々が集まりつつあるのを見て、他の地区がどのようなのか気になる。しかし研究が完成すれば・・』

『悪夢に思っていたことが現実に起こり、シリウスの町にも戦火の足が伸びてきた。レキの母親キサラもその戦火に巻き込まれ亡くなった・・生き延びたレキもまた瀕死の状態・・私はレキに完成したドールの手術を施した、けれど私は間違っていたのかもしれない・・』

それからの日記は、カスガ自身を呪う文章で綴られている。レキは静かに日記を机に片付けると、屋敷から出て行った・・・。
嘆き悲しむ人々の群れを離れ、レキを探していると・・レキは町から少し離れた所で砂漠を見つめていた。
「・・・シン、カスガどうした？」
「あっ・・うん・・フェイ達と一緒に裏庭に埋葬したよ・・」
レキは一呼吸をおいてそうかと一言言ってまた重い沈黙が続いく。
東の方からうっすらと砂漠の地平線に盛り上がるように太陽の光が見える。
「またこの手で何も守れなかった・・・」
「レキ・・・」
「俺は何のためにこうまでして生きているのか・・何故俺は自分の行き方に迷いを感じるのか・・・・」
初めてだった・・レキが自分に弱音を吐いたのは・・多分他の人でもレキの弱音を聞いたものなんてほとんどいないと思う・・・。
シンは黙っていた・・慰めの言葉、励ましの言葉・・それらは無駄なことだとわかっていたから・・・。
「レキ」
虚ろな瞳で太陽を眺めるレキがすごくはかないものに見えて・・・頭より勝手に口がレキの名を呼び腕でレキを抱きしめていた。
人間の温もりではないレキの体。だけどその胸に残る鼓動は人間と同じ・・この感情だって・・レキの存在だって、人間となんら変わりないのに・・・。

>>>Next

第四章　それぞれの思い

カスガが亡くなってからレキはいつもよりも、自分を追い込んでいる様に見える。
「レキ様・・少し休んだ方が・・」
っと、仲間達が気を使うほどの状態・・。
「ほらほらあんたの出番でしょ？」
心配そうにレキの表情を見ていたシンは、いつの間にか後ろに来ていたメグに突き飛ばされ思いっきり顔からダイビング・・。
「シン、大丈夫か？」
「痛ッあ・・だっ大丈・・」
「ううん、すっごく痛いって！レキ医務室に早く連れて行ってあげないと！」
大丈夫だと言おうとしたシンの口をメグは無理矢理ふさぎ、メグは大げさに言ってレキの背中を押す。
「・・・・ごめん」
医務室でレキに派手にぶつけた額と鼻を手当てしてもらいながら呟く。
「何故だ？」
「だって、邪魔しちゃってさ・・」
申し訳なさそうに小さな声で謝ると、レキは少しだけ表情を緩める。
「いや・・俺の方こそ周りに心配かけていたようだからな・・・」
レキと二人っきりなるなるのは久しぶりで、妙に緊張する・・。
窓辺に掛けられたカーテンが冷たい風でふわりと動く・・前より長くなったレキの前髪が一緒になびく。
出逢ってから1年も経ってないのに、すごく長いことレキと一緒にいる感じするとシンは思う。
・・前から思うけど・・レキと会う前・・ずっと前に俺はレキと会ったことがある様な気がするんだけどな・・。

初めて会った時から、レキに対して感じる何かはずっと前から感じてて、けど俺はレキに会ったって記憶は無い。
「・・なぁレキ・・俺はあの時、レキに初めて会ったんだよな？」
あの時とは、俺が人を殺していた時のこと。
「・・あぁ、あの時が初めてだろ？」
「そっか・・そうだよね」
・・期待はしてなかったけど・・何でだろう・・。
「そう言えば最近こうやって、一緒にいるのって少くなったよな」
「・・そうだな」
こうしてる今も戦火の火は広がり、誰かが死んでる・・・このままココに居たいっと言う言葉はシン自身、レキも誰しもが思ってる言葉・・・でもそれは決して言えない・・。誰かが止めなきゃならない。そしてそれはレキ達にしかできないこと・・・。
「レキってさ、風景とか見るの好きなの？」
「ん？」
「だって、よく窓の外見てるじゃん～それに外で1人空を見上げてたり」
「あぁ、昔ライメイが言ってたんだ・・俺達は籠の中の鳥だって」
「籠の鳥？」
「いつも籠の中で飼われてるってこと。けど俺は思うんだ、籠の中の鳥かもしれないがその籠の扉が開いていたとしても俺達は飛ばないんだよ・・何故だと思う？」
「え？・・・うーん」
「翼があっても空の大きさを感じるとすくんで飛べないから」
シンが考えていると、レキは苦笑混じりで答える。
「・・・その翼は本物の翼じゃなくて、蝋で作られた偽物だから・・それでも飛び立つ者もいるんだろうけど、俺はいつかその翼が溶けて落ちるのが怖いんだ・・さてそろそろ戻るか」
「・・・レキもいつか・・・」
「いや、太陽に近づきすぎる者は太陽に身を焼かれて死ぬ・・まぁ

俺はそっちを望んでるのかもしれないけどな」
そう言ってレキはシンを見ずにテントの方へ帰って行った。
「レキ・・・・・」
・・空を・・太陽を欲したがばかりに・・太陽にその身を焼かれた・・・・・。そんなこと・・。

「コウキ、ココ～？」
「あぁ、あそこにレキがいる」
緑色でフワフワの髪と大きな瞳を持ったまだ幼い少年が聞くと、長身で無表情なコウキと呼ばれた青年が答える。
「やっと強い人に会えるんだ～」
「リンジェ、今回は遊びではなくシュセイ様の命令だ」
「わかってるよ！邪魔なレキ達を倒しに来たんだもん」
頬を膨らませて言うリンジェの頭を軽く撫でると、テントの方へ視線を向け車に装備してあった大砲を一発町に向かって発射する。的確に町へ砲弾することができたが、巨大な爆発音でも人が出てくる気配がない。
「どういう事だ？」
そう言った瞬間に、かすかに音がしてコウキが音に気づき後ろを振り返ると。
「レキ・・」
コウキとリンジェの後ろにはレキとシンが立っていた。
「うわぁ～何だよ」
リンジェは頬を膨らませながら、コウキの後ろに立つ。
「何だよはこっちの台詞だろ！？」
シンがリンジェに向かって言い返す。
「コウキ！あいつむかつく～」
「なっ何だと！お前の方が！」
「シン」
レキに名前を呼ばれ、シンは我に帰り口を閉じる。その間もリンジ

ェはコウキの後ろでシンに向かい、あっかんべーをしていた。
「貴方がレキですね？・・なるほど、シュセイ様が貴方を仲間にしたいと言うのが、解る気がしますね・・リンジェ、帰りましょう」
「え！何で！？シュセイ様の命令無視するの～！？」
リンジェは驚き、声を上げる。
「リンジェ、この人は我々には倒せませんよ」
コウキはレキの瞳を見ながらリンジェに言う。
「一つ貴方に聞きたいことがある・・貴方はシュセイ様の考えを・・なさろうとしている事を知っていると思います、少なくとも今の時代よりシュセイ様の考える世界の方が、良いとは思わないんですか？」
コウキは冷たい瞳でレキに問う。
「・・・・・」
「・・・死の無い、永遠の闇・・それから我々機械人形達を救ってくれるのはあの方だけです」
答えないレキを見て、コウキはそう言った。
「リンジェ、行きましょう」
「え～でも、コウキ・・・」
リンジェは命令を無視すると言うより、帰る事に怯えているように声を出すが、怯えるリンジェの肩を抱いて歩き出す。
「ちょっほんとに行っちゃうのか！？レキどうなって？」
シンは2人の歩いていくのを見て、慌ててレキに言うがやはりレキは答えず。変わりに歩いていくコウキが小さな声で呟いた。
「シュセイ様と貴方のどちらが世界に受け入れられるか・・・興味があります・・けれど、どちらにしても・・・」
レキ達から姿が見えなくなると、コウキ達の前に1人の人物が現れる。
「誰です？」
そうコウキが言い終わる前に、視界が無くなり核となるチップを壊され、その人物の前に崩れ倒れる。

「コウキ!?」
リンジェは怯え逃げ出そうとしたが、相手の速度が速くダメだと思った時、リンジェの前に立ちふさがったのは・・。
「・・・・・レキ」
レキと目の前の人物が静かに睨みあう。黒髪で瞳には光が無く・・足元に広がる砂漠に水の跡が残っていた。

「どういう事だ?・・・空」

空と呼ばれた人物は答えず、その場からすっと消えるようにいなくなった。
「レキ!!こっこれって!!・・・・・さっきの・・」
砂漠の砂に埋もれるように、バラバラになったコウキ。そしてカタカタと震えるリンジェの姿。そして近くには水など湧き出てないのに、一か所だけ水たまりができていた。
「レキ・・水って・・・」
シンにも思い当たる人物がいる・・・・。
「でも、空が何の理由で・・・・・」

「シュセイ・・コウキの電波が消えたわ」
セラがそう言うと、足をくんで椅子に座り、机の上で手を組んでいるシュセイが顔を上げる。
「リンジェとも連絡が取れない。微弱だけど電波はあるようだけれど・・・」
シュセイは少しの間黙り、机の上にあったボタンを押すとしばらくして1人の人物が入ってきた。
「何か用か?」
「ライメイ、もう一度レキの周辺を探ってきてください」
「レキの?」

ライメイはレキの名に少しばかりの表情を変える。
「えぇ、コウキとリンジェの電波の受信が消滅しました」
「わかった、これから行って来る」
「ライメイ、今回は戦いではありません・・・そこの所を・・」
「わーってるって、それじゃな」
セラが言うと、ライメイはだるそうに答えて部屋から出て行った。
「セラ、準備は？」
「後、数日で準備は整います」
「そう・・・・世界の創造まであと少しか」
シュセイは楽しそうに言うが、その表情は泣いている様だとセラは思った。
「それでは、準備がありますので、私はこれで」
「あぁ」
セラはシュセイがいる部屋を出て、人の気配がしない廊下を歩いていると。
「セラ様」
声を掛けられ振り向くと、真新しい機械の体を持つ機械人形がいた。
一言二言の話をすると、恭しく頭を下げて歩いていった。セラはその後姿をしばらく見てから、再び歩き始める。滅多に表情を買えない彼女は、何故か悲しそうに廊下に小さく作られた窓の外を見つめる。
「もうすぐ夜明けね・・」

セラはシュセイに会う前は、戦乱時で他の機械人形と同じように戦いの日々だった。
「何やってんだ!?機械の癖にサボるんじゃない!!」
人間の軍人が負傷を負った機械人形を足蹴にする。
「やめて下さい!修理をすれば・・・・」
仲間の機械人形達が必死に修理をしてくれるよう懇願するが・・。
「ふざけるな!お前らの様な古いタイプをして何の得になる!!」

「そうそう、多くの敵を倒してさっさと壊れてしまえばいいんだ！そのパーツで新しい兵器が作れるしな！」
高笑いをしながら、軍人達は去っていく。
「古いタイプか・・・」
すでに動かなくなった仲間に土を掛けながら、皆気を落とす。戦争に借り出された機械人形の半数は、それまで娯楽用に人間達と共に生きてきたもので・・戦うすべなど知らない・・・。それなのに人間達は戦わし・・そして・・。どんどん戦火は拡大し、多くの仲間が壊れていった。
「どうして、人は私達に感情を作ったの・・・」
セラは戦いは好きではない・・他の壊れた機械達も皆、好きで戦っていた訳じゃない。誰もが人間のために・・けれど人間はそれを当たり前だと考え、非道な事を押し付けてくる。
「戦うだけなら、こんな感情入らない・・ただの・・」
「ただの兵器で良かった？」
聞きなれない声にセラが顔を向けると、そこにはまだ幼い人間そっくりの少年が立っていた。
「まったく人間ってバカだよね～こんな生ぬるい戦いなんて無意味だよ」
「あなた誰？」
「僕はシュセイって名前、君は？」
「私はセラ・・・あなた見かけない人ね」
シュセイは楽しそうに、少し離れた場所から黙々と立ち上る煙を見つめる。
「あんなバカな人間達に使われるなんてゴメンだからね・・・・ねぇ、一緒に来ない？僕と」
正直言うと、セラはシュセイが怖かった・・人間でも無い、そして自分達機械人形とは何処か違うシュセイを・・。
「何をするの？」
シュセイはまた面白そうに笑い、セラに向かって手を伸ばす。少し

の躊躇いの後、セラはシュセイの手を取ってしまう。
「僕は新しい世界を造りに行くんだよ・・・・」
今でもシュセイのあの時の表情は頭に残っている・・・。

「セラ様、すぐにこちらに来てください」
いつの間にか、近くにいた機械人形が言われ窓の外から視線を外す。
それからシュセイと共に生きてきて、ようやく夢が現実になろうとしている・・。シュセイの真意は誰にも解らない、けれど私は・・・シュセイの歩く道が私の道・・・・。
「それが私の覚悟・・・」
「え？何か言いましたか？」
「いえ、何でも・・・」
それが光のない世界でも・・・私は進まなければならない。そうシュセイの手を取った時に決めたのだから。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第五章　対面

「なぁ！レキ！！空は何をしようとしてんだ！？」
シンがレキに詰めよって聞くと、レキは少し目を閉じてから話し始めた。
「空は・・・シュセイを倒しに行ったんだろう」
「どうして空が？？シュセイと何か関係でもあるのか？」
「俺と空、シュセイは一つのモノから生まれたんだ」
「え・・・・・？」
「カスガが俺を造る前にドールはすでに2体完成していて、それが空とシュセイの2人・・・意思を持ち、自ら行動できる半機械の存在・・・けれど俺が目覚める前にシュセイはカスガの元からいなくなった」
「いなくなった？」
「あぁ、シュセイは感受性が強く、人間達に連れられ戦場へは行ったがしばらくして姿を消したっと・・」
「じゃぁ・・空は？」
「空はカスガの元に残った、意思がはっきりしていなくてな・・能力の水もこの砂漠化した世では難しいこともあったが・・」
「でも、さっきの空・・普通っぽくない？」
以前の空は人間味というか、動き言動すべてがどこか変だったように思ってたけど・・。
「空の意志は混濁していて俺やシュセイの様に自我を持っているわけでは無かったんだ・・後に空の意志は新しく作り変えたんだ」
「新しく？？」
「あぁ・・・・空の意志は元々、俺の意志・・・正確には俺の意志だったもの」
「え？どう言う事？？空の今の意思が元はレキの物？？」
「俺をドールに造り変えるには、色々問題があってな・・もともと

人間の意志って言うのは巨大なデータで、すべてを新しい俺に移す事は出来なくて、意志のはっきりしない空に移植したと言うわけだ」
「でも・・・じゃぁ今、空がしている事は・・」
「俺の意志でもある」
「・・・・・・・シュセイは人間を殺し機械人形の世界を作ろうとしている、そして空はそのシュセイを倒しに・・新しく作り変えた意志なら空には空なりの考えがあるんじゃ・・・」
「それは俺にも解らない・・・空には欠ける部分が多すぎる」
目覚めてから空の意志ははっきりせず、その間にレキのデータ・・そして新たなデータで作り変えられた空の考えを俺がどんだけ悩んでも解るはずない。だけど嫌な胸騒ぎが残るのがシンには気になった。

「さて、お前はどうする？」

壊れたコウキを抱きしめピクリとも動かないリンジェに声をかける。その声にビクリと体を揺らし、こちらを向いたリンジェの顔は虚ろな人形の様で・・。
「コウキを殺ったアイツは・・・シュセイ様の所に行くのか？」
「たぶんな」
それを聞くとリンジェはむくりと立ちあがり、コウキの付けていた眼帯を握りしめ歩きだす。
「っちょ！どこに行くんだよ！？」
「ほっとけ」
「っでも・・・」
リンジェの小さな後姿がすごく悲しく見えて・・・でも、人間のように涙を流して泣くこともできない・・・。そんな機械人形がとても悲しい者に見えた・・。
「シン、行くぞ・・俺達も出発だ」
そう言うとレキは、休憩している仲間達の方へ歩きだす。その後ろ

を着いて行こうとしたとき一瞬ぐらりと目の前が歪み何か違う場所が見えた気がした。次に聞こえたのは聞き覚えがある声・・。
「俺を呼んだのは誰・・？・・・・・・・え？俺何言ってんだ・・？？？」
シンは自分が言った言葉に疑問を浮かべながら、レキの元へ慌てて走って行った。

あれから数日、シュセイの本陣であるナーバレイへ向かい車を走らせている。
「レキ様、敵の本陣らしいのですが・・・気配が・・」
ココへ向かう途中も敵や罠などは見られなかった・・・。
「誰もいない？ほんとに誰もいないの？」
メグは訝しげに、先に状況を見に行っていた者に聞く。
「はっはい！本当に誰もいないんです・・」
レキ達は車を降り、本陣のある所へ行って見るが・・・やはりそこは人一人ばかりが、置いてある物もガラクタばかり。
「静か過ぎるな・・・」
メグは眉間に皺を寄せて呟く。
その時だった、仲間の1人が大きな声を上げた。
「わぁー！！！」
「どうした！？」
「てっ敵が！！」
怯えて剣を振り回すが、レキ達の目前には何も見えない。けれど、その仲間の声に共鳴するように他の仲間達も悲鳴を上げ、武器を振り回す。
「メグ」
「一旦ここから離れろ」
叫び声を上げた者達は、建物から離れると落ち着きはしたが瞳はまだ虚ろで体にも力が入らないようで座り込んでしまっている。

「前にガーディアルでの時と同じだな・・機械人形のプログラムに直接電波を飛ばしているのだろう・・」
「レキ、これでは機械人形はダメだ・・・ここから先は人間か・・自分達が行くしか無いな」
シュセイの動きで世界は混乱しているけど、新政府が動いたという情報はない。結局人間はいつまでも臆病で・・平和な世の中でのみ自分達が偉いのだと言い張る。その平和を作っている彼ら達の存在は無視し。自分たちの世界なのにどうして他人事のように眺めることができるのかシンには解らなかった。
「レキどうする？」
「・・・電波にハッキングされそうな者達は他の所へ向かってもらったほうがいいだろう」
「他の所？」
「あぁ・・ここと同じような建物が各地に数十箇所ある・・そこも以前はシュセイ達が使っていたと思われる跡があったそうだ・・」
「確かに・・そこから電波が来ているかもしれない・・わかった、そう言ってくる」
メグの命令通り、仲間の機械人形数人は車に乗り込み走り去った。
「レキ、私はカノンと共に電波の元を切る事にする」
電波を切ると言うのは、ハッキングして機械人形に有毒な電波を止めさせること。
レキは俺と人間１０人と機械人形を５名連れて、シュセイの元へ行く事になった。相手の出方が解らない以上、無闇に人数を連れるのは危険なのでこの人数になった。
「レキ・・・ほんとうに誰もいないのか・・・？」
建物の側まで来た時だった、ギギギィっと言う巨大な音がしたと思うと砂漠の中から機械人形達が現れた。
「レキ様！！ここは自分達が食い止めます！！」
仲間達がそう言って、武器を構え敵に向かっていく。
「シン、行くぞ」

「うっうん・・・レキあの機械達のあの姿って・・」
どう見ても尋常じゃない機械達の姿・・・体の一部には人間の皮膚らしきものや臓器がむき出しに見える。あれがキメラだろうと説明されなくてもシンは何となく気づく。
最上階へ行くまで、敵の姿は無く・・大きな扉は一つだけ。
「入るぞ」
扉を開けると、予想通りシュセイが待っていた。
「やぁようこそ」
シュセイは微笑のまま椅子に座っているが、その眼光は鋭いものがあった。
「シュセイ・・・」
「思ったより早かったね、まぁ残り時間も後少しだし最後に君と話せて嬉しいよ」
「最後？」
シンが思わず聞くと、シュセイは冷たい目線を向ける。
「まだそんな出来そこないを連れてるんだ、君の趣味にけちつける気はないけど・・・やはり君はダメだね」
「・・・シュセイ、お前は何を考えている？」
「セラ」
シュセイがセラと呼んだ青い髪をした女性は、軽く頷き近くにあったボタンを押す。それと同時に巨大なスクリーンが現れ、そこに写されたのは廃棄処分をされる機械人形達のデータ。その映像を見る限り、機械人形達に誰が・・・魂が・・命がないと言えるのだろう・・。
・・シンは自分自身の奥底から生まれる感情に驚いた。人間達にはわからないかもしれない・・でもこの形も崩れたものたちの声が聞こえる。こんな姿になっても・・人間達に好きなように扱われているのに・・・。彼らの声はいつまでも平和と安静の世・・・。
「僕らのやろうとしていること、それは彼らの意思、平和への願い・・けれど人間達がいるかぎりこの世の平和など訪れることはない・・

そうは思わないかい？」
こんな映像や話を聞くと誰だって人間を憎むと思う・・・レキはどう思ってるんだろう・・。
シンはレキを信じていた、けれど・・・レキの本当の心はまだ殻に閉じ込められているように思う。レキは人間であり機械であり、そしてそのどちらでもない存在。
「言いたいことは、それだけか？」
「何？」
「悪いがそれだけなら、即刻ここで終わりにしてもらう」
「貴方でも焦りますか？」
セラは表情の無い瞳でたんたんと尋ねる。
「あぁお前達の計画は自分達の楽園を造る事じゃない・・・世界を壊すことだろ？」
シンは想像も付かないことに驚くがレキはこのことを始から知っているようだった。
「やはり最後まで邪魔をするんですね」
シュセイは少し俯いてから、顔を上げるとシュセイの顔半分は焼け焦げたように爛れていた。
焼け爛れたその部分は確かに人間の肉のように見える・・普通の機械人形は人に似せるために人工皮膚を表面に使うが、シュセイのは・・・。
「貴方と同じけれどあなたとは違う、僕は生まれてた時からこの姿・・・忌まわしき姿」
シュセイ達は動き出したコンピューターによって現れた扉の向こうへ消えてしまった。
レキは一言そう言うと、シュセイの後を追う。
「追うぞ」
「うっうん・・」

「ギャァ！！」
「カノン！！・・ライメイ」
「メグか、こんな所で何をしてるんだ？」
カノンを簡単に殺し、ライメイはいつも通りの表情を向ける。
「ライメイ、もう少しマシだと思っていたけどやっぱり・・・」
「やっぱり？」
「あんたも落ちたものね」
そのライメイを侮辱する言葉に影から人影が飛び出してきそうだったが、ライメイがすぐにその人物に向かって静止を呼びかける。
「あのシュセイって子に従って・・本当にあの子が言う世界なんて信じてるの？」
ライメイは何も答えずに銃口をメグに向ける。
「私達は戦ってきた、平和な・・人間と機械が共存していける世界のために・・けれど結果はこうだった・・確かに私だってレキだって落胆はしたわよ・・・多くの仲間を人間の勝手で失って」
メグはライメイの方へ呼びかけながら一歩一歩近付いていく。
「シュセイを倒したって私達は共存なんて望めない・・けど・・・私達が何のために作られたか、教えてくれたカスガはいないけど・・・ライメイあんたも解っているハズよ・・」
「カスガ死んだのか？」
「何を言ってるの？シュセイに殺された・・・こうなる事位その頭でも解ってたでしょ？」
「ライメイ・・・」
影から出てきた人は、ライメイを困惑した表情で見つめる。
「カスガの望みだろ？」
メグは厳しい表情を向ける中、ライメイはいつも通りの口調でそう言った・・。
「そう・・・やはりライメイあなたを倒すしかなさそうね・・」
メグの体を碧色の光が覆うと次にその光が手に集まり、槍に姿を変える。

ライメイも同じように黄色の光を纏い、手にしていた銃口の引き金を弾いた。

>>>Next

第六章　光の渦

「シュセイ、リンジェの反応が微弱ですが・・こちらへ動いてます・・どうしますか？」
「・・・ほっとけばいいよ」
っとシュセイは特に気にする話題でもないと簡単に答え、コンピューターをいじりだす。
セラの横のテレビ画面には外の映像が映し出されたのは各地の映像。映像には人間共に毒された機械が自分達の同士と戦っている様子。
「醜い戦いだ」
シュセイはコンピューターに向かったままつぶやく。
戦争時シュセイ達はこの世に生まれた・・戦い真っ最中。人間の欲望のために多くの同志が死に・・戦後は人間の身勝手で排除が決まり、処分されていった。
「シュセイ・・」
「セラ心配しなくてももうすぐ完成だ・・それとも心配なのはあの人のこと？」
「はい・・・貴方は敵・・きっとここへ現れます」
セラは表情を曇らせながら言うと、シュセイは顔を上げいつも通りの表情で言う。
「そうなったとしても僕としては何でも無いことだよ、僕らの計画の前には・・どれだけ力を持った者であっても邪魔することなどできないさ」
「シュセイ・・」
「そしてその事を一番解っているのは・・・あなたでしょう？レキ」
電力で動く扉が軽い音をたてて開くと、そこにはレキとシンの姿が。
セラの表情は硬いものだが、シュセイはいつもの笑顔でレキを見つめる。
「もうすぐ新世界の誕生ですよ・・新しい僕らの世界」

「シュセイ、悪いがお前の望む世界を作らせる訳にはいかない」
「これは貴方の意志でもあるはずですよ？すべてが憎い・・何も信じられない・・僕は貴方と同じなのだから」
「・・・だが、お前は俺ではない・・・」
その言葉を聞いたシュセイは面白そうに、声を上げて笑う。
「残念ですね・・・セラ」
セラは一つのボタンを押すと、巨大な壁が動き出し・・その向こうに見えたのは・・。
「核爆弾・・・」
見上げても先端が見えないほどの大きな爆弾があった。
「こんなの世界に打ち込んだら・・お前達だって死ぬだろ！？」
「それこそが、シュセイの目的なんだ」
「え？・・じゃあシュセイ達は世界を・・」
「破壊するんだ・・全てを壊して、新たな世界を創造する・・・それがあいつの望み」
「そんな・・」
シンは驚愕の顔でその巨大な核爆弾を見つめた・・・。

その時だった・・何処からともなく水が流れ込んできたと思うと、ボコボコと水が波打ち段々と人の形を作り上げていく。
「誰だ？」
シュセイは聞くがそれに答えず両手を核へ向けて伸ばすと、掌から意志を持ったような水が核に向かって飛ぶ。
「セラ！」
しかしその水は届く前に、セラの体に当たる直前で弾かれた。
「あれに手を出すことは許しません」
セラと空が見つめ合っている中、シュセイは扉から出ていく。
「レキ！シュセイが」
空達が気になったが、今は核を止めないと・・長い階段を下りて行くと広い部屋に行き着いた。扉は開いていてそこには大量の機械人

形達の躯が転がっていた。
「皆・・チップが抜かれてる」
機械人形の核（チップ）とは人間で言えば心臓や脳にあたる。これがなければも直したとしても二度と動かない。
「あれを作るために、使われたんだろう・・」
「そんな・・あんなものの為に」
「急ぐぞ」
「・・・・・・・・・・・うん」

重い扉を開けると、さっき見たより巨大な核爆弾が目前に広がる。
「シュセイ」
シュセイはレキを待っていたように、核の横にあるコンピューターの上に座っている。
「僕はずっとこの日を夢見ていた・・人間も、人間に造られた機械人形達も・・・僕にとってはどちらが良いか悪いか何て関係ない」
「ただ全てを憎む・・か・・・」
「貴方は僕と同じ存在。なのにどうして・・・人間側に立つ？」
「憎んで・・壊しても、何も変わらない。何も生まれない・・そんなこと解ってるだろう」
「レキ・・・」
「やはり貴方はカスガに余計なことを吹き込まれたんでしょう・・・まぁ今となってはもうどうでもいいことです・・・このボタンを押すと各地に配置している核も同じく世界に降り注ぐ・・そして世界は終わる」
上から大きな音と共にガラスの破片が降ってくる。
「セラ！」
ガラスと一緒に上からセラが落ちてくるのを、シュセイが手を空に向け、手が光ったと思うとセラの落ちてくる速度が和らいだ。床に落ちる瞬間光がセラを包みゆっくりと体が横たわる。
「シュセイ・・・・」

「セラ・・あと少しだ、このボタンを押せばすべてが終わる」
「残念だが、それを押されるわけにはいかない」
俺達が核の前に立ちふさがりコントロール画面にレキが手を突っ込む。慌ててシュセイは手に持っているボタンを押したが・・。
「どうした？何故動かない！？」
「シュセイ・・・・すみません」
セラはシュセイに一つのチップを見せる。それは核爆弾を発射するプログラムを記憶しているチップ。
「貴方をこれ以上苦しめたくないのです・・・貴方はいつでも辛そうで」
「セラ！僕はそんな同情なんて欲しくない！！僕が望むのは・・・」
「シュセイ・・・」
その時大きな地震のように大地が揺れ、そんなに離れていない場所から大きな爆発音が鳴り響く。
「レキ！核爆弾が一つ発射されてる！！」
遠隔装置のこのコンピュータは壊したから誰かが直接押さなきゃならないはずなのに・・・。

・・・・３０分前、各地では。

「みんな死んじゃえばいいんだ・・・」
コウキの眼帯を同じように自分の瞳に巻きつけ、打ち上げられていく核兵器の高温のエネルギーで人工皮膚は溶け金属の組織が現れる。
「フフ・・アハハ」
炎に焼かれながらリンジェの瞳からはオイルが涙の様に流れていた・・。

「どういうつもり？」
「メグ・・・気づいているだろ？この世界の正体・・」

メグとライメイはお互いの刃によって核部分を一発で貫いた。
「色々探ってみたが・・・どうやら別の答えは無いみたいだ・・・」
「だから心中でもすると？まったくお前らしい単細胞の考え方だ」
「ライメイ！！」
「リラ・・・お前もすべて・・・・」
言い終わる前にライメイはその場に崩れ動かなくなってしまった。
「・・・ったく、自分の始末ぐらい自分でしろっと前に言っただろ？・・・・リラ？すまないな、共にいってやってくれ」
「謝らないでください・・最初からついていくと決めてましたから・・」
リラはその場に立ったままじっとライメイを見つめ、メグはライメイを抱きしめる。
「まったく・・・ほんとバカだよ」
その言葉が終るか否かでライメイの体が光辺り一面爆発が起きた。

シュセイは無理矢理にセラからチップを奪いサブコンピュータへ差し込むとためらわずボタンを押す。
「シュセイ・・」
「これでもう止まらない！世界は新しく！！」
シュセイが歓喜の声をあげるが、背後から空がシュセイの胸を自分の体液で作った槍で刺す。
「シュセイ！！」
「くっ！！この出来そこないが！！！」
核のエネルギーで傷を負っていた空はあっという間に蒸発してしまう・・・。
「レキ！！逃げるんだよ！！」
突っ立っているレキの腕を俺は無我夢中で引っ張る。どこへ逃げたらいい？どうすればいい？そんなことが頭の中をぐるぐると回る。

「シュセイ・・・」

ヒューヒューと息が抜けその場に膝をついて苦しそうなシュセイの元へセラが歩み寄る。

「逃げないのか？」

「・・・どこへ逃げろというんです？私はあなたとずっと一緒にいると行ったはずです・・・それが地獄であっても、シュセイと一緒に」

セラは人の母親のように優しい柔らかい頬笑みでシュセイを抱きしめる。

「・・・セラ」

機械の自分でも他者の温もりを感じるなんて・・シュセイはただ同じようにセラを抱きしめた。

「レキ、止まらないで急がないと！！」

「解ったんだ・・・シン、やっと解ったんだ・・」

レキの表情に迷いは無かった。でも俺には何の事か解らない・・・。

「でもこんなことを望んだんだわけじゃない・・・世界が同じ末路を辿ることなんて・・・もう二度と同じことは繰り返さない・・・」

「レキ！？」

「シン・・・これでさよならだ、俺は俺の責任をとるよ」

「何言ってんだよ！！？」

シンの体をレキから発した光で包みこむと急に瞼が重くなる。必死でレキを掴もうとするけど腕が重くて・・・。

「シン・・見つけてくれてありがとう」

世界が光の渦に巻き込まれるのと俺が眠りに着くのとどっちが早かっただろう・・・。

「レキーー!!!」

>>>Next

第二部　最終章　世界の目覚め

シンが気づくと地面に倒れていた・・・。
「ここ・・・・は・・」
耳に聞こえるのは風と砂が流れる音、視界も砂嵐で足元も見えない。
立ち上がり足が進むままに歩みを進めていくと、段々と視界を遮っていた砂嵐が晴れていく・・。
砂嵐の幕が薄れてくると、自分が砂漠の中の丘台に立っているのに気づいた。目を細め辺りを見回すと・・・そこには一面に広がる・・・墓標が並んでいた・・。そしてその一つの墓標の前に座っている、ボロボロの布を巻きつけた人物が佇んでいる。
シンは焦る気持ちを落ち着かせ、ゆっくりとその人物に近付く。一歩一歩歩みを進めるたびにシンの脳裏に次々に蘇る記憶。

世界は今から7年前に戦争によって滅びていた・・。

最終兵器ドール、レキ・ＤＯＬＬ・キサラの力の暴走によって・・・。

すべてはレキが見せていた夢の虚無の世界・・。

けれど、そのレキが願った世界でさえ戦いは消えることはなかった・・。

そして世界の生きとするものはすべて土に還り・・・。

レキだけが世界に取り残された・・。

「・・・・・・・・・・・やっと・・見つけた」

俺は戦乱時に作られた・・最後のドールとして・・・そして新しい機械と人間の狭間の者として・・。
けど、俺はレキによって眠りのまま目覚める事はなかった・・・。
すべてが無に帰った時・・レキの声が引き金として目が覚めた・・・・。

「そうだ、ずっと眠ってた俺に声が聞こえたんだ・・・」
すべての命が絶え、命無いものも深い眠りについた・・・けれどシンには聞こえた。

「レキの声が・・・レキの苦痛の声が・・嘆きが・・」
俺が多くの人間を殺してまで人に・・人間になりたかったのは・・レキ自身がそう望んでたから・・。一度は人間を捨てたレキ・・それでも。

『・・・シン』

シンの瞳からは次々に大粒の滴が落ちる。

「レキ・・・やっと会えた・・・」

抱きしめたレキの体は、今までどう形を保っていたのか不思議なくらいに・・もろく崩れ、砂となって宙を舞った・・。
俺はいつまでもその汚れ敗れた布を抱きしめていた・・・。

シンの背に現れた真っ白な翼が世界を包む様に光を放つと・・・。

空を巨大な雲が覆い・・・雨が降り始める・・・乾いた大地に・・・。

第二部　ＥＮＤ　＞＞＞ｏｒ．．．番外編

第二部　最終章　世界の目覚め（後書き）

ご愛読ありがとうございました。
感想などありましたら書き込みよろしくお願います。

引き続き、番外編はカスガの物語です。本編の主人公たちの登場はほとんど無いですが、機械人形が作られた経緯のお話です。
よければこちらもご覧いただけると嬉しいです。
それでは。

番外編　第一話　物語の１ページ目

世界各地で戦乱が広がっていた・・。
戦乱は１８０年もの間続き、すでに何が正義で何が悪なのか解らなくなっている・・。

暗室の中、青白く光る液晶の画面に映し出される大量のデータ。周りには白い白衣を着た人間が数人、中に置かれているものに視線を集中させている。
「プログラム・・反応、脳波、起動全てオールクリアです！」
その言葉に数人の人間達の歓声があがる。
「成功だ！！」
「まさか成功するとは！これで我々の勝利間違い無しですよ！！」
歓声の中央にいるのは、白衣姿の淡いカールしたピンク色の髪を二つに結んだまだ若い女性。
「カスガさん！さぁ祝杯を！」
その人の名は、若い科学者のカスガ・ミヤと言った。
彼らが研究していたのは、人型兵器で従来のロボット兵士よりも、多くの情報と全ての能力を高めたものであり、この長い戦争の終結の為に研究し造られたものだった。
「これで我々の勝利と共に、戦争が終わる」

正直、その時私自身も戦争が終わると信じていた・・。
生まれた時から、ずっと灰に覆われた空、枯れた植物達の寝床の大地、水はヘドロを含み毒を吐く・・。
幼い自分に、祖母は空は青く、大地には花や木が咲き乱れたと・・ほとんど想像できない物語の様だった。
けれどその時思った・・そんな世界を見てみたいと・・。
その思いが、私の中でいつしか戦争を終わらせば・・また昔の様な

世界になると・・。
だからこそ、この戦争どちらが勝っても負けても良かった・・ただ強い兵器を片方に作れば必ず戦争は終わると。

「カスガ・・何故こんなことを・・」
「姉さん・・・やっとあれが完成したの！これできっと戦争は終わるわ」
カスガの腕を掴み、険しい顔で見つめる自分とよく似た女性は、カスガの唯一の血縁者のハルヒ。
「本当にそう思っているの？」
「えぇ、終わらせる為に私は今まで研究してきたのよ？」
姉を喜ばそうと知らせたのに、姉は驚愕の顔でカスガを見つめる。
「・・力で戦争を終わらせるなんて・・力で力を押さえつけても、一時のものでしかないのよ！？」
「そんな事無いよ、敵を全て滅ぼしてしまえばいいんだから」
「・・カスガ・・大きな力は災いを呼ぶだけ・・どうしてそれが解らないの」
「じゃぁ今のままでいいの！？このまま戦争がずっと続いても！？」
姉はそれ以上は何も言わず、ただ疲れた様子で自室へ入ってしまった。
・・・姉さんは何も解っていない・・このままだと世界が先に壊れるのに・・。
姉さんへの反発なのか、私はますます研究に没頭する様になった。
手元には、完成した人型兵器の功績が毎日の様に飛び込んでいた。

姉と言い合ってから、顔をあわせても話す事は無く。それから数ヶ月が経ったある日・・・。
「カスガさん！！」
血相を変えて研究室に飛び込んで来た、研究員の1人が自分の名を叫ぶ。

「お姉さんが！！」
その言葉に急いで研究室から、姉さんの住む場所まで行くと・・昨日までそこにあった小さな村が・・炭になっていた・・・。
「カスガさんこっちです！！」
小さい頃から、姉と二人で暮らしてきた粗末な家は半壊しており、おそるおそる中に入ると・・・。

「！！・・・・姉さん！！」

家の瓦礫にもたれかかる姉、その胸には剣が一本刺さり・・そのままの姿でことときれていた・・・。
「どうして・・こんなことに・・・」
「我らが作った人型兵器が・・制御を失いこの村を・・・村人は全員・・・」
「制御を失い・・？」
その事実にただ呆然とするだけだった。
「・・はい、力を増すほど兵器の制御は難しく・・敵の妨害磁気を受けると特に・・」
抱き起こした姉の亡骸に刺さるのは、確かに自分が作り出した人型兵器の装備・・・。
しばらくの間休暇を取り、灰になった村で1人土で造っただけの素朴な墓を作り続けていたカスガの元に・・・。
「カスガさん！大変です！！敵の磁気により我らの人型兵器は・・ほとんどが・・破壊されましたとのことです」
数ヶ月の間に、状況は変わり相手も同じような人型兵器を投入してきていた。研究室に戻ったカスガは毎日毎日新しい兵器の政策に打ち込んだ。軍の指揮をとっている者達から日々催促の連絡が入る・・・。
「カスガさん、少し休まれた方が」
「・・・大丈夫」

忙しく何かをしていれば、姉の死を考える事も無い・・・。
けれど私はそれ以上に・・・逃げたかったのかもしれない・・・。
自らが生み出した兵器によっての、姉の死から・・・。

それから2年の月日を経て、新しい人形兵器が完成した・・まだ試作段階ではあるが・・・。
「これらは前のタイプとは違い、攻撃・防御・記憶など人工頭脳を使用していますので大幅に性能が上がっています」
「もちろん全ての性能も制御できますし、攻撃においても強力になっています」
「なるほど・・ではすぐにでもこの兵器を使用したい」
軍の指揮官達はすぐに新しい人形兵器の使用を認めたが・・・。
「待ってください!!これはまだ試作段階です!もう少し様子を見てから・・」
「そんな事を言っている暇が無いのは君も解ってるハズだが?カスガ」
「ですが!もしまた2年前の様な事が起こったら・・」
「2年前か・・君はあの事故でお姉さんを亡くしたそうだが、それは過去の事だろう・・今は戦場において一刻を争うのだ」
「それは解っています・・ですが!!」
「ではすぐに実戦に使用する、早く用意したまえ!!」
軍の指揮官達が研究室を出て行くと、1人の研究員が落ち込むカスガの元へ来る、まだ若い研究員だ。
「カスガさん、どうしてあんな事を?」
この研究はカスガを中心にし、やっとの事で新しいものが出来たっと言うのに、反対するなんておかしい。
「・・いや・・早く準備に取り掛かってくれ」

「は・・はい」
心配そうに声を掛けた研究員はカスガの元から離れて行く。
・・そう、これは私が研究し作り上げた・・戦争を終わらす・・・
もの。
けれど、やはりカスガの予想は当たり・・機能が良くなったがいざ
と言う時の対処が難しく・・暴走した人形兵器が暴発し、多くの仲
間が負傷した。
「この責任を取って貰う!!」
「そんな!試作段階だったものを使用すると決めたのは貴方達です
!!」
軍の上部と研究員達は責任争いで、醜い姿をさらしていた・・。
「私が責任を取ります」
「カスガさん!!!」
「そうか、しかし君の功績を無視して殺す訳にはいかぬ・・そうだ
な謹慎処分としよう、もちろん研究は続けてもらう」
「ありがとうございます、ですが私はもう研究はしません」
「カスガさん!!?」
「研究をしない?なら、君は情報を多く知りすぎている・・死んで
もらう事となるが?それでもいいのか?」
「覚悟はしています」
軍の者達は渋い顔をして、後の報告を待つように言うと帰っていっ
た。
「カスガさん!どうしてあんな事を・・・」
以前もカスガの事を心配していた若い研究員が慌てて近寄ってくる。

「あいつらは私を殺す事は出来ないだろう」
「そんな・・解らないじゃないですか！？もし本当だったら」
「それなら私はそこまでだったと言う事だ・・けれど、人は欲深い・・何処までも尽きることなく」
「・・では、これからどうするおつもりですか？」
「ヤシロ、私はこの命が続く限りこの道から離れることは出来ないと思う・・・私が作った兵器によって死んでいった者達の怨念から逃げることが出来ないようにな」
「カスガさん・・」
「ヤシロ、あなたもここを離れる気はない？」
研究員も欲深い人間の内、この研究室も皆自分の欲に目が無い。だが若い研究員の中のこの青年ヤシロだけは違った、誰よりも優しい人間。
「道連れと言うわけではないけれど、きっとこれから更に戦況は悪化する、そうすればまた多く血が流れる・・あなたにはきっと辛いと思う」
しばらくヤシロは黙っていたが、神妙な面持ちで口を開く。
「すみません、やっぱり僕は残ります」
「そう」
「カスガさん、気を使ってくれてありがとうございます」
「いや、それじゃ元気で」
「・・・はい、カスガさんも」

それから一週間後、軍の報告ではやはりカスガの読み通り、戦火から離れた街へ幽閉となった。
その街は軍の本部から多少離れていると皆平和な暮らしをしている所だった・・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第二話　機械と人の子

この街、シリウスに来てから１０年の月日が過ぎた・・。
いつも軍からの監視付きの生活だったが、それなりに平穏な日々。

「うるさい！！母さんの事を悪く言うな！！」
「何だと！余所者のクセに！！」
騒がしい声が聞こえ、窓から覗くと子供同士が取っ組み合いの喧嘩をしている。
「・・またお前達かい！？」
「うわぁ！カスガだ逃げろ！！」
子供達は私の姿を見ると、蜘蛛の子様に走り去る。
「また、喧嘩？」
体のあっちこっちに擦り傷や打撲の後がある少年、だがその眼光は鋭く強い。

「スミマセン！！」
屋敷で手当てをしていると慌てて入ってきたのは、少年の母親のマーサ。この街の住人とは違う褐色の肌に、真っ黒なウエーブした髪の容姿だった。
「そんなに謝らなくてもいいさ、またあいつらが先にレキに手を出したんだろうしね」
「そーだよ！あいつらが悪いんだ！」
「レキ！まったくこの子ったら・・」
「べぇーだ！」
レキはカスガの屋敷を走って出て行く。それを見たマーサが小さくため息をつく。
マーサとレキは数ヶ月前にこのシリウスに辿り着いた親子。戦火に村を焼かれ世界を転々としていた所だったらしい。

マーサはまだ若くそして優しく賢い女性で、レキは感情を表すのが下手だが根は母を思う良い子だ。
「ここは良い街ですね」
「それは私がいるからだよ・・でもいつ戦場になるかはわからないがね・・」
「いつまでもこのような時間が続けばいいのですが・・」
窓ガラスの向こうは曇り、今にも雨が降りそうな空模様だった。マーサは軽く挨拶をすると、カスガの屋敷から帰って行った・・。
「カスガ様」
「フェイ、どうして人は戦うのだろうな・・まぁ私もその一人だろうが・・平和を祈る思いをいつか間違ってしまって

いたのかもしれない」
カスガの問いに機械人形でメイドであるフェイは何も答えず、ただカスガの表情を見つめるだけだった。
「いや、なんでもない・・フェイ、今日の夕食はなんだろうね？」

「なぁ、それ何？フェイに似てるけど」
レキは他の子供達と違って機械に興味を強く持っていた。それは戦場に出た父親を機械に殺されたからくるものかもしれないが・・。
「そうだね、フェイの兄弟かな」
「ふーん、ねぇカスガは何で機械を作るの？」
「さぁどうしてかな、強いて言うなら私が天才だから」
「はぁ！？？自分で言うことじゃねーだろ！！・・・でもさ・・俺も機械作れる？」
「造りたいのか？」
「・・母さんはダメだって言うけど、強い力があれば母さん守れるし」
レキの考えは昔の自分と同じだと思った。力があれば何でも守れる

と思っていたあの頃・・。
「レキ、今は機械は兵器に使われる、だが本来機械はこのフェイの様に人と共にあるべきなんだ」
「??」
「機械にも心がある」
「心?そんなのあるわけねーじゃん!!あいつらは簡単に人間殺すんだぞ!!俺の親父だって・・・」
そう言うとレキは走り去ってしまう。
「レキには少し難しかったかな、まぁ私も人の事は言えない、まだ諦めきれず機械を造り続けているんだから・・」

「カスガさん!!」
「どうした??」
街の入口が騒がしく人が集まり、街人が次々にカスガを呼びにくる。
「怪我をした人が倒れているんです!カスガさんの名を呼んでいるので知り合いかと・・」

嫌な予感がした。

急いでその場に行くと一瞬誰だか解らなかった。よく見ると白衣を着た見覚えのある顔。けれど2年の月日で人はこんなに変わるものなのかと驚くほど、その人物の表情は老け、髪は白髪に近い姿になっていた。
「ヤシロか!?どうして」
「・・カスガさ・・ん」
腹部や足から大量の血が溢れ、顔色は真っ青、急いで屋敷に運ぶが出血がひどく傷口も深い。これでは・・・。
「僕らはあれからも・・兵器を造・・でも、僕らは間違って・・戦争を終わらすもんじゃなくて・・ただの人殺しの兵器」
「ヤシロ、もう喋るな!!」

「カスガさんこれを・・どうか戦争を止め・・皆、狂ってる・・」
荒い呼吸の中でヤシロはやせ細った腕で私の腕を握りしめた。
胸元から血で汚れた書類を数枚取り出し、震える手でカスガに手渡すと涙を流しながらヤシロから力が抜けた。
「すみま・・・せん・・あなたと・・・一緒に・・・」
最後に昔と同じように笑ったような気がしたが、ヤシロの亡骸は苦労の影が濃く残ってた。
「・・・ヤシロ」
心優しいヤシロがこんなになってまで運んできた書類には、新しい軍の考える兵器のデータだった。
「こんなものが・・・ただの兵器じゃないか!!」
人間の脳にチップを埋め込み、人体を改造した命令通りに動く人型機械・・さらに筋肉強化剤などの投与。あらゆる裏の研究についての記載してあった。
「ヤシロ、やはりあの時無理矢理にでも共に連れて来れば良かった・・」
それから5年の間、カスガはほとんど休む事も無く何かの研究に打ち込んでいた。

「カスガ様ソレハ？」
カスガが部屋に閉じこもってからずっと鳴っていた音が消え、フェイはそっと扉を開けると、憔悴したカスガの側に2人の者が横たわっていた。
「ヤシロの研究書類を元に造ったんだ」
「デハ、ソレハ機械デスカ？」
「いや、正確に言えば人間と機械の狭間のものだよ」
「機械ト人間ノ狭間デスカ？」
フェイは人型をしているとはいえ、やはり言葉やしぐさなど機械と解るが横たわっている3人の見た目はどこから見ても人間に見える。
「デスガ、カスガ様ハモウ造ラナイト」

「あぁ確かに言った、だが人は一度その手を汚してしまえば何も感じ無くなる・・この戦争も同じだ・・このままだとずるずると互いを殺し合い、それをなんとも思わなくなる」
「・・・」
「この子達はそんな時代を終わらしてくれると・・」
横たわる人型の閉じられた瞳にカスガが軽く触れると、瞳が開き2人が目覚める。1人はまだ眠ったままの状態だった。
「お前達の名前は、メグとライメイだ・・・空(ソラ)はまだ無理か・・」
最初に造られたのが浅黒い肌に黒い髪に瞳のメグ。男のライメイ、そして空と呼ばれる髪の長い女。
「どうだ調子は?」
「大丈夫です」
メグはカスガの問いかけにそう答えたが、ライメイはだるそうに体のあっちこっちを動かしている。
「2人ともしばらくの間はテストを受けてもらう」
「はい」
「マジかよ・・・」
ライメイは文句はいうものの、カスガの指示には従う。
2人は亡骸を元に作ったもの。体と脳は亡骸から使える部分を使い、足りない部分は人工的に作り出した。体の強化や自然治癒力の強さを高めるために体の内部は人工的につくられた組織など色々と作られている。
見た目からも人間と間違うほどだが・・それでも彼らが機械であることは事実で・・これから生きていくために多くの事を知らなくてならなかった。

「カスガ!あいつら何?」
あれから5年が経ち、レキの容姿もずいぶん大人になっていた。レキは外で子供達や家事などをする新しい住人を見つめる。
「機械と人間の子かな」

「機械と人間の子？何それ・・・ねぇあいつらも戦争行くの？」
「あぁ・・多分ね」
「じゃぁあいつらもやっぱり兵器なんだ」
「レキ、あの子達は違うんだよ、あの子達は」
「じゃあ何だって言うんだよ！俺には機械の造り方教えてくれねーのに、自分は兵器作ってんじゃんか！！あいつら戦争に行けば、人間殺すんだろ！俺の親父のように！！」
「レキ！！」
叫んで部屋を飛び出すレキを追いかける事は出来なかった・・。
「カスガ、あの子」
「聞こえていたのかい？あの子の言葉はいつもココ（胸）に痛いよ」
椅子にもたれかかりながらカスガは呟く、メグは自分を睨んで走っていってしまった幼さの残る少年の後姿を見つめていた。
「メグ、ライメイを呼んできてくれ・・話がある」

2人揃うとカスガは険しい顔で話始める。
「明日からお前達には戦場に行ってもらう、嫌なら無理にとは言わない・・それをお前達なら自分で判断出来るはずだ」
密かに研究室にいた頃の連絡線を使い、メグ達の事を話していたのが今日電報が届き、軍に加わってほしいという事になったのだ。
「行きます」
ライメイは無言で腕を組んで話を聞いていたが、ため息をついて同意のように頭を振る。
「・・そうか、向こうにはお前達の事は話してある、だが良い待遇を受けるとは思うな・・今、人は皆病んでいる、それをお前達に止めてほしい」
「解ってます、一刻も早い戦争の終結・・・それがあなたの望みなのでしょう？」
カスガは腕を広げ2人を抱き締める。
「お前達は私の子だ・・戦場に送りだしながら言っても意味無いが、

私はお前達の幸せを願っている・・お前達が私を憎むようになっても」
「カスガ、そんな事言わないで下さい・・大丈夫ですから」
メグがそう言ってカスガを抱き締め返す、ライメイは何も言わずカスガを見ていた。
「それじゃ行って来ます」
「・・あぁ何かあればすぐに知らせ」
軍の使いが来て2人は車に乗り砂埃舞い上がる砂漠へと消えた。
「カスガ様ヨカッタノデスカ？」
「・・・」

＞＞＞Ｎｅｘｔ

第三話　緋色

それから1年が過ぎ、カスガが造った新型の人間兵器は5体になっていた。
「カスガ！」
「あぁ？何だこのガキ」
「なっ！？離せ！！」
長身の男に首根っこを掴まれ、足が浮いたままレキはバタバタと暴れる。
「まったく騒がしい・・何してるんだい？」
「カスガこのガキ誰？」
「ガキって言うな！！」
「2人共やめな」
その一言で一応長身の男はレキを地面に落とす。
「痛てぇ！」
「ライメイも乱暴なことするんじゃない」
「コイツが屋敷の周りウロウロしてるからさ、一応捕まえたんだぞ？」
「はぁ・・レキはライメイを見るのは初めてだったね」
「ライメイ？？」
ライメイと呼ばれたのは、長身の男で逞しい体つきだが言葉使いは乱暴だ。
「カスガ、こいつも・・」
「あぁそうだ」
以前にカスガが言ったことを思い出す。人間と機械の狭間にいる存在だって。正直見た目では人間と同じように見える・・けど前にカスガがこもっている部屋を覗いた時に少しだけ正体を見たから・・。それに力や動きなども人間とは全然違う・・・でもやっぱり見た目は人間にしか見えないとライメイを見ると、ライメイは鼻で笑った

様な表情をした・・。
「何見てんだよ、ガキ」
「だから、ガキじゃねぇって言ってんだろ！」
「へぇ、どっからどう見てもガキだと思うけど？」
そりゃ自分より２０ｃｍも高いライメイからすれば子供位の自分だが・・・その口調と表情がすっごくムカつく。
ライメイは一度戦前に出たそうだが、故障で街に帰ってきた。
「おい、ガキ俺がいなくなっても泣いたりすんなよ？」
「だれが泣くもんか！！さっさと行けよ！！」
ライメイはバカにした笑いだったが、最後の一言だけ言う時は見たことのないような真面目な表情で小さく言った。
「・・・カスガのことを頼む」
ただその一言だけ・・・。

それから1年後、カスガの不安・・いや誰もの不安の通り・・・戦乱の荒波が押し寄せてきた。
「カスガ様！」
フェイが外の音を聞き、カスガの部屋に入って来た時は・・カスガは部屋で目をつぶり座っていた。
「街ニ火ノ手ガ上ガッテイマス・・攻メテキタノハ、軍ノモノノヨウデス」
「やはり来たか・・・」
椅子から立ち上がり窓の外を見ると、街が焼かれる色で真っ赤に染まっていた。

「母さん！！」
戦火が町の近くまで来ている、慌てて気づいてレキは母を呼びに行った。
「レキ！来てはダメ！！」
母の悲痛な声が響く、静止の声など聞こえるはずもなく扉を開ける。

「レキ！早く！早く・・逃げて！！」
扉をこじ開け、レキが部屋の中に入ると・・・。
「！！母さん！！」
母を撃ったのは機械人形・・後ろでは人間達が命令を下している。
「・・レ・・逃げ・・」
力なく落とした腕を・・体温を失い冷たくなりつつある母の体・・。
駆け寄ろうとしたレキの身体を無慈悲な機械人形達は跳ね除ける。
銃弾が横腹に当り・・蹲りながら、近くにいるのに手の届かない母と迫ってくる機械人形達の姿・・。
扉をけたたましく叩く音に、フェイが扉を開ける。
「カスガ様！！！」
居間のソファまで運ばれたレキは全身傷と血だらけで・・・。
「レキ、何があった？・・マーサはどうした？」
「母さんを守れなかった・・・アイツらに・・」
空気の通り道である身体の器官に穴が開いているかの様に、レキの言葉にはヒューヒューといった音が混じる。
「・・・レキ」
「・・俺を・・機械に！・・誰にも・・負けない・・力を！！」
ピッ・・ピッ・・と響く機械音にレキは目を開ける。
どうやってカスガの屋敷まで辿り着いたのか分からない・・・。
「気がついたかい？」

「・・・カス・・ガ？・・・」
ぼやける視界の中・・カスガを見た気がする。
あの時・・ほとんど感覚のない顔に・・冷たい水が一滴落ちて来たように思えた・・。
「絶対死なせたりしない・・」
「カスガ様」
「たとえ・・・レキ、お前がこの先私を憎んだとしても・・・私は・・」
薄れる意識の中・・母さんが銃撃に倒れた瞬間を、脳裏で何度もスローモーションの様に見ていた・・・。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・母さ・・ん・・」
＞＞＞Ｎｅｘｔ

第四話　なくしたもの

「手術は成功した・・・・だが、やはり私は・・残酷な事をしてしまったんだろうな・・」
カスガは数日にもわたる作業に精魂つき、ソファに座るとすぐに意識を手放してしまった・・・・。
「カスガ様・・」
傍らで助手をしいてたフェイが心配そうにそっとカスガに毛布をかけた。

その頃、レキは深い深い眠りの中にいた・・。
夢の中は温かくて、いつまでもそこにいたいと思えた。
けれど何かが俺を呼んでる・・。
それが何か解らない、だけど目覚めなきゃって・・・・。
夢から目覚めようとした時・・誰かが俺を見てた。
その人の顔は解らないけど・・・・優しそうな女の人で、俺を見てたんだ・・。
何故かすごく懐かしくて、そしてすごく悲しかった・・・。

「・・・目が覚めたか？」

一番最初に目前にいたのは、白い白衣を来た女の人だった。

「・・・・・・・・・・・・・ここは？」

「私の屋敷だ、どうだ気分は？自分の名は言えるか？」
その問いにしばらく考えてから”レキ”と名乗った。名乗ったというよりは、その言葉が一つ頭に浮かび口が勝手にその言葉を言っていた。

「身体を動かしてみろ、もし不具合があるなら治すから」
言われたとおり身体を起こしてみると、長い手足に少し伸びた髪・・。身体は違和感を感じるが、動かしてみると湧き出る力を感じる・・・。

「俺は貴方に造られた・・・？貴方が俺の主人？」

その問いに白衣を着た女の人は一瞬悲しそうな表情をしたような気がした。
「・・そう、私はカスガ・・お前を作った・・」
目覚めたレキは、以前のレキとは違う・・。人間の頃のレキはまだ幼さの残る子供、だが今は青年の姿になり・・昔の面影が少し残るだけの姿。言葉遣いや仕草、行動など時にふと以前のレキに似た部分を見ることはあっても・・今のレキはやはり別のモノもう人ではない・・・。

「カスガ・・・俺、行くよ」

レキが目覚めてから2年が経ち、戦況は以前悪化するばかり・・。耳に飛び込んでくる情報も眉をひそめる話ばかりだ・・・。
そんな時、予想通りとも言えるレキの一言だった。
「レキ、解っているのか？戦場に出ると言う事を・・」
今のレキには以前の記憶は断片的にしか残っては居ない・・・。母の記憶も曖昧、自分の事も・・・。
「それでも・・・行くのか・・・」
「あぁ、この力があれば戦争を終わらせる事が出来る・・・」
心は止めたかった、だが人間でもなくなったレキの存在・・存在理由それは・・。
「・・・わかった、フェイ用意を」
フェイはすでに用意しておいた旅支度をレキに渡す。

「カスガ、俺にはよく解らないけど・・母親と言うものが人間にはあると聞いた・・それはきっとカスガみたいな人の事を言うんだろうな」

そう別れ際に言ったレキの言葉と表情は今でも覚えている・・。
何体もの自らの手で造った者達を戦場へと送った、それでも止まない戦火の火・・。
どれだけの人が死んで、どれだけの人が涙を流した？
誰が戦いを起こし・・誰が得をする？

そんな日々をどれだけ考え過ごして来たことだろう・・。
「カスガ様・・本当ニヨロシイノデスガ？・・・機械ニナルコトナド・・」
だが、私は死ぬわけにはいかない・・全てを、この戦争を見続け・・自ら作り出した者達を見続ける事こそが私に出来るただ1つの事・・。

「フェイ、初めから決めていた事だ・・後は頼む」
「解リマシタ・・」

少しの間目を瞑り・・そして次に目覚めた時はレキ達と同じモノになる。

「カスガ様、レキヲ見カケタト言ウ情報ガ入ッテイマス・・」
あれからどれだけの時が経っただろうか・・戦争が一応の終結を向かえカスガが造った者達に会う時も出来た。
だがレキだけは忽然と姿を消してた・・破壊されたわけではないのに、誰一人としてレキのその後を知る者はいなかったのだ。
「レキ・・やはり生きてたか・・」
「カスガ様、会イニイキマスカ？」
「いや・・・もし会う運命なら、わざわざ行かなくても会うことに

なるさ」

そのカスガの予想は間違ってはいなかった。
数ヵ月後、レキの情報は次々に耳に入ってくるようになり・・それからされに数ヵ月後カスガはレキと再び会うことになった。

「カスガ」

自らの肉体も今や生身の部分はほとんど残ってはいない・・。
だがレキの姿を見た瞬間涙が零れそうな感覚が蘇ってきた。
けれどそれは感覚だけ、実際涙が出ることはないのだ・・・。

「入ったら？」
カスガの声にレキはカスガに表情を動かした様だったが、すぐに元の表情に戻り屋敷に向かった。
戦火の中、戦場へ向かったレキとは明らかに様子が違った。
「なぁライメイ、カスガ・ミヤってどんな人なんだ？」
だけど、レキの側にいる少年を見て私は安心した。
レキはもう1人じゃない・・ちゃんと居場所を見つけてるんだと・・。

＞＞＞Ｎｅｘｔ

番外編　最終話　願いの光

「フェイ、お前はしばらく隠れておいで」
「カスガ様・・・」
心配そうな表情をするフェイに笑顔を向けて、フェイを送り出す。
フェイがいなくなり、静まり返る屋敷の中・・静寂だけがやけに耳に付く。
そして・・しばらくするとカーテンが動き、冷たい夜風と共にまだ幼さの残る姿の人物が1人現れた。
「こんばんは、我が母なる人・・あなたの事ですから僕がなんのために来たか、解っていますよね？」
カスガは深い溜息を付き、座っていた椅子から立ち上がる。
「・・それで私がどうするか、あんたにはわかってるんだろ？」
「えぇ、けれどレキさんはどう思いますかね？」
昔ならレキを置いて・・いや、自分の罪の重さでレキを置いていくことなんて考えられなかった・・。だが、今は違う・・・。
「・・・・あの子にはもう私は必要ないさ」
「そうは僕は思いませんけど・・・まぁ僕達の計画に醜い人間は必要ない・・けれどあなたは違う・・他の人間どもとは違い優秀な人間・・どうです？僕達と一緒に新世界を作ってみては？」
カスガはシュセイを見つめ、表情は笑顔だがきっぱりと「お断りだね」言う。
そのカスガの言葉を聞き、シュセイの顔から笑みが消える。
「あなたも醜い無能な人間の1人ということですか・・」
「そう言うことだ・・けれどお前達の思い通りにはならないさ」

少しの沈黙の後、シュセイが懐から出した鉄の剣が瞬きもしない内に、カスガの身体を貫く。
貫かれても今のカスガの体から人の様な血が出ることは無い・・・。
腐りかけ少しばかり嫌な臭いのするオイル、そして人工的に作られた細胞が切られバチバチと音を立てる。

「何です？命乞いですか？」

「ふ・・ここまで生きてきて、今更命乞いなんかするもんかよ・・・」

痛覚など無く、ただ崩れていく体を感じながらカスガは言葉を紡ぐ。

「シュセイ、あんたがやろうとしている事は・・以前私自身やろうとしたことだ・・だがそんなことをしても結果は何も変わらない・・・」

「それは貴方だからでしょう？僕は違う」

その言葉に、カスガは怒りでも無く、悲しみでもなく・・ただ微笑むだけだった。
どれだけ悔やんでも、どれだけ憎んでも・・決して消せないもの。
どんなに変わらないと知っていても、変えようと思ってしまうこと。

「何を笑っているんです？これから死ぬと言うのに・・・」
「死ぬ？・・すでに機械となった肉体に死があるのか」
「・・・・」
「いや・・シュセイ、お前も人と同じ・・・」
「違う！僕は・・・・・まぁいいです、貴方の死が彼にとって意味があるのなら」

流れるはずの無い涙が瞳から零れ落ちる・・。
残酷な運命に生きるようにしむけた自分の罪・・。
その醜く可愛い子供達を置いて逝く自分の後悔・・・。

どうか願わくば・・彼ら光を・・・。

シュセイが去った後も少しのかすれた意識は続いていた・・。

「カスガ様・・・・」

しばらくしてカスガの傍らには隠れていたフェイが姿を現した。だがもうカスガにはそれを認識することも、喋る事もできなかった。それからどれ位の時間が過ぎただろう・・。外が騒がしくなり、ドタドタと言う音と共に部屋へ入ってきたのは・・。もっとも深い運命を背負わせてしまった・・大切な子供・・。

「・・・・・カスガ!!」

それでもやはり私は醜い人間なんだろう・・。
それでも・・・お前が生きている事がこんなにも嬉しいのだ・・。

地獄に行く前に、マーサに謝らないとな・・・。

『・・・・・レキ

どうか・・・お前の未来に光があらんことを・・・。』

ドール　>>>Fin

番外編　最終話　願いの光（後書き）

これでドールの物語は終わりです。
次回からは登場人物やあらすじのざっとした紹介を簡単に載せる予定です。
ご愛読ありがとうございました。

おまけ？

＞＞＞最終章の訳

いつの間にあんな終わり方に？って方もいると思いますので、簡単に文を書きます。

今まで長々と書いてきた物語は、ドールである「レキ」が自らの力の暴走によって滅ぼしてしまった世界の記憶の破片。
けれどレキはそれを信じたくなかった・・信じられなかった。
虚無の中、レキは独り夢を見始める・・。
それはレキや他の人々が望んだ平和な世界。
けれど夢の中でさえ、レキの予想を超え次々に勝手に世界は動き出す・・。

レキ自身は夢だと言う事を忘れていたけれど、所々に書いた誰の言葉か解らない所で少々思い出していたんです。
誰の言葉か解らないのは、レキが滅ぼす前にレキ自身が回りの人間達に言われていた言葉です。

シュセイ達の正義もレキの中にある一つの思いで、シュセイ側に付いたとしたらこの物語は大きく変わっていたでしょうね（＾＾；）
けれどレキは、自らの理想の夢を自らの手でもう一度世界を滅ぼす事を選ぶのです・・。

レキは夢から覚め、目の前に永遠と並ぶ墓標にただ思いをはせるだけ・・。

っと、とっっっても暗い！（汗）

途中で登場する「シン・スゥー」は、最後の新型ドール。
だけどシンは目覚めさせなかったのは、当時は戦争・・シンが目覚める間もなく世界の滅びが来てしまう。
シンにとって目覚めのキーワードはレキの声。

世界を壊した時、レキは無意識にシンを呼び、シンは目覚めてレキ自身を探し始める。

そしてシンには唯一の能力、創造の力、目覚めの「生」の力を持っていて、最後のシーンでは、古い時代の最後の生き残りのレキが消える事によって、シンが新しい世界を目覚めさせたっと言う事です。
レキが旧の時代の最後の生き残りで、消えたらシンが新しい世界を造るっと言うのは妙な感じがしますが・・・。

そんな矛盾を書きたかったのですが・・どうでしょうか（汗）

おまけ？（前書き）

すっごく簡単な登場人物紹介（汗

おまけ？

―――主な登場人物――――――――――――――――――――――――――

○レキ・D・キサラ
本作の主人公。元人間から自らの意思でドールになることを選ぶ。
戦争時に伝説と呼ばれるほどの力の持ち主だが、戦後彼は表に出てくる事はなかった。

○シン・スゥー
レキとカスガによって作られた最後のドール。
目覚めるキーワードは「レキの声」。
全てに眠りを与え、全てを創造する者。

○カスガ・ミヤ
ドールの製作者。レキの親的存在。
天才的な科学者自らも機械化されて姿は幼い少女の姿をしている。

○ライメイ
ドールの1人。レキをライバル視している盗賊団の頭。
ライメイ自身にも考えがあり、そのため第二部では、シュセイ側に付く。

○メグ
ドールの1人。ライメイ・レキと共に戦争に参加。現在レキに片思い中？

―――第一部――――――――――――――――――――――――――

○アキト・フジタカ

レキのガーディアルでの友人。
父である理事に認められる為、薬の実験体として参加したが・・・。

○フジタカ
ガーディアルの理事（実はアキトと同じ苗字。名前は・・）
アキトとは実父にあたる。世界を我がものにしようと力を欲したが・・。

○ギルバート・ゼミク
ガーディアルでの友人。

○ミツキ・S・セイジ
ガーディアルでの友人。

○フェイ
カスガの手助けをする旧型メイドの機械人形。

○シト

―――第二部――――――――――――――――――――――――
○シュセイ
計画の首謀者。人間を憎み、理想世界を造ろうとしている。

○セラ
シュセイの傍らにいつもいる、計画の副官。
いつも悲しそうな表情が印象的だが、シュセイの為に命をかける女性。

○空（カラ）

謎の機械人形。水を操る力を持つ。
彼女に存在は謎であるが、彼女自身何かを求め、何かを起こそうとしている。

○リンジェ

○コウキ

おわりに。

＞＞＞あとがき

ドールもようやく完結することが出来ました。
かなり長々と書いてしまいましたが、いかがだったでしょうか？
敵も味方も、人間も機械も、それぞれに思い描いている世界はある。
どちらも平穏な世界を造りたかった・・それだけ。
戦争が生み出した兵器達の思いを込めて、書いてみた作品です。
意見や感想があれば是非掲示板へお願いします。
最後に感想まで読んで下さってありがとうございましたm（__）m

＞＞＞ちなみ・・。

ＥＤは最初から３通り考えていました。
？今回書いたＥＤ。シンだけが生き残る。
？シンもレキも生き残り、２人で新しい未来を歩む。
？シンはレキの破壊をするためにレキの元に来たが、記憶を失い、レキの夢へと引き込まれた。

みたいな感じです（＾＾；）
おまけっって感じでも無いですが、りょくは周りの友人達にどの終わり方がしっくりくる！？っと聞きまくってました（苦笑）
皆さんはどのＥＤが読みたかったですか？（＾□＾）
もし別のＥＤを予想していた方は是非教えてください～今後の参考に（真剣／笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9304n/

ドール

2010年11月3日16時12分発行